

自六子  
至九子  
上手の  
泣手

附實戰解剖篇

特116  
825

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特116  
825

五段 小岸壯二著

自六子  
至九子



上手の泣手

附實戰解剖篇

大正  
12.7 7  
丙寅

東京大阪屋號發行  
斯文館



五 段 小 岸 壯 二

## はしがき

編者の許に左の如き書面を寄せられた奇特者があつた。

小岸五段の講述に係る置碁必勝法は同五段の考案より出でたるものにて其一手くの意味頗る深遠にして到底初學者の思ひ及ぶ所にあらず例へば其一ツを知るも最後までの方法を知らざる時は何の要もなさず即ち小學校の生徒が大學の講義を聴くと等しき觀之れ有り候云々希くは講義は實戰を基準として掲載あり度云々

一應尤もな意見ではある。然し實戰細評も亦慥に上達の一方法には相違ないけれども、就中定石を覺ふるは肝要の事である。人生萬事一定の定石がなくてはならぬ。其の定石を信條とし基準として云爲行動するに非ずんば信あり義あり禮あり文ある共同生存を爲すことは出来ぬ。古今聖賢の教理は即ち我等人類の遵奉すべき定石を示されたものである。小學生の學ぶ所も中大學生の學ぶ所も皆此の定石に外ならぬ。然るに定石はむづかしい、實戰に就て細評を聴く方が捷徑である。と云ふは實を先にして理を後にするもので本末を顛倒した學び方である。小岸先生に限らず他の諸先生の説く所の一手くは要するに此處では恚う

打つべき筋のもの、彼處では恚う打つが形であると云ふ一定の道理を教ふるも、  
 ので、此處で此手を打つた以上は終局まで斯くく打たねばならぬと云ふ死法  
 否な一定の標準がある譯ではない。只其の筋や形を覺ふるは左程難事ではない  
 況や實戰細評とても此手は筋でない、彼手は形でない。かう打つが本手、あゝ打つ  
 が手筋であると云ふことを教ふるのであるから、歸する所は同一で、兩者併せ學  
 ぶべきものである。大江匡房源義家を評して曰はずや「彼ハ將才アリ惜ラクハ兵  
 法ヲ知ラズ」從者之を義家に告ぐ、義家謂へらく「其レ或ハ之アラン」と匡房の出  
 づるを見て、車に就て之を拜す。禮甚だ恭し、遂に之を師とし、兵書を學ぶと、我等が  
 競うて定石を學ぶも亦此に在りと謂はねばならぬ。

大正十二年六月於天現寺橋北

編者識

自六子 上手の泣手

附實戰剖解篇

目次

△六子 第一局	自一	至二
第二局	自三	至四
第三局	自五	至六
第四局	自七	至八
第五局	自九	至一〇
第六局	自一一	至一二
第七局	自一三	至一四
第八局	自一五	至一六
第九局	自一七	至一八
第十局	自一九	至二一
第十一局	自二二	至二三
第十二局	自二四	至二五
第十三局	自二六	至二七
第十四局	自二八	至二九

△七子

第一局	自三〇	至三一
第二局	自三一	至三三
第三局	自三四	至三五
第四局	自三六	至三八
第五局	自三九	至四〇
第六局	自四一	至四二
第七局	自四三	至四四
第八局	自四五	至四六
第九局	自四七	至四八
第十局	自四九	至五〇
第十一局	自五一	至五二
第十二局	自五三	至五四
第一局	自五五	至五六
第二局	自五七	至五八
第三局	自五九	至六〇
第四局	自六一	至六二
第五局	自六三	至六四
第六局	自六五	至六六
第七局	自六七	至六八

△八子

△九子 第一局	自六九	至七一
第二局	自七二	至七四
第三局	自七五	至七七
第四局	自七八	至七九
△二子局	自八〇	至八三
△三子 第一局	自八四	至八五
第二局	自八六	至八七
第三局	自八八	至八九
第四局	自九〇	至九一
△實戰解剖篇		
第一局	自九二	至九七
第二局	自九八	至一〇二
第三局	自一〇三	至一〇六
第四局	自一〇七	至一〇八
第五局	自一〇九	至一一一

自六子 上手の泣手 附實戰解剖篇  
至九子

五段 小岸 壯 二 著  
六子 第一局

●第一 黒●の變化。

白●の打込みある此場合●と備ふるは最も適切の配置であるけれども、併し此手で●に並んで此方面を固めても宜い。

●第一 黒●善し。

黒●と攻め付けて此隅に對する發展の路を遮ぎり、而して●と固めて、又此方面に對する敵の活路を制限して、一方路に追出す手段最も堅實にして紛れない打方である。

●第一 黒●の手段。

黒●は自家の發展かた／＼敵を前後に隔て、攻める手段で大いに宜し。

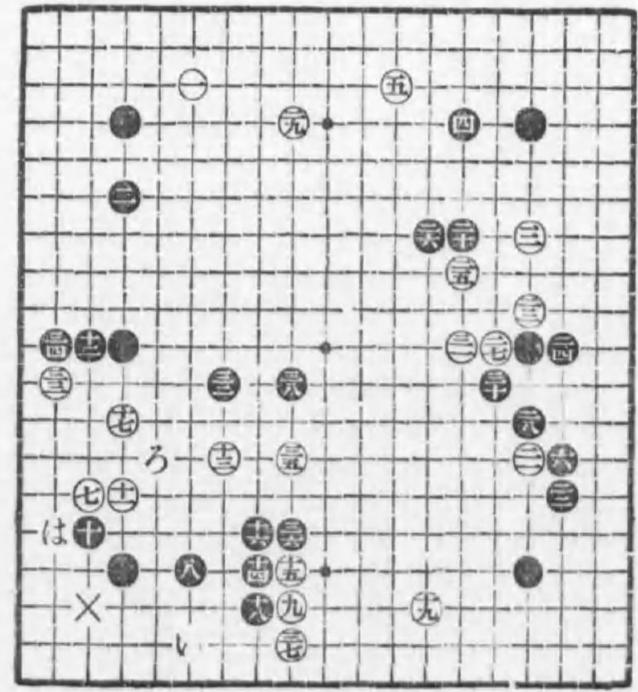
▲第一 白●の變化。

白●に以て若しも●印杯に侵し來たらば、黒●に打つて●の二子を攻めるが宜い。さう遣られては堪らぬから白は●と用心したのである。ソコで黒が●と約へ付けたのは大變に確かな打方である。

●第一 ●以下●の手段。

黒●以下●まで紛れない堅實の攻方である。斯くの如く自家の形勢を張りつゝ●以下の白を攻めて居れば左下隅×印に打込まれる心配はない。白若し強ひて×印に打込まんか、黒●に下るべく、斯くては白は上下の石を一時に凌が

(圖一第) 立石之勝必



んならぬ形勢になるから何れか破綻を生ずる結果になるは  
必定である。

●第二 黒●の變化。

黒●の手で●にハネ出し、白●に截つた時、黒●にハネ込  
み、白●、黒●と突抜いて白を締める手段もある。ソコデ  
白若し●に截つたらば、黒●の一子は敵を截断して居る要  
メ石であつて、之を取られると三方皆繋がられて了ふから  
如何なる場合でも外の石は兎もあれ、之を棄て、はならぬ。  
必ず●に伸びなくてはならぬ。併し斯くの如く打つは紛れ  
易いから、圖の如く打つ方が簡單にして確實である。

●第三 黒●以下●手順好し。

黒●を守り而して白●に對し●と一撃を加へ放して●と下  
つて×印の打込を防ぎつゝ、白を攻める手順頗る宜し。

●第一 白●に就て。

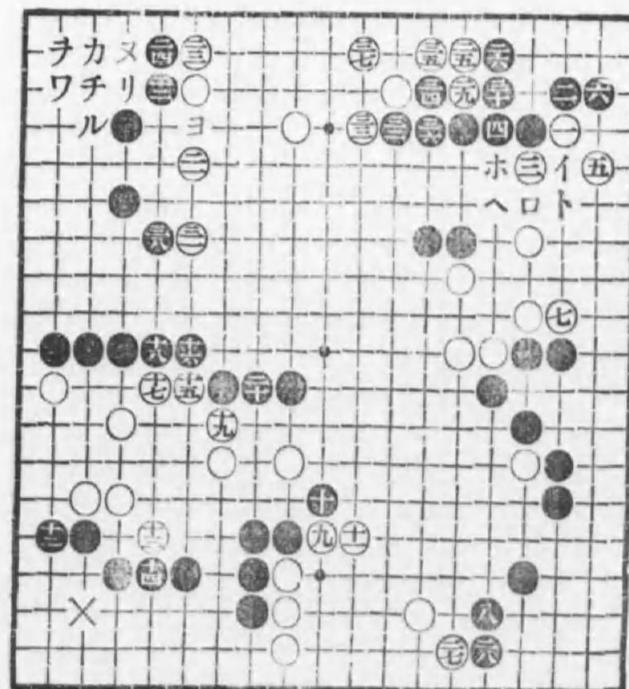
白●の手で直ちに●に打込んで來たらば黒●に約へ、白●、  
黒●、白●、黒●、白●の時黒●に突張り、白●、黒●と  
ハネて、隅を譲る代りに、中央に地を作ることが出来るか  
ら寧ろ此の方が宜い。併し圖の如く●と飛ばれた以上は●、  
●と隅を守るし、又●に飛ばすして、直ちに●に打込んで來  
れば、前述の如く隅を與へる代りに、其價ひを中で取らう  
と云ふ兼合ひの處である。斯くて黒が●と守る運びになつ  
ては大勢は黒の掌中に歸した形勢である。

六子第二局

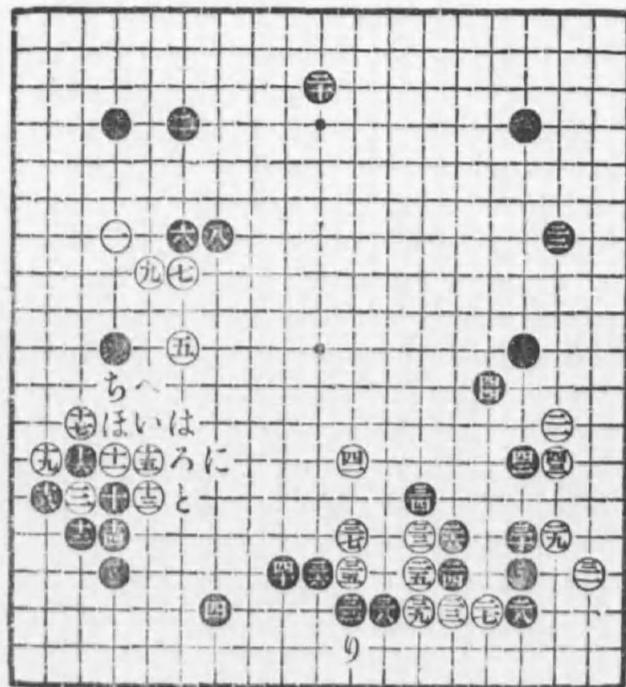
●第一 黒●以下●までの手順宜し。

黒●以下●までは堅實にして紛れなき石立である。▲黒●  
の截り肝要。白が圖の如く●と粘いだ時は必ず●と截らな  
くてはならぬ。此反對に白●にて●に粘ぐか或は●に下る  
か又は●に掛粘ぐか、孰れにしても黒は必ず●の點を截ら  
なくてはかイカヌ。其の成行を示さんか(1)白●に粘ぎ黒●  
に截つた時白●ならば黒●、白●、黒●と打ち然るべく、  
此れは次に●に截る味があるから白が大變悪い。(2)白●に  
粘がすして●に下らば、黒●、白●、黒●、白●、黒●と  
抱ゆべく、白はモウ一手を掛けて●に粘いで居なければな  
らぬ。乃ち先手は黒に歸して外に先鞭を着けられるから矢  
張り黒が宜い。(3)●にも粘がす●にも下らずして●に掛粘  
ぐ結果は黒●、白●と伸びる外なく、ソコデ黒●に中てる  
が急所である。白は●に粘ぐ譯に行かぬ。何故かと云ふに  
●の伸びが愚手になつて形が崩れて了ふからである。因つ  
て白●にハネて●の一子を擒へすれば黒●、白●となるべ  
く、此れは黒が●に截つて●の一子を擒へたと同じ  
結果になるから是れ又黒が宜い。▲黒●は此場合に於ける  
無二の大場で、次に●は●に打つても宜い。

手八十三 (圖二第) 立石之勝必



手四十四 (譜一第) 勢之勝必



●第一 黒●は機宜の手段。

黒●にては●に夾撃するが普通である。さうすると●に走つて軽く凌がれるから●の如く打つが機宜の手段で、其結果●までは必然の成行である。

●第二 白○の變化。

白○の手で●に●杯にツクテ來たらば黒は外の方から●に約へて、隅で小さく活かして中央に形勢を張る方針で打てば宜い。さう遣られては堪らぬから白は先づ○と模様消しに行つたのである。

●第三 黒●の變化。

黒●の手で●に約へ白●に截つた時黒●に伸びて居る打方もある。是れは敵を内外に遮断して戦ふ手段で寧ろ殿しい打方である。白若し●に伸びんか、黒●に伸びて、隅は敵に委して外部の散兵を追捲くるのである。

●第四 白○の變化。

白○の手で●にツクテ來たらば黒●にハネ出し白●、黒●と伸びて戦つて充分である。隅は白に潰ぶされる代りに上の方を潰ぶすことが出来るから得、失を償うて餘りある。白○杯にツケルは多少無理で●の如く打つが普通である。以下黒●まで必勝の形勢既に定まつて亦打つ所がない。

六子第三局

●第一 黒●の變化。

黒●は●に打つ趣向もあり、或は●に攻める手段もある。孰れも同じやうなものであるが、●の如く打つたのは白若し●ならば●に包圍すべく、又白○ならば●或は●に掛けよう云ふ兩腕みの趣向である。

●第二 白○の變化。

白○、●と打つ結果は黒●となるのが必然の成行である。白若し●の手で●にハネたらば黒●、白○、黒●と押して宜し。

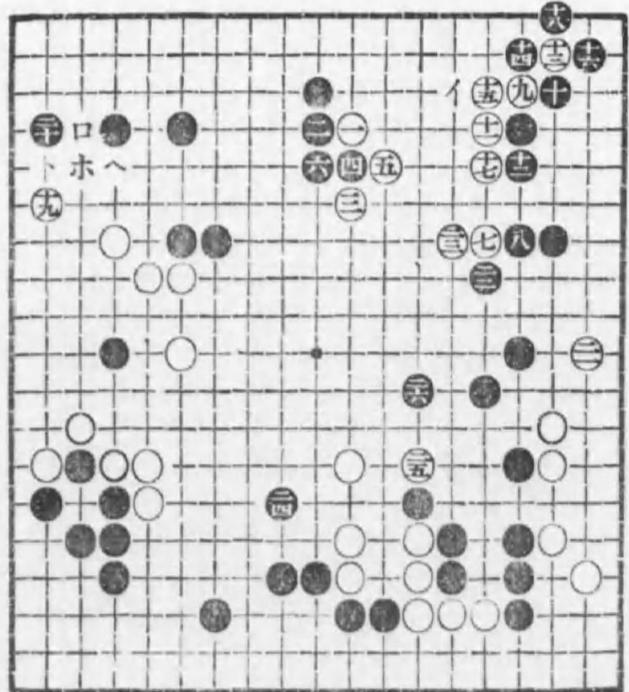
●第三 黒●の變化。

黒●にて●印に突張り白○ならば黒●、又白○ならば黒●に約ゆる手段もあるが、併し●の如く打つ方が紛れがなくて宜い。

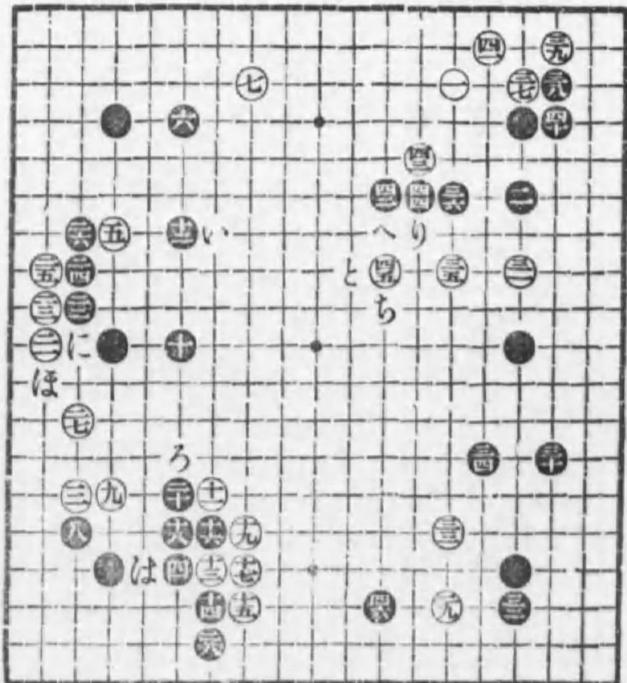
●第四 黒●の變化。

黒●にて●に煽り白○ならば黒●、白○、黒●と打つ趣向もあるが、併し●の如く簡單に●と打ち白○、黒●、白○と飛ばして而して●と打込むも亦調子の好い手である。

手六十二 (譜二第) 勢之勝必



(圖一第) 勢之勝心





●第二 白○に就て。

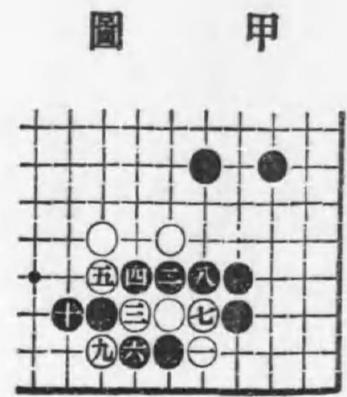
白若し○の手で○の互りを防ぐ爲めに④杯に尖まば黒は○に飛出すが宜い。斯くては左右共に急になるから圖の如く○と打つ外はない。

●第二 黒●の注意。

黒●と互つた時に白若し①にハネ出して來たらば黒は甲圖の如く下の二目を棄て、大に宜し。又白○とハネ出さずして○の方にハネ出せば黒●、白○、黒●、白○、黒●となつて是れ又宜し。故に此儘では○或は○何れへハネ出すも無理である。

●第二 黒●の變化。

黒●の手で○にハネて打つも亦嚴しい手である。其時白●に突當らば黒●或は○に掛粘いで戰ふのである。



### 六子第四局

●第一 黒●の變化。

黒●は大場ですけれども⑩に打つても悪くない。其時白若し⑧の邊に開いたならば黒●に尖みつけ白○、黒●と固められては始末に困る。

●第一 黒●の好し。

黒●と尖んだのは此場合極めて濫い手である。左邊から中央へ掛けて白の構へが甚だ優勢であるから、圖の如く○と尖んで○の白を攻めながら、中央に發展しつゝ、自然と白模様を消す心持ちで打つが甚だ極意である。

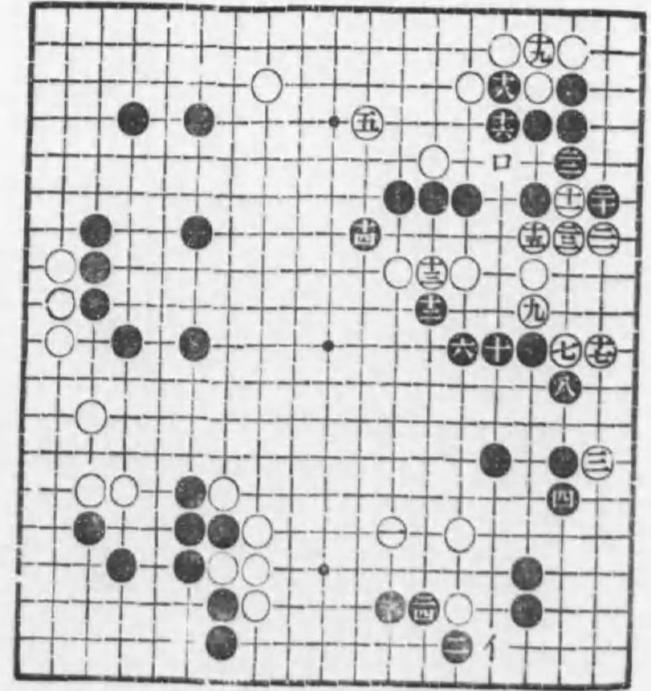
●第一 黒●の變化。

黒●にて○にハネても宜い。其時白若し⑥に切らば黒●に下つて戰ふ打方もある。▲黒●甚だ好し。

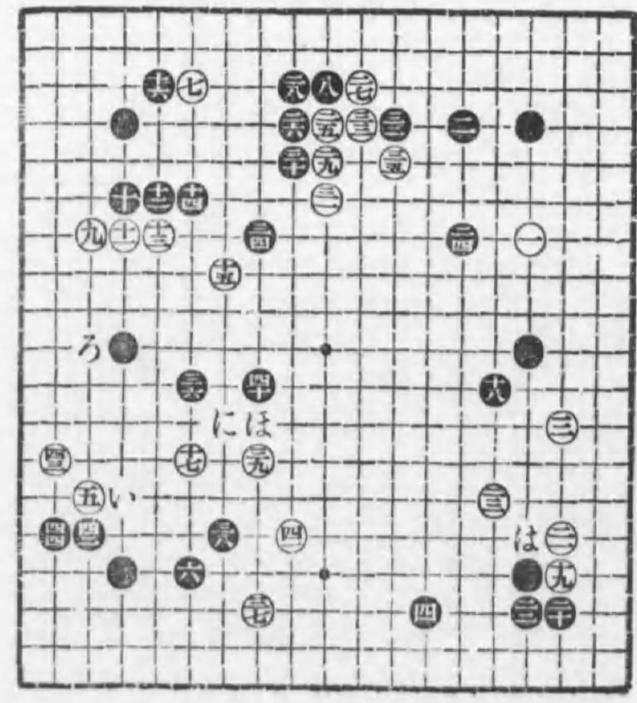
●第一 黒●大に善し。

黒●と敵を前後に隔て、戰つて行けば甚だ早く済んで了ふ。此時白若し○の邊に冠ぶせて來たらば○印に尖み出して戰ふべく、又白○に冠せずして○邊に煽らば黒●にツケて戰ふが宜い。何れにしても白の方には急に旨い手が無い。左ればこそ白は手を抜いて○と仕掛けたのである。然るときは圖の如く○と收まつて了ふに限る。

手四十二 (圖二第) 勢之勝必



手四十四 (譜一第) 勢之勝必





いたのは至極宜い。

▲譜一 黒●以下の趣向宜し。

白●の打込に對しては●に約へて而して●と尖んだ場合には●以下●と聯絡して了ふが一番安全である。因に白若し●の手で●にツケて來たらば黒●に約ゆべくソコで白●とならば黒●に粘ぐべく、又白●に引かば黒●に掛粘ぐが形である。

▲譜二 白●に就て。

黒から●に尖まれると左なきだに低い白が益々低くなる許りではない。此處に缺陷がある以上は隅へ掛かることが出來ないから圖の如く打つ外はないのであるが、若夫れ白●の手で強ひて●印杯にツケて來たらば黒●と外から約へ付けよ而して白●にハネたらば黒●と堅く粘いで隅を白に譲り轉じて●にツケて兩斷しても宜し、或は●に尖んで總體の白をイジメても宜い。斯う打たれてはタマらぬ。故に白●は●と尖んで先づ此處を固めて夫れから●に奇襲を試みやうと心算であるから黒●は圖の如く●と固めるが宜いのである。▲黒●宜し。此手で●に約ゆる者あるはマ、見受けるが、さうすると白から色々趣向をされるから圖の如く軽く受けるに限る。

▲譜三 黒●、●大に宜し。

黒が●、●と打放しにしたのは敵を堅い處に癡らせる趣向である。白若し●にハネて來たらば●の一手は既に投済み石だから●杯に粘がすして、駈かど●に聯絡を保つが宜い。

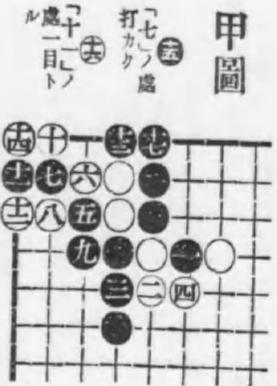
▲譜四 黒●大に宜し。

六子第六局

▲譜一 黒●、●好し。

黒●と尖みつけて●と尖むは置碁として極めて、手堅い打方で、丁度中邊の置石が白を三間に挟んだ恰好になるから非常に釣合ひが好い。抑も此●の尖みは上には●の掛けを含み、下には●の掛けを含んで居るのである。▲白●の變化。白●は●印に打つが一番普通である。若し然らば黒●に掛け、白●に飛んだ時轉じて●印に煽り白●黒●と攻めつゝ勢力を張るのである。

甲圖



▲譜一 黒●の變化。

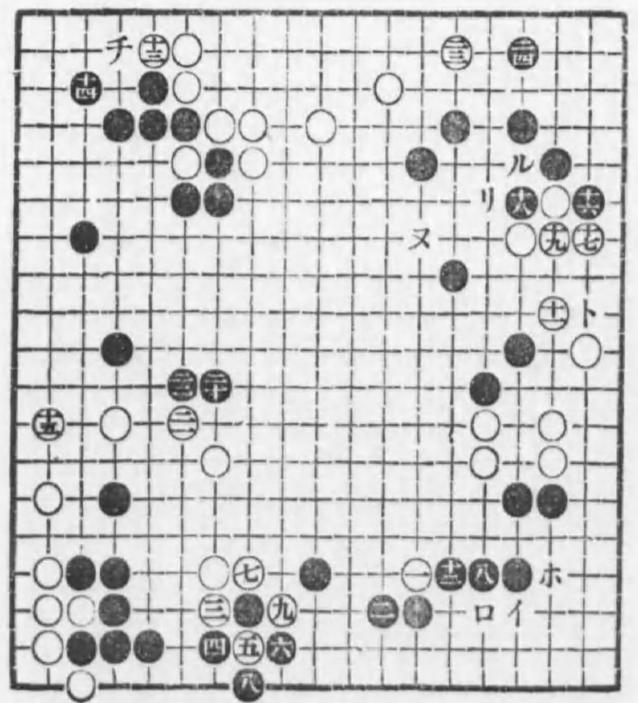


黒●と打つも亦一策であるが、併し是れは紛れ易いから圖の如く簡單に●と飛ぶ方が分り易い▲黒●●の手段。黒●

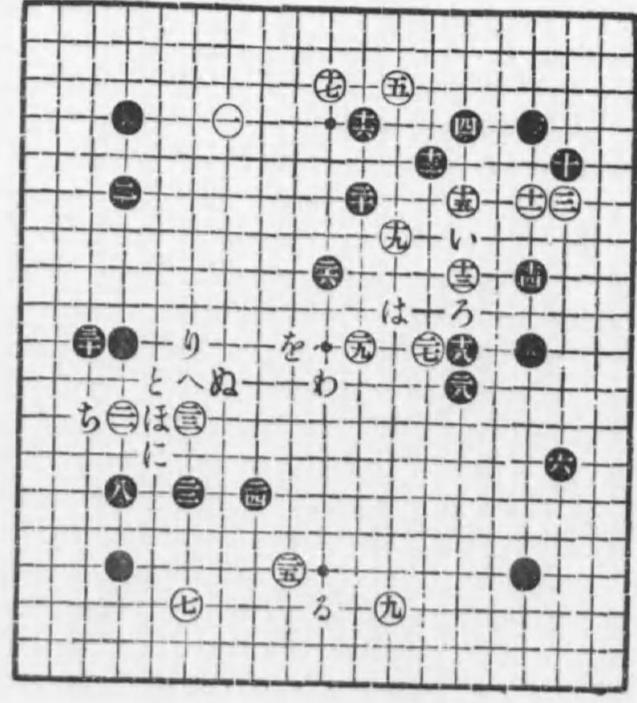
黒●にては古來の定石の如く●印に尖み白●、黒●、白●、黒●と截る手段もある。白若し●に並びたらば黒●、白●、

黒●は此場に合於ける無二の好點である。白を攻め且つ自分の方を厚くする手であることは固より言ふまでもない。要するに本局白地は上邊約二十目、右邊十目、左下隅十目合計約四十目で、黒地は右上隅と右下隅丈で四十目位あるから左上隅丈け多く必勝の局面である。

譜二第 (局子六) 勢之勝必



譜一第 (局子六) 石布範模



と飛び●と圍はして●と敵を隔て、打つ趣向は正々堂々たるもので、大局を制する所以であるが、或は●の手で劇しく●印に打込んで戦つても宜い。此の方が白は應手に窮するであらう。

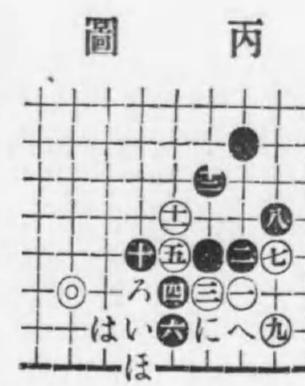
▲譜一 黒●は堅實。

黒●は己を衛ると同時に敵の活路を制限する手段で、其目的とする所は敵若し手を抜くこともあらば●印に煽るか或は更に厳しく●印に打つて●、●の二子を死地に陥れやうと云ふに在る。さう打たれては堪らない。故に白は第二譜

の如く○と打つ外はない。

▲第二 黒④の變化。

黒④と受けるは穩かであるが、此場合④にハネ出し、白⑤に切つた時⑥に下るが一番厳しい手で、是れは白を隅に活かす代りに外の白を窄めやうと云ふ手段である。白若し⑧に約ゆれば黒①印に飛ぶが一番厳しいが、或は簡單に⑩印にハネ込んで宜い。其結果の一例を舉ぐれば則ち甲圖の如く白を擒にすることも出来る。故に白は①とハネ込まれた以上は②にハネて振替る外はない。▲白⑦止むを得ず。



白⑦の手で普通の如く⑥に尖むと⑧に中てられ、白⑨に粘いだ時⑩に附けられるのが厳しい手だから白は勢ひ圖の如く⑦と犠牲を拂つて先手を取つて⑪と粘いで⑫のツケを防がざるを得ない。▲黒⑬は穩健。或は此手で⑭邊に白を隔て、打つ手段もある。白は殆ど應手に苦むであらう。▲黒⑮、⑯手順宜し。黒⑰と掛け⑱と受けさせて⑲と守るが所謂手順である。單に⑲に守ると後に⑳にツケられて出路を止められる患がある。

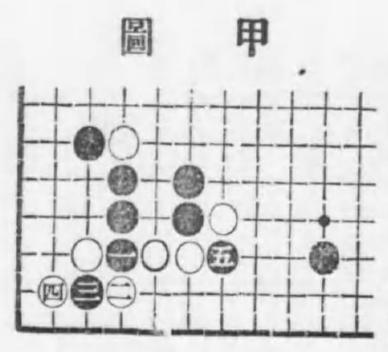
▲第二 白①の變化。

白①の手で②にツケたらば不斷は面白くないが、此場合では③に挟むが宜い。其結果は乙圖の如く、斯くては白が重くなる許りで颯ぱり打ちやうがない。又白④の手で⑤にツケれば黒⑥にハネて可なり。ソコで白⑦にツケれば黒⑧に

六子第七局

▲第一 黒②の變化。

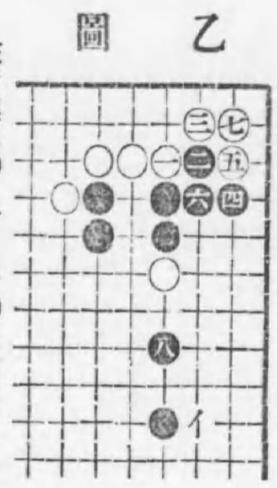
黒②は③若くは④印に打つても宜い。併し圖の如く打つても亦拆きと夾みとを兼ねた良い手である。



▲白①に就て。  
白①の手で場合に因つては②に飛ぶともある。若し然らば黒は矢張り③にハネて而して機を見て甲圖の如く敵の缺陷を咎むる手段が残るから樂みがある。又白本圖の如く④にも斜走せず⑤にも飛ばずして⑥に押したならば乙圖の如く打つのである。其手順中黒⑦の手で⑧印に下つても宜い。

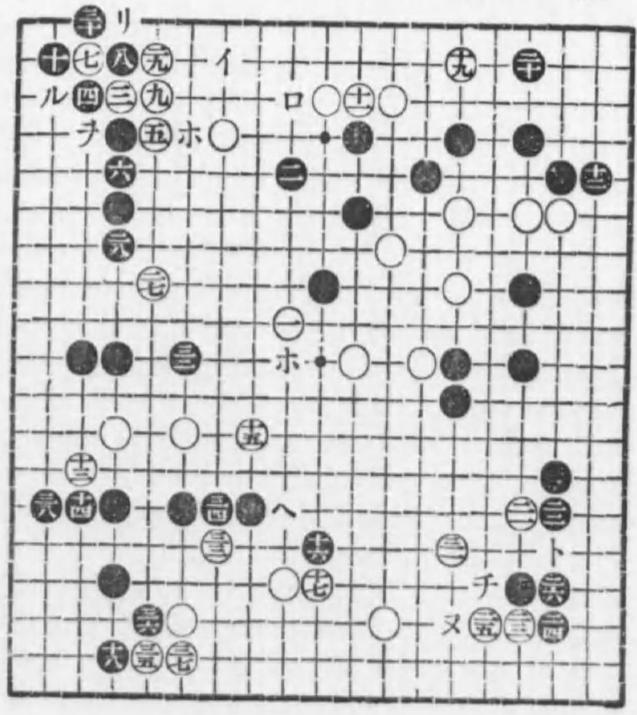
▲黒③の變化。

黒③は穩かな受方であるが、此手で④にハネル手段もある。左すれば白は⑤に切る外なく



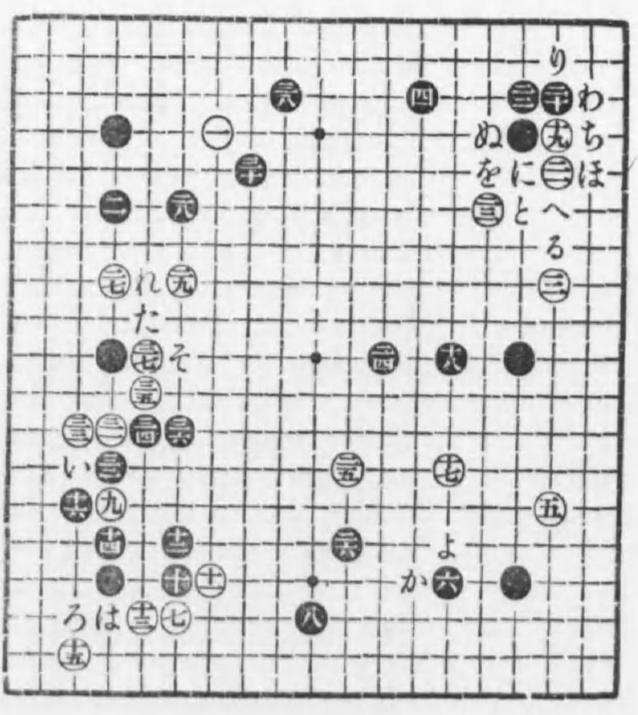
茲で黒は⑥に下るか⑦に伸びるか兩様の手段がある。假に

手八十三 譜二第 (局子六) 石布範模



ハネ込むべく、又白①にツケズして②に伸びれば黒③に粘るが宜い。中邊の黒は二重扉になつて居るから白は殆ど凌ぎやうがない。夫れから白④にて⑤に入らんか、其結果の一例を示せば丙圖の如くなつて上下何れかの白を取られる其手順中白⑥に截らずして⑦にハネたらば黒⑧、白⑨、黒⑩、白⑪、黒⑫、白⑬と振替るは即ち⑭印の白の効力を殺ぐ所以である。▲黒⑮の變化。黒⑮にて⑯に押しも亦宜い處である。其時白若し⑰に取れば黒⑱にハネ出して宜し。白尙ほ⑲に切れば黒⑳に粘ぐ迄の事である。何れにしても必勝の形勢である。  
▲人の失敗は方法なきより起らずして、方法の應用を誤るより起ること多し。善く學べ、然らば汝は剛臥を要せざるなり。

手八卅 (譜一第) 勢之勝必



黒①に下るとすれば白は②に引くが普通で黒③に下りとなつて宜し。其の手順中白④に引かずして⑤に約へたらば黒は矢張り⑥に下つて宜し。其時白若し⑦に坏に飛びもせば黒は丙圖の如く白を擒にする手段がある。夫から黒⑧に下らずして⑨に伸びても宜い。白⑩に約ゆるが普通であるが、左すれば黒⑪に伸びるが非常に厳しい手だ。ソコで白⑫に突當れば黒⑬にハネて宜し。是れは白が非常の損である。夫れから黒⑭の時白⑮に約へずして⑯に下らんか、黒⑰にハネて⑱の一手を征に取つて宜し。▲黒⑲にて⑳に下り白㉑に並ぶも亦普通である。▲黒㉒、㉓手順好し。斯う云ふ

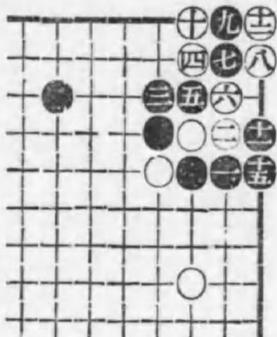
處を捨置くこと白から⑤にボウシに掛けられたり、或は⑥杯にツケられて中の二子を狙はれるから圖の如く打つに限る。白若し⑤の手で⑥にツケて來たらは黒はジツと③に伸びて居るが宜い▲黒⑤にて⑥に尖み白⑥の時黒⑥にハネて行く厳しい打方もあるが、併し圖のやうに運ぶも亦簡單で紛れがない▲白⑥にて⑤方面に打てば黒は⑥に飛んで攻めつゝ守るが宜い。

▲第二 白⑥の趣向。

黒⑥は次に④印に尖んで白を切断しやうと云ふのであるから白は⑤とツケてドサクサ紛れに其傷を防がうと云ふ趣向である。

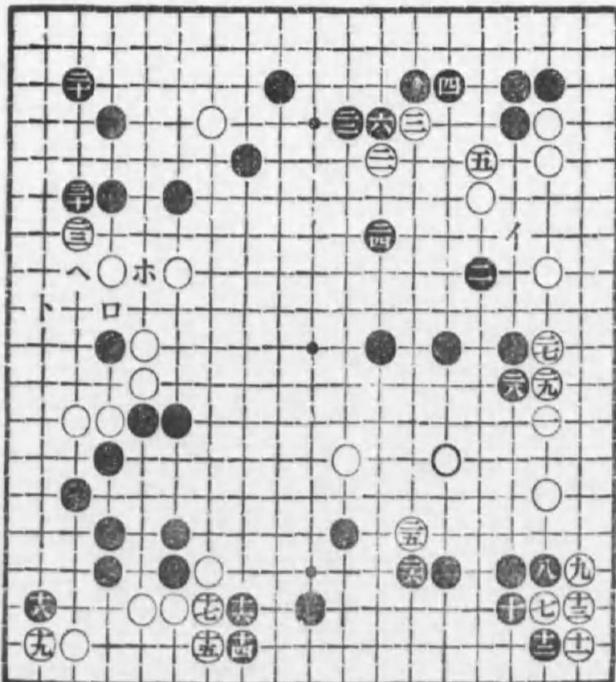
丙 圖

⑤七ノ所打カク  
⑥九ノ所一目トル



▲黒⑥はヌルイやうであるが、④の抜間を狙ふ、意味を含んで斯く辛抱するが宜い。然る上は白は⑤と補ふ外はない▲黒⑥以下⑤手順好し。白⑦の打込に對して黒⑧以下⑨と此隅のキマリを附け而して⑩、⑪、⑫と利かして⑬と固めた手順頗る宜し▲白⑬は好點。之を棄置くと⑭に突當られる手がある。其時白⑮ならば黒⑯にハネ白⑰、黒⑱と掛粘かれて白は殆ど打ちやうがない▲黒⑱厚し。黒⑲は厚い手で此れで完全に中央の黒が治つたから大勢は既に確定した。

必 勝 之 勢 (第 二 譜) 手 十 三



六子第八局

▲第一 黒⑩は簡單明瞭。

黒⑩の手で⑪印に尖む手もあるけれども、事が面倒になるから、圖の如く⑩以下⑪と打つ方が分りやすい。

▲第二 黒⑫の變化。

黒⑫は⑬に尖みつけ白⑬に飛んだ時、⑭に飛んでも宜い。

▲黒⑭にては△まで行く手もあるけれども、白⑮の飛びある此場合さう打つと⑯と⑰との間が何となく手薄になるから、圖の如く一路控へて置く方が確かである。

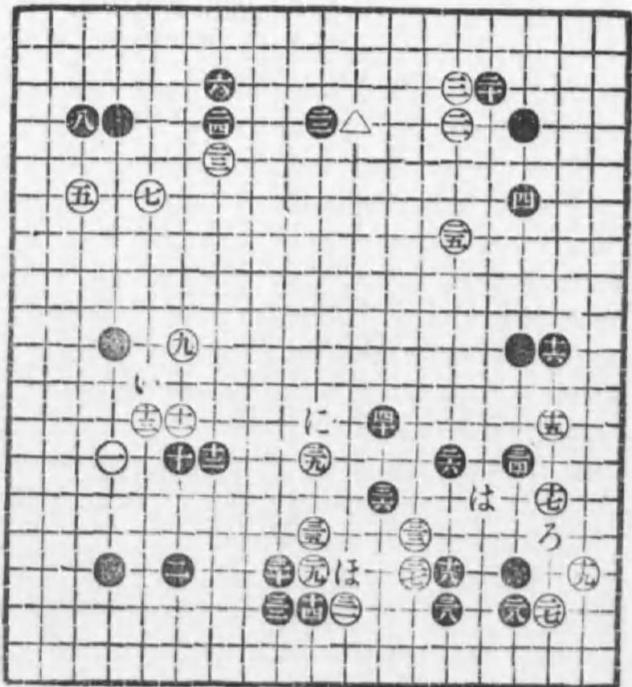
▲第三 黒⑱大に宜し。

黒⑱は大變好い處である。次に⑲に覗かうと云ふ恰好が面白い。▲黒⑲の變化。黒⑲にて⑳印に圍ふ手もある。併し六目の碁では逆も圍ひ切れないから、圖の如く約ゆる方が確かである。

▲第四 黒㉑の變化。

黒㉑にて㉒に截り白㉒の時㉓に粘ぐ手もあるけれども、さうすると白から㉔にツケられて紛はしくなるから、圖の如く單に㉑と粘ぐ方が打ちやすい。▲黒㉑。かう云ふ場合は何時でも圖の如く打つのが形である。次に㉒印を截られる味があるから、白は打ちたくはないが、其截りを凌ぐ爲めに㉑と打たなくてはならぬ。其拍子に㉑と儲けながら形を整へたのは黒の働きである。

必 勝 之 勢 (第 一 圖)



▲第二黒●宜し。

黒●と打つたのは○の白と前方の三子を隔て、徐々に攻め且つ左方の白地を締めやうと云ふ趣向である▲白○の手で●の方へ先きにハネれば黒は●に曲るが通形である。

▲第二黒●、●宜し。

黒●と根から切つて●と曲つたのは大變働きある手だ。かう打たれては●以下●と活きるより外ない▲黒●の手で●印に打つ手もあるが、さうすると紛擾を生ずるから、圖の如く打つ方が穩かである。

▲第二黒●は味消しの良手。

黒●は一見小さいやうであるが、實は非常に大きい手である。若しも此の處へ白から下られると、左隅が非常に氣持が悪くなる許りではない、右の方面も心持が悪くなつて来る。夫れを此一手で味を消して了ふのだから大きいのだ。▲白○の手で●に押せば黒は●に約ゆるが宜い。既に●と打たれた以上ごちらでも此石を活かす積りで打てば宜い。▲白○で●に互つたらば黒●、白●、黒●と切つてドチラか一目を取るのである。

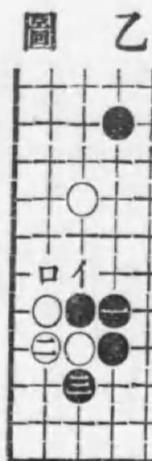
▲黒●大に宜し。右邊は●の尖みもあり、●の下りもあつて裾明の處で、一向地にならぬから、寧ろ打たずして圖の如く●と打つ方が宜い。

六子第九局

▲第一黒●の應手二様。

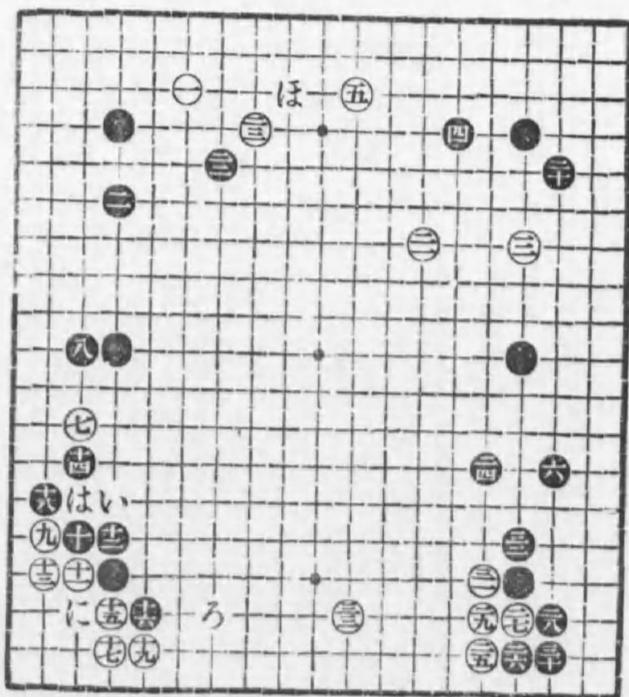


黒●は●に受ける手もある。其結果は白○、黒●と打つが普通である。併し圖のやうに●と尖みつける方が嚴しい。白若し●の手で●に伸び込まんか、



黒●に引くは重いし、左りどて●に尖むは味が悪い。圖のやうに●とツケル事を忘れてはならぬ。其結果は甲圖の如くなる、コンナに塗付けられては堪らない。ソコで白●と中て、黒の様子を見たのである。其場合黒は何もしないで只●と粘いで居るが一番堅實である。白若し●の手で●に引いたならば黒●にハネ、白●に粘いだ時分に黒●に打つが宜い。是れは手順を替へて言へば乙圖の如く、白●と粘ぎ黒●とハネたどせよ、然らば白●印にハネべき筈であるのに、一路●印に凹んだ恰好であるだけ黒は得をした勘定である。故に白は●杯に引かないで●と粘いだので其結果●までとなるが普通である。此●の曲りは肝要である。之を棄置くと黒から先手で約へを利かさるから油断はならぬ。

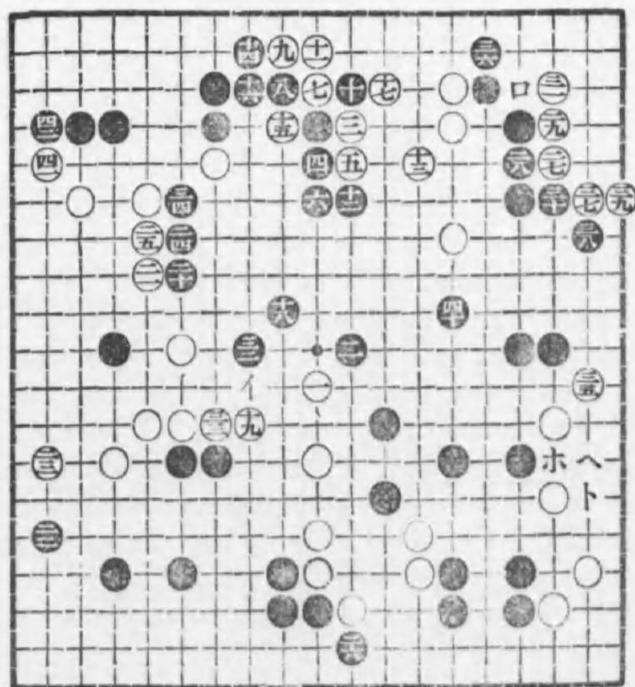
必勝之勢 (圖一第)



▲第一黒●の變化。

黒●は好い手であるが、併し●、●の方面が非常に堅固であるから、●印に劇しく打込んで戦つたらば白は一層困惑するであらう。▲黒●大に好し。白から●と曲られて裾明になつて居る處だから、其方面に向つて開くは面白くない。圖の如く●と備ふるが最も肝要である▲黒●で●に截る手もある。其結果は丙圖の如く●、●の三目は取れはするが味が悪いから、圖の如く打つ方が紛れがない。

必勝之勢 (圖二) 手二十四

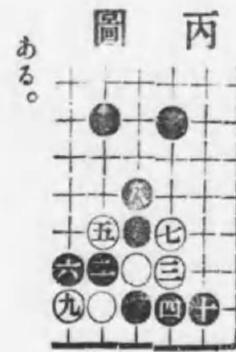


▲第二 黒●の變化。

黒●にては×印に掛粘ぎ白●と中てた時黒●に伸びても善し、又黒×印の時白●ならば黒●に斜走して模様を張るも亦一策である。▲黒●甚だ好し。白が●と覗いたのは×印のダメを粘がせやうと云ふ趣向である。故に黒も亦白に△印のダメを截らせやうと云ふ趣向で●、●と發展するが宜いのである。▲黒●は自分の發展を兼ねて暗に右方中間の二子を睨んで居る良手である。▲黒●は一見×ルイやうであるが、本手である。之を棄置くと白から●に斜走された時分に其受けやうに困る。

▲第二 黒●の變化。

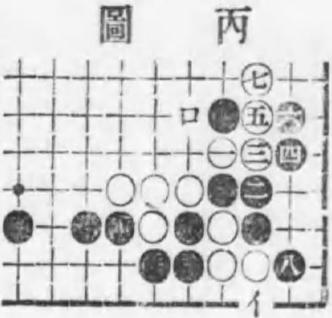
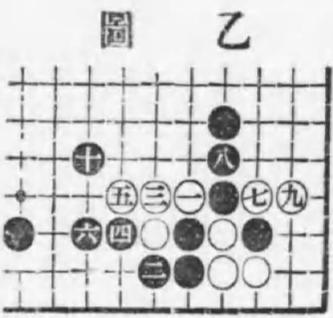
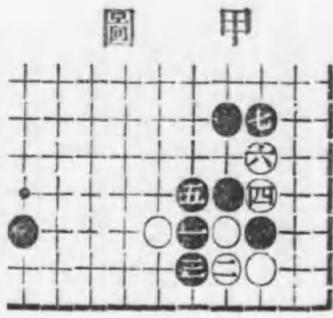
黒●にて●に中て●に粘がして、さうして●印に攻め付けらるも亦厳しい手である。▲黒●以下●までの手順は甚だ宜い。白から●と打たれて何となく味が悪いから此處さへ治めて置けば則ち必勝の形勢である。



六子第十局

▲第一 黒●の變化。

黒●の手で●に打つも亦穩かである。▲白●の手で●に冠する手段もある。若し然らば黒●に斜走して何でもない、白●の威嚇杯は少しも恐るゝに足らぬ。寧ろ白●と●との間が廣すぎて缺陷があるから却て白が後の打ちやうに困るのである。

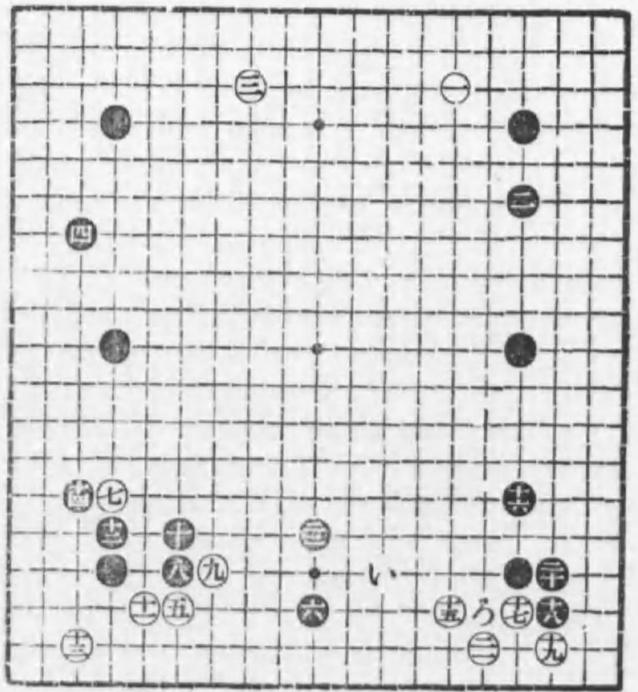


黒●と粘ぐは極めて堅實であるが、此手で●にハネ込む手段もある。其結果の一例を示せば甲圖の如く、其手順中白

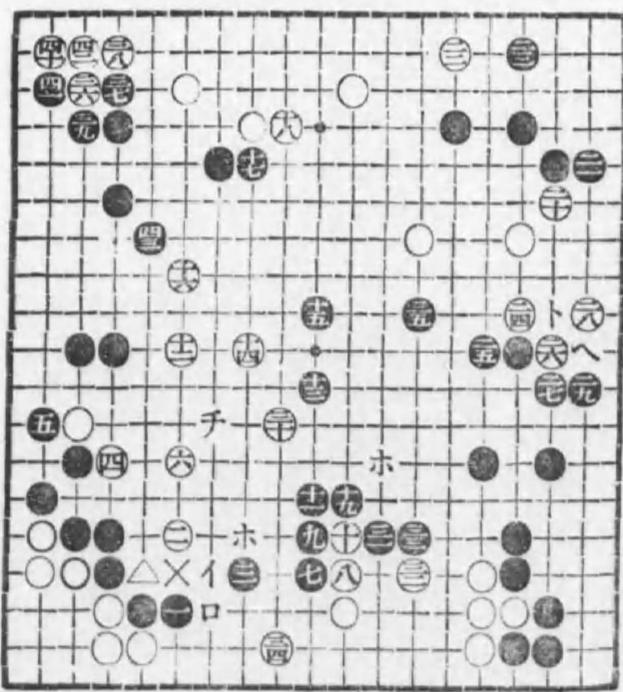
▲第一 黒●の變化。

●に切らずして●の方を切る結果は則ち乙圖の如く、●以下の四目は殆ど取れて居る。夫れから乙圖白●の手で●にハネ込む結果は則ち丙圖の如く、隅の三目を取る手もあるが、是れは後手である。因つて先手を取らうと云ふ時には●にハネすして、單に●にハネ、白●、黒●、白●となつた時に轉するのである。

圖一第(局子六)勢之勝必



手三十四(圖二第)勢之勝必



▲第二黒●ハ堅實。

白若し①に飛ばんか、黒も亦②に飛ぶべく、白猶ほ③に飛ばば黒④といくらでも飛びくらすを宜い。▲黒●宜シ。此手で⑤に尖み付け白⑥、黒⑦と切る杯は俗筋で甚だ宜しくない。

▲第二黒●ノ注意。

黒⑧で⑨にハネ出す者あるは往々見受ける所であるが、夫れは只⑩に引かれて後の打ち様に困るから、圖の如く約へて白全隊を攻める趣向に打つに限る。▲黒●は⑪に引くが至つて穩かであるが、併し是は少しく緩い。

▲第二黒●ノ變化。

黒●にては⑫に尖み付けて居ても宜い。併し圖の如く⑬とハネて⑭に補はして、轉じて⑮と肩を衝くが手順である。之を打たんが爲めに⑯のハネを打つのである。

▲第二白●に就て。

白若し⑰の手で⑱に押しもせば黒は無論⑲に伸びて宜い。此處へ伸びられると自然右側の白が弱くなるから白は⑲に押し譯に行かす⑳と斜走したのである。

▲第二黒●、●手順大に宜し。

●の點は此場合非常に好い處である。是れは自己の模様を厚くする許りでなく、黒●、白●、黒●の切りをも狙つて居るのであるから、白は●と補ひがてら黒の模様を消さな

▲第三黒、●宜シ。

黒●の約へに對し●とハネた時分には前にも注意した通り●と粘ぐに限る。ソコデ白が●に伸びもせば、此場合では黒は●に切つて●の二子を取ることが出来る。

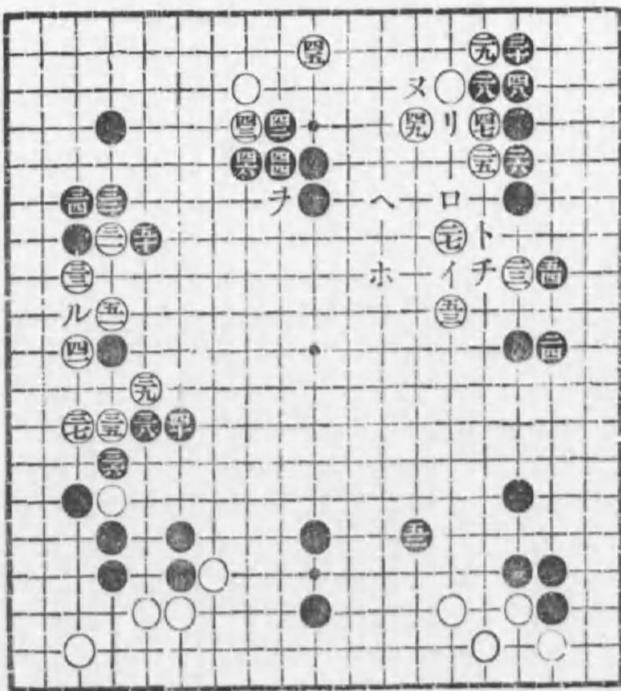
▲第三黒●、●味好シ。

黒が●と押し次に●とハネたのは非常に味の好い手である若し●の手で●杯に粘ぐと●に亘られて他日●にハネられる疵が残るから面白くない。

▲第三黒●ハ好點。

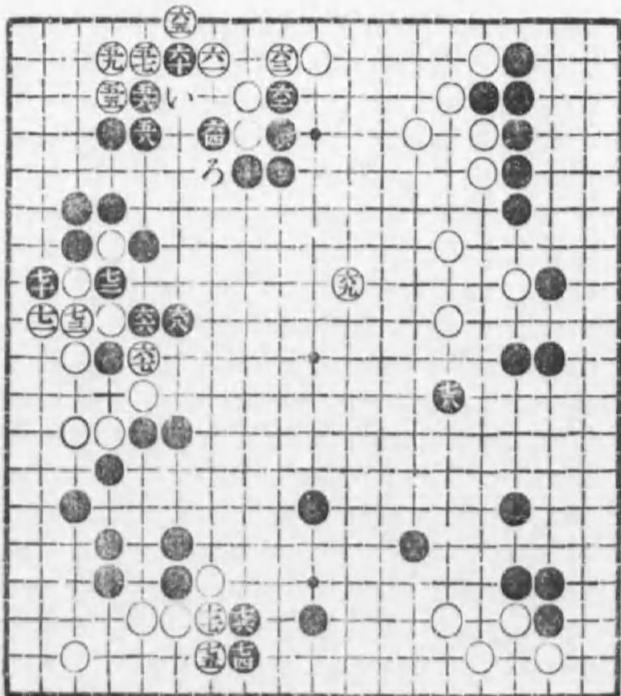
●、此場合大きい處で、斯くて●と伸びた姿は如何にも厚壯である。白は●に下るか、●に粘ぎたい處であるけれども、さうすると●の方面に打たれて眞ン中が非常に大きくなるから止むを得ず●と打たざるを得ぬのである。ソコデ●とハネて●と一目を打抜いたのは非常に心持の好い手で必勝の形勢である。

圖二第(局子六)勢之勝必



ければならぬ。ソコデ●とツケルのが手順であり、又一番大きい處である。然るに●の手で直ちに●にツケルと●の白は軽いから手を抜かれて面白くない。

手八十七圖三第(局子六)勢之勝必





六子第十一局

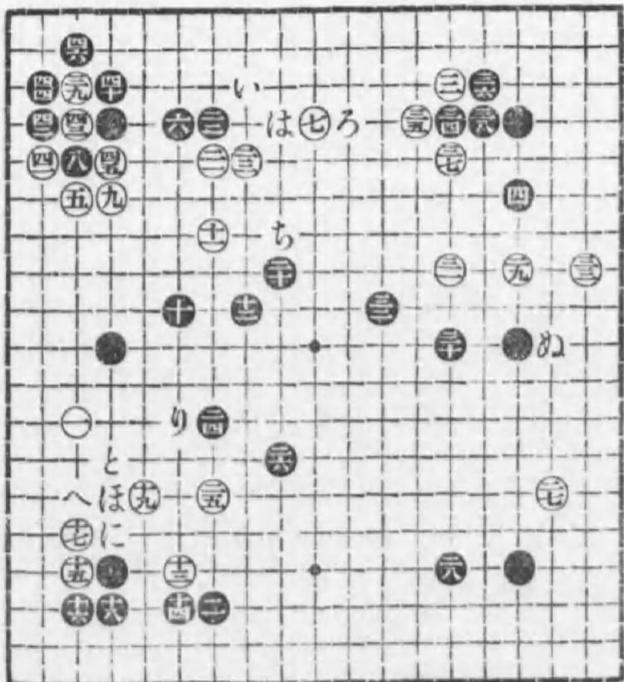
▲第一黒①、④手順宜シ。

黒が①と尖みつけ、④と立たして、⑩と煽つたのは誠に良い手である。若し白⑦が⑥印に在るならば、黒⑩にて⑥に尖むが普通である。是れは⑥に打込むか、⑥に懸けて白の位置を低くする趣向である。けれども⑦の白が⑥の如く高くある時は⑩の方面から攻めるが本手である。▲黒⑩の變化。黒⑩にては⑥印に伸び、白⑤、黒⑥、白⑦、黒⑧と打つ趣向もある。

▲第二白②ノ變化。

白②の手で、或は⑤印に飛ぶこともあらんには、黒は必ず⑥に押すことを忘れてはならぬ。白②、黒③、白④、黒⑤となつて、黒が宜い。然るに白が⑥に押されるのを嫌つて⑦と打つた以上は黒⑧に尖むは豫定の行動である。▲黒⑧の變化。黒⑧にては⑥の關門を固めても宜いけれども、⑥の如く打つ方が却つて基勢が早く極まるから宜しい。▲黒⑧大に宜し。此處は大變大切の處である。之を捨置くと白から⑥の點に打たれて、左右に隔てられるから之を忽にしてはならぬ。

(圖一第) 勢之勝必



▲第二黒③ハ堅實。

此手では③の肩を衝く手もあり。其他種々の手段があるが圖の如く尖みつけるのが一番堅實で、紛れのない手である。

▲第二黒⑤宜シ。

白若し⑤の手で⑥印に曲つても黒は必ず⑥に粘ぐが宜い。⑤のハネに對して⑥杯に伸びると白から⑥の曲りを利かされるから斯う云ふ處は白がドテラから來ても圖の如く⑤と堅く粘ぐに限る。

▲第二黒⑥、⑧手順宜シ。

⑥と一着打放しにして⑧と約へたのは働きである。と云ふのは之を閉却すると白から⑥印まで進まれるけれども、黒⑥、白⑦と交換して置けば白は⑥までしか進めないから詰り打得である。

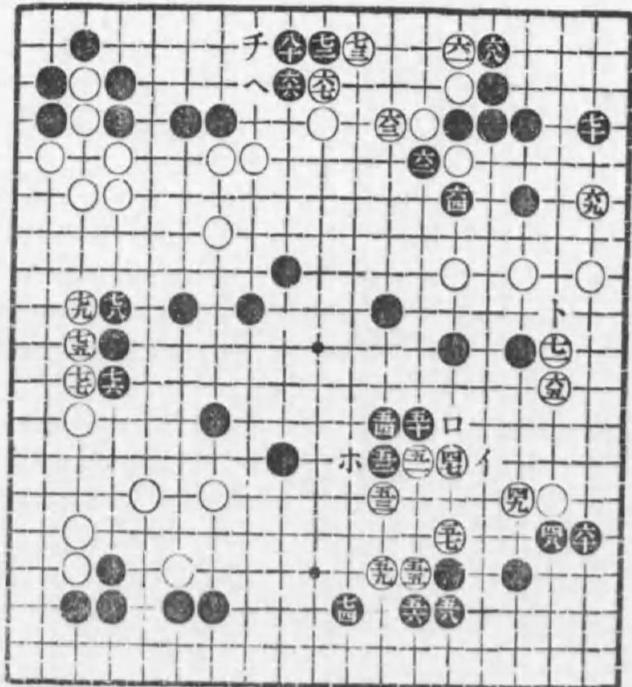
▲第二白⑦已ムテ得ズ。

之を捨置くと黒から⑥に覗かれて蔽られる手があるから、圖の如く確實に亘つて居なければならぬ。

▲第三黒⑩是又打得。

黒⑩は⑥同様⑥のハネを防いだのである。今度白が⑥に切つて來れば⑦に約へ放して又他に轉することが出来る。⑥以下⑥と粘ぐ手順になつては必勝の形勢で白に於ては殆ど打つ所がない。

手十八 (圖二第) 勢之勝必



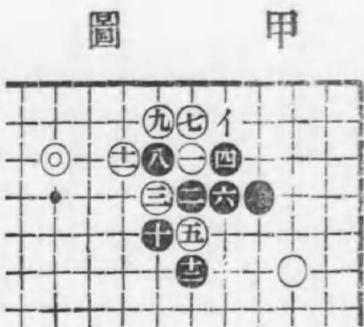
六子第十二局

▲第一黒ハ好點

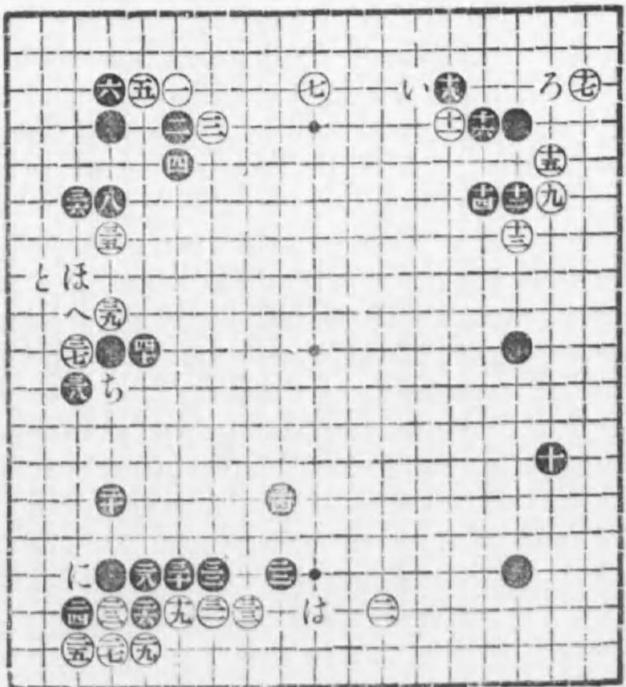
此手で印に打つのは一番悪い。何故か云ふに先きの方は既に白七の備へがあつて行止りとなり、搦手に九のカ、リがあるから十の手で直ぐに②に打込まれて隅で活きられる結果、黒は空塗りの姿になるからである。若し打つとすれば高く⑤に打つのであるが、夫れよりは圖の如く打つが宜い。

▲第一白ニ就テ

白若し⑤の手で⑥に掛ければ黒は甲圖の如く②とツケ④と約ふるが宜い、其結果の一例を擧ぐれば甲圖の如く④印の一子がコリになるから白が悪い。其手順中白七は止むを得ない。此手で⑥に粘りでも④印の白がコリ形になるし、又④に粘れば⑥に一目を切取られて矢張り④印一子が悪化するから白は打ち様に困つて⑦と下つたのである。ソコで⑥と切る手が旨い手で、白九の手で⑤にハネルと④の先手約へを利かされるからイヤ／＼ながら⑥と曲らせたのが⑥の働きである。故に白は本圖の如く⑤と高く掛つたのである。然る上は黒は⑤とツケル外はない。▲黒⑤



六子局(第一圖)



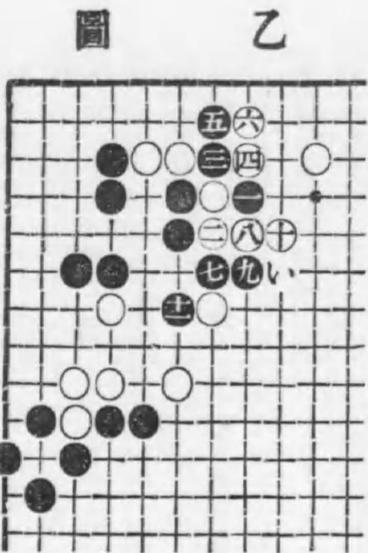
ノ變化。此手で先づ⑤に尖みつけ白⑥の時④印或は⑤に打つ趣向もある。▲黒⑤にては單に⑥に粘り白⑥、黒⑤と打つても宜い。併し六目位の碁では圖の如く⑤以下⑤まで打つ方が紛れがなくて宜い。▲白⑤の手で⑥に打込めば此場合黒⑤に締るが宜い。▲黒⑤にては⑥にハネても宜い。白若し⑥に截らば黒⑤に尖むべく、又⑥に切らずして⑤にハネたらば黒⑤に伸びるのである。

▲第二白ノ變化

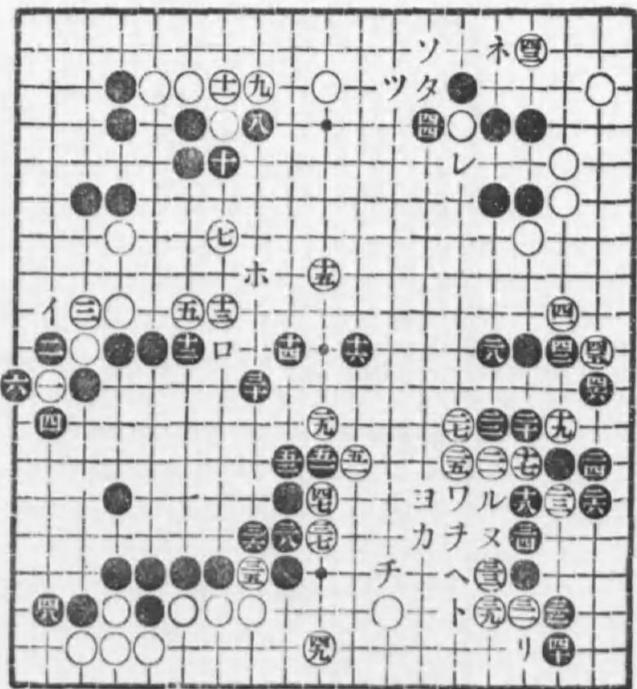
白①の手で④に掛粘いだらば黒は黙つて②に下るが宜い。夫れでは運動の調子がつかぬから圖の如く①とハネたのである。▲黒⑤宜シ。黙つて取つたのは賢い。此手で⑤杯に押すのは俗手で、白から④にハネられてダメ詰りになるから宜しくない。

▲第二黒大ニ宜シ

白⑦の手で⑥に打つても黒は矢張り⑥に夾むが宜い。白若し⑨の手で⑧杯に出たならば黒⑤に切り之を棄石にして乙圖の如く打つべく、上の白は殆ど活路はあるまい。或は黒⑤の手でモウ一本⑥に押ししても宜い。是れは堪らぬ。本圖の如く④とハネル外はない。然るに黒⑤に押し白を⑥に伸ばすは敵の注文通りで、殆ど一手の差があるから⑤の押しは何時の場合でも宜しくない。▲黒⑤宜シ。中の黒は非常に厚いから圖の如く打つが宜い。▲黒⑤嚴シ。併し此手で⑥に粘りでも十分である。▲黒⑤ハ本手。之を捨置くとは白から⑥にツケられて黒は打ち様に困るから圖の如く守つて置くが宜い。▲黒⑤ノ變化。此場合では⑤に伸び白⑥、黒⑤、白⑥、黒⑤とツケて中の白を隔て



六子局(第二圖) 手二十五



▲第二白止ムテ得ズ

白若し此手で⑤杯にハネたらば黒は無論⑥に切り白⑦、黒⑥、白⑧、黒⑦、白⑨、黒⑧と突出して振替るのである。是れは白が堪らぬ▲白⑤の手で若しも⑥にハネたらば黒⑤に切り白⑥、黒⑦、白⑧、黒⑨と活きて了ふが宜い。斯くては白はダメ許り打つた勘定で少しも實利がない。要するに黒⑤までの結果は即ち必勝の形勢である。



六子第十四局

▲第一黒十ノ變化。

黒十にては印に冠しても宜い。是れは此方面を厚くして置いて●に打込まうと云ふ含みである。

▲第一黒六ハ堅實。

白●のツケに直接交渉せずして、●と約へたのは堅實の打方で、随つて白は●と引揚げる外に策なし。斯くて●と十々目を刺されては何とも打ちやうがない。

▲第一黒●宜シ。

黒●は普通●に粘ぐべきであるが、併し既に●と打込まれて居る此場合、右邊は左程黒地にならぬ處であるから、●の一子は軽く捨てる積りで、●とハネ込む方が分り易い。斯くて●までとなつては、●の下りが無論先手で利いて居るから、白●の活動に非常の妨げになる。若し強ひて●印に飛出せば黒は●に飛んで●、●の白を攻立つべく、而して白●に逃出した拍子に、●に飛ぶが宜い。斯くなれば白は上下共に忙しくなるから到底凌ぎ切れぬであらう。

▲第二黒●宜シ。

前述の次第であるから、白は○と黒を攻める方針に出たのである。ソコで黒が中邊の置石を逃出さずして●と振替つたのは至極宜しい。

▲第二黒●宜シ。

此場合では●と尖みつけるが形である。此手で●に伸びると●に曲られる。黒は●に曲らんならぬ。さうすると●の手が愚化して了ふ。故に●と尖みつけ●にハネさせて●とグヅミ、以下●と治まるはマ、ある恰好である。

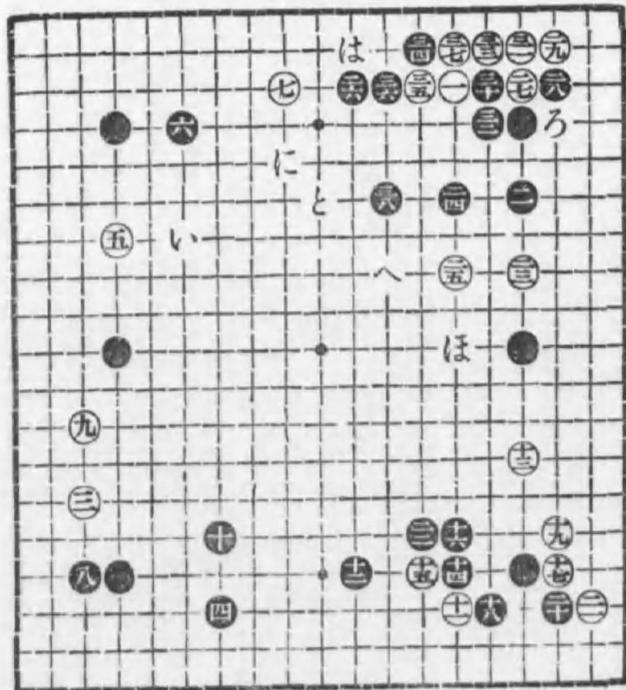
▲第二白●ノ變化。

白若し●の手で●に打つたらば黒は●に打つて○以下の白を攻めるが宜い。其時白●ならば強ひて之を追答せずして徐に●印に飛んで下邊の模様を厚くするが宜い。さう打たれては地が足らぬから、白は●と打つたのである。今度●に打たれては堪らぬから●とツケて逃出すべき機會である。

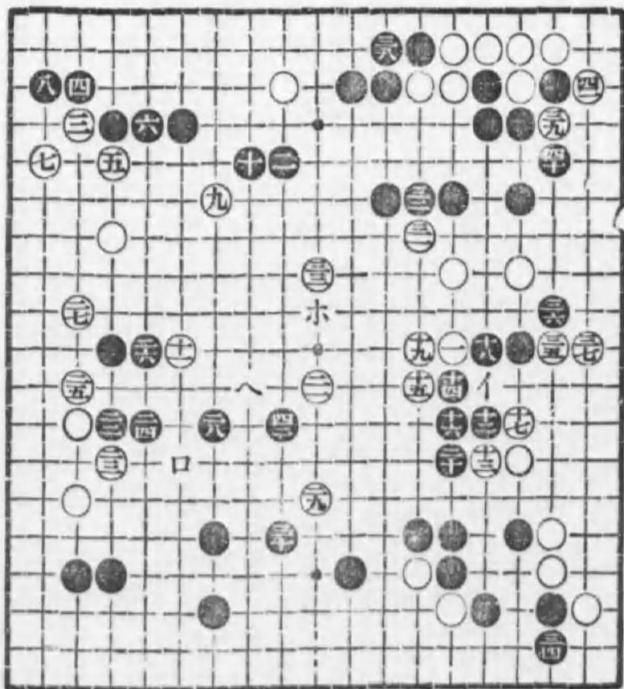
▲第二黒●禍根ヲ絶ツ。

圖の如く緩やかに聯絡するやうにすれば後に禍根が残らぬ即ち●及●の手は禍根を絶つ所以の手である。△白若し●の手を抜いたらば黒は●に打つて攻めるが宜い。黒は四方共に堅くなつて居るから、白は容易に凌げまい。故に●の手を抜く譯には行かぬ。然らば●の處が一番大きい處で、是れで大勢が定まつた。

六子局(第一圖) 手八卅



六子局(第二圖) 手二十四

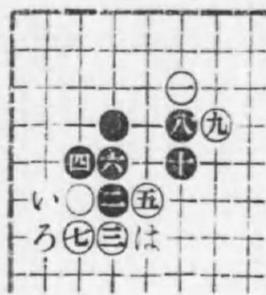


七子第一局

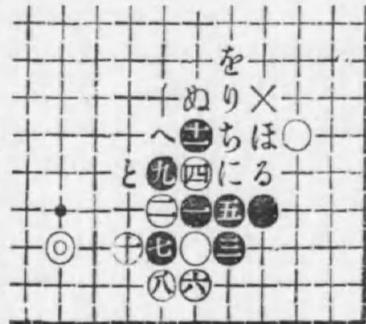
▲第一黒●以下ノ堅實

黒●から●までの定石は少し堅すぎるけれども七目の碁ではこれで充分である▲黒●ノ變化。黒●は星下の●印に打つ方が幾分か働いて居る。其時白○に掛ければ黒は甲圖の如く打つべく、其手順中白○にて●に下つても黒は矢張り●にツケルのである。又白○にも粘がす●にも下らずして●に掛粘いたらば黒は●に切つて戦つて宜い▲黒●大ニ好シ黒●にて●に飛でも差支ない。併し既に白から●の要點に開かれて、行止まりになつて居るから、圖のやうに●の處にボウシに掛けられぬやう先鞭を着ける方が働きがある▲白○ノ變化。白○にて●に掛つたらば此場合では黒は乙圖の如く●印の白子を凝らし

圖甲

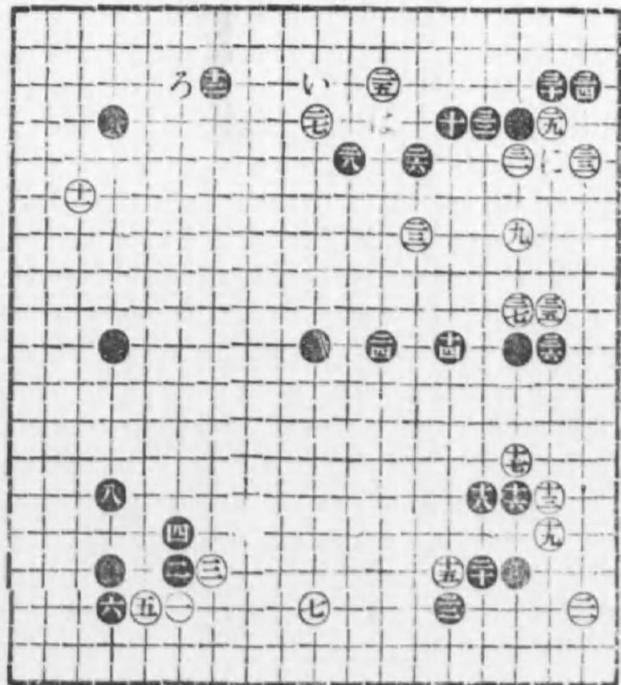


圖乙



てやるが宜い。初學者の注意までに、白若し●に打つて居るならば●に引つ掛けて絞ることを忘れてはならぬ。即ち白○に

(圖一第) 勢之勝必

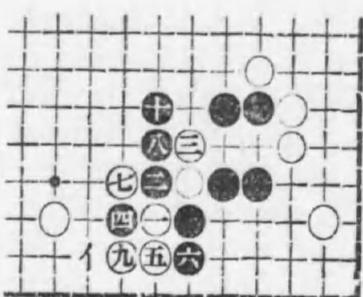


切らば黒は必ず●に伸びなければイカヌ。多くの場合切り石は決して一目で捨つべきものでない。白○、黒●、白○、黒●と絞り、白○に粘いだ時黒●に伸びて宜し。▲黒●ノ變化。黒●にて●に飛んで居ても宜い。併し七目とか井目とか真ん中の星に在る時分には成べく●、●と云ふ風に聯絡して了ふ方が一番打ち易い。さう打たれると白は殆ど策の施しやうがない。▲黒●ノ變化。此手で●にハネ出し、白○に切つた時●に下つて戦ふのが一番厳しいのであるが、併し七目の碁としては圖のやうに打つて居る方が紛れがない。

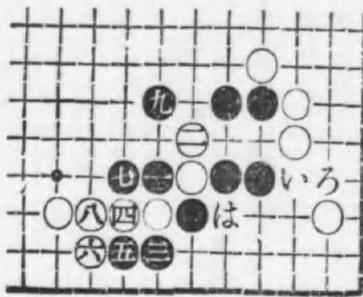
▲第二黒●ノ狙と。黒●、●と隅を固めながら暗に●、●の二子を狙つたのは意味が深い。モウ一手攻められては危いから白は敵を固めるけれども仕方がない。●以下●まで活を圖る外ない▲黒●ハ堅實。是れならば少しも紛れがない。

▲第二白○ノ變化

圖丙



圖丁

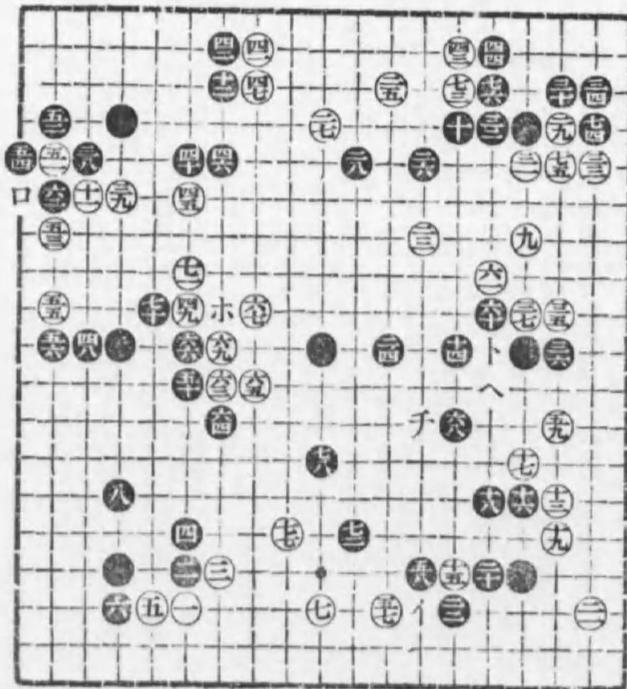


白○にて●にハネル手段もある。其結果の一例を擧ぐれば丙圖の如く。其手順中白○に切らずして單に●に曲れば黒●に粘いで●の約へと●の掛けを兩腕みドチラか取れる夫れから黒●の手で●にハネても悪くない。其結果は丁圖の如く二目を取るのである。其手順中白○の手で●に曲れば黒先づ●に突出し白○と約へさして●の切を防いでから●に伸び出すが宜い。

▲第二黒●ノ味大ニ好シ

斯う云ふ處は間があつたらボンと打抜くに限る。此一目取は十目以上の得で、第一隅の方には何にも味がなくなる一方に敵の眼を奪つて攻めて居

(圖二第) 勢之勝必

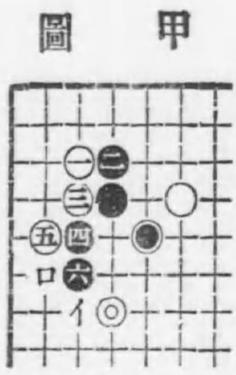


る手だから大きい。之を捨置く●に劫に受けられて非常に味が悪くなる。▲黒●ノ變化。此手で●にハネ込んで劇しく戦ふ手段もある。併し白が●と掛粘いだのは次に●にノグキ、黒●に粘いだ時に●邊に打つて此黒を攻めやうと云ふ伏線であるから、七目の碁としては弱者は危きに近寄らず●とつながら居る方が間違ひがない。今度●にハネ込まれてはタマラないから●と削をイヤさなくてはならぬ。其結果●までとなつては黒必勝の形勢である。

七子第二局

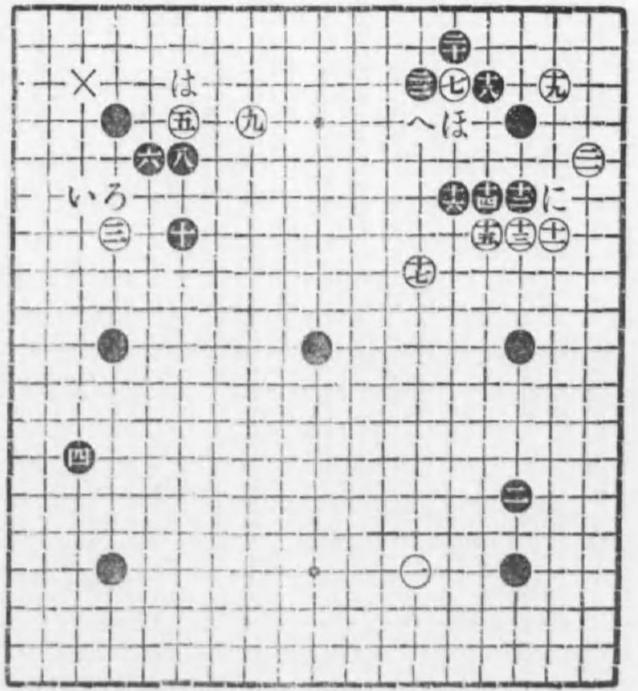
▲第一黒④變化ヲ試ム。

黒④は⑤に應ずるが普通であるが、同じ型ばかりでは参考にならないから變化を示すのである。▲黒⑥ノ含ミ。黒⑥は



白③、⑤と高く掛かっている場合に限って圖の如く尖むのである。若し③の白が④の處に在れば黒は⑥へツケて滑かに出られるから⑥に尖む必要はない。又⑤の白が④の處に在れば矢張り黒は⑥へツケて出動するが宜いのである。けれども圖の如くでは滑かに外へ出られないから敵を前後に隔て猶且つ×印即ち三々の天王山を守る意味をも兼ねて⑥と尖むが宜いのである。白若し隅を掠むべく×印に打込むとせんか、其結果は甲圖の如く、黒⑤までとなつて丁度よく⑥印の黒がカケツキの好形に働くと同時に敵を三方に分斷することが出来る。茲で白が打ちやうに困る。⑥印の白を働かさうと思つて④に押せば⑤に曲られて隅の白が苦境に陥るし、さりとて④は約へずして④に泳げば④に伸び切られて⑥印の白は恰も蟬が大木の蜘蛛の巢に引ツ掛つたやうに動きが取れなくなつて了ふ。ソコが黒の附目で、本圖の如く⑥と尖むのである。然る以上は當分三々の天王山は黒の領分として白は打込を見合はせなくて

(圖一第)勢之勝必



▲第一黒④以下ヨシ。  
白④の手で⑤へケイマに掛れば⑥の方へツケルのであるが、圖の如く大ケイマに掛られた時には④以下⑥と滑かに中原へくり出すが宜い。夫れから白④の手で⑤に尖んだらば黒は⑥印の戸締りをして隅を守るべく、併し圖のやうに⑥の裾明き即ち戸締りのないのを利用して⑥と飛込んで來られては、隅は敵に明渡す覺悟で、⑥とハネ、白③、黒④と柵外の敵兵を虜にすべく、尤も確實な打方である。

▲第二黒④ノ變化。

黒④にては反對に④に飛出しても差支ない。左すれば白④が確實である▲黒⑤よし。白若し⑥の手で⑥に打込んで來たらば黒④に飛び白④、黒⑤と飛ぶべく、左すれば左右の白が自然と包圍の裡に陥つて了ふ故に白は先づ④とツケて黒の様子を見たのである。黒も置石と④の間が廣すぎるだけ④に打込まれる隙があるから圖のやうに④とハネて下の方を用心しなければならぬ▲黒⑥にては黙つて④に粘りでも宜いが、併し幾分コリ形になるから圖のやうに④と切る方が厳しい▲黒⑥ノ變化。黒⑥にては手強く④にハネても差支ない。其結果は乙圖の如く④までとなつて黒が宜い。白若し④の手で④に押さば黒⑥に延ぶべく、然らば黒⑥に出る手があるから④以下の四目を取るこ

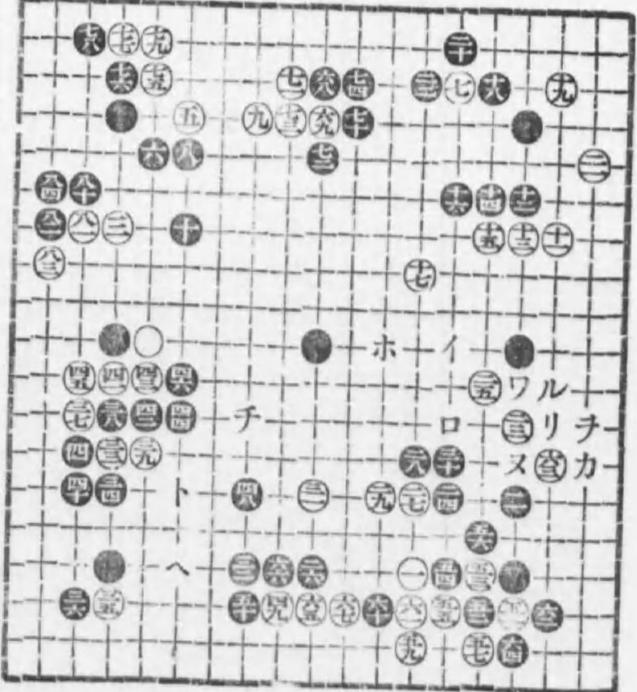


とが出来ぬ。夫れから白④に押さずして④へ下つたらば黒④、白⑤、黒⑥と約へて此攻合は黒が宜い。併し乙圖の如く④とハネル手は紛れやすいから本圖の如く④と粘る方が確かである。

▲第二黒④大ニ好シ。

④以下の白四子を攻めながら⑤、⑥の二目を確實に取切り猶且つ⑥の一子を殆ど立枯れさせたのは働きである▲黒④以下⑥にては外に打つ手もあるが、圖のやうに打つて居る

(圖二第)勢之勝必



方が堅くて宜い。白若し④の手で④に粘りだらば黒④にツケルが宜い、其結果は白④、黒⑤に切り白④、黒⑤、白⑥、黒⑦となつて忽ちに固まつて了ふ▲黒⑥にては④に出で白④の時手を抜いても差支ない。併し圖の如く④以下⑥と堅めるは多少コリ氣味ではあるが、白の方も④と粘る形が重いから、悪くはない▲注意白若し④の手で④に打ちもせば黒は④のハザマに出づべく、又白④にツケれば黒は手強く④にハネ出して戦ふが宜い。左すれば④以下⑥までの白が重いから始末に困るだらう。以下黒⑥までとなつては必勝の形勢である。

七子第三局

▲第一黒◎稍々堅シ。

黒◎にては手強く◎に押ししても宜い。然らば白は◎に尖む位のものである。ソコで黒◎に飛ぶか、或は◎に備ふるか孰れでも宜い。◎に飛んだ時に白若し◎に突出さば黒は◎杯に約へずして◎にユルメ白獨ほ◎ならば黒◎と伸び切つて二目を捨てる方針で打つが宜い。▲黒◎にては先づ◎に尖みつけ白◎に立つた時◎に夾む趣向もある。

▲第一黒◎堅實。

黒◎にては◎に飛ぶも亦通形である。併しさうすると白◎に打込んで来るは必定で、幾分か紛れ易くなるから圖の如く◎と關門を締切つて置く方が安全である。

▲第一黒◎宜し。

白◎、◎の高掛りに對しては圖の如く◎と尖んで敵を前後に隔つることが肝要である。白若し◎の手で低く切りに掛つた場合は黒はやはり之を隔つる意味に於て◎にツケ白◎、黒◎と延びて然るべく、又白一路遠く◎に掛かつても黒は矢張り◎に打つて敵の聯絡を妨ぐるが宜いのである。と云ふのには◎の控えあり、上には◎の締りがあつて、彼此れ白を孤立せしめて之を攻める恰好になるからである。▲黒◎は手を抜いて◎に飛び而して白◎にハネた時に◎へ延びても宜い。

▲第一黒◎ノ變化。

黒◎にて◎に切り白◎、黒◎と一目を打抜いても宜い。左すれば白は◎に粘ぐ外なく、ソコで◎に打つて◎の白を攻めるも亦策の得たるものである。▲白◎は已むを得ぬのである。若し此手で◎に粘ぐとすれば黒は◎に押すべく、ここで白は打ちやうに困る。◎に引くは筋違ひであるし、さりとて◎に突張れば◎に切られる味が残るし、何とも始末に困るから◎と打つ外はないのである。▲白◎にて強ひて◎に約ふれば黒は◎に切るべく其結果は白◎、黒◎、白◎、黒◎となつて二目を取られて了ふ。故に白は◎と下つたのである。

▲第二黒◎可。

黒◎の手で◎にハネコもものあるは能く見受ける所であるが、若し然らば白◎、黒◎、白◎と互られて、黒は◎に粘がなくてはならぬ。さうすると黒の形が凝つて了ふから黒は圖の如く◎と延びるが宜いので、◎までの結果は悪くない。

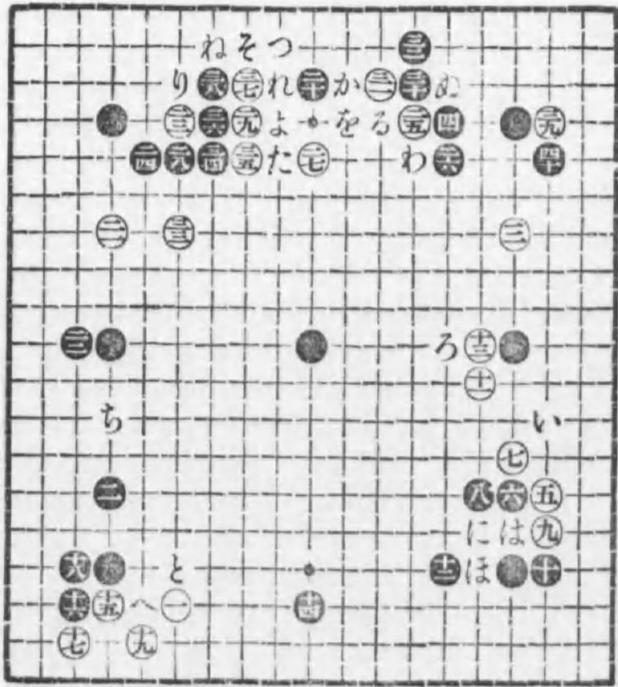
▲第二黒◎ノ變化。

黒◎の手で◎杯にハネルと◎にハネ返されて調子付かれるから◎と下がる方が宜い。併し此手で◎に引くも亦非常に大きい處である。と云ふのは第一圖◎以下の六子が未だ完全に活きがないからである。

▲第二黒◎ノ變化。

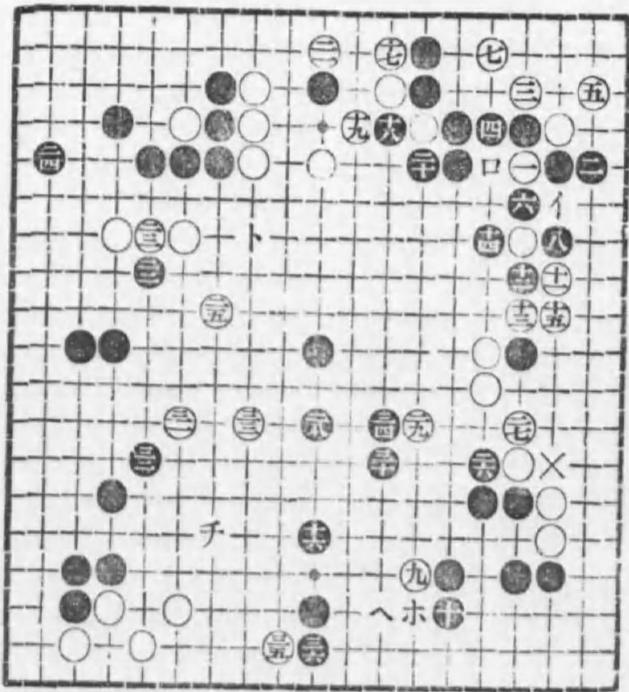
黒◎は◎に煽つて白を◎に逃がして而して◎に圍ふも亦大きい手である。▲黒◎と押して◎と一步先きへ延ばすのは普通は大悪手であるが、併し此模様では×印を切つて凌ぐ

(圖一第) 勢之勝必



杯の必要のない處だから寧ろ◎と曲げ着けて了ふ方が宜い。▲黒◎堅實。白が◎と打つたのは多少◎、◎の薄みを狙つたのであるから、圖の如く◎と聯絡を堅くして固めるに限り。斯うなつては黒必勝の形勢で、白は如何とも策の施しやうがない。

(圖二第) 勢之勝必









▲第二黒◎嚴シクテ宜シ。

黒◎にて◎に受けるは守勢的で、圖の如く◎と約ふるは即ち攻勢的である。守勢、必ずしも悪いと云ふではないが、右方は◎の飛びありて其の壘高く、左邊は◎印の固めありて其の關門嚴重なる此の局勢に於ては◎と外側から約へて戦ふに若くはない。看よ白は只十數目の隅地を掠め得たるに止つて少しも敵に響かざるに反し◎印の白は壘深く陥つて多大の地域を確實に占領されたる姿ではないか。以てかゝる場合◎と強硬に戦ふの有利なるを推知するに足るであらう。

▲第二白◎ノ變化。

白◎にて◎に押すこともあらんか、若し然らば黒◎に立つが一番確かである。其時白◎に突張れば黒◎にハネ、白◎黒◎と泳いで宜い。斯くては後に◎印を切られる疵も残り白◎に押すは無理である▲黒◎、◎手順宜。併し◎の手で直ちに×印に打込む手段もあるが、是れは大分むづかしくもあり、ソナナ事をせずとも、非常に優勢であるから圖の如く守る方が安全である。▲黒◎、◎ハ手順。◎自家の模様を張りつゝ敵の模様を狭め、而して敵が◎と圍つた拍子に又一方から◎と消すが手順である。白若し◎の手で單に◎に約へたらば黒は打ち得であるから手を抜いて他に轉すべきである▲注意。白若し◎の手で◎にツケて來たらば黒は無論攻勢的に◎にハネなくてはイカヌ。其時白◎ならば黒◎に切り、白◎、黒◎と堅く粘りで差支ない。白◎は◎ならば黒◎、白◎、黒◎と封鎖すべく、是れ即ち◎印の下りを利用する所以で、白は如何とも打ちやうがない。故

七子第六局

▲第一黒◎ノ變化。

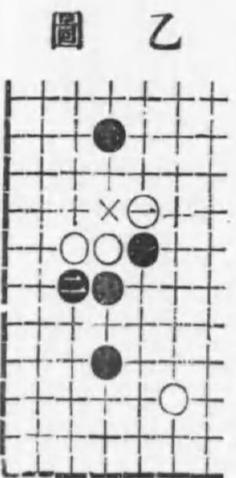
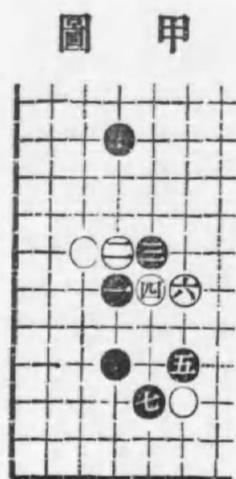
黒◎にては黙つて◎に打つて居るも亦面白い。其成行を示せば則ち甲圖以下丁圖の如くなる。甲圖の手順中、中の置石を働かすべく強硬に◎とハネルは肝要の手で、◎杯にノビルは俗手である。夫れから◎と切つた時に◎とツケ◎と約へて隅を固める手段は至極宜い。夫れから乙圖の如くなつても白の方には×印の疵が残るから黒が悪くない。次に丙圖に於ては◎、◎と外からアテて◎と絞るのが手筋である。斯う云ふ手を記憶して居れば基は必ず強くなる。

▲第一黒◎嚴クシテ大ニ宜シ。

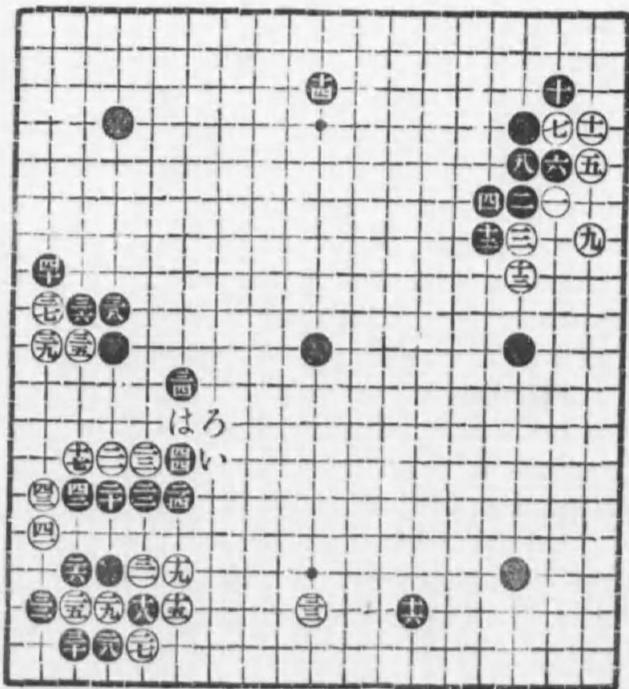
白若し◎に出づれば黒◎はハネ、白猶ほ◎ならば黒◎に截るべきは勿論である。▲黒◎と粘ぐは本手で、是れ又記憶すべき手である。

▲第一黒◎禍根ヲ絶ツ。

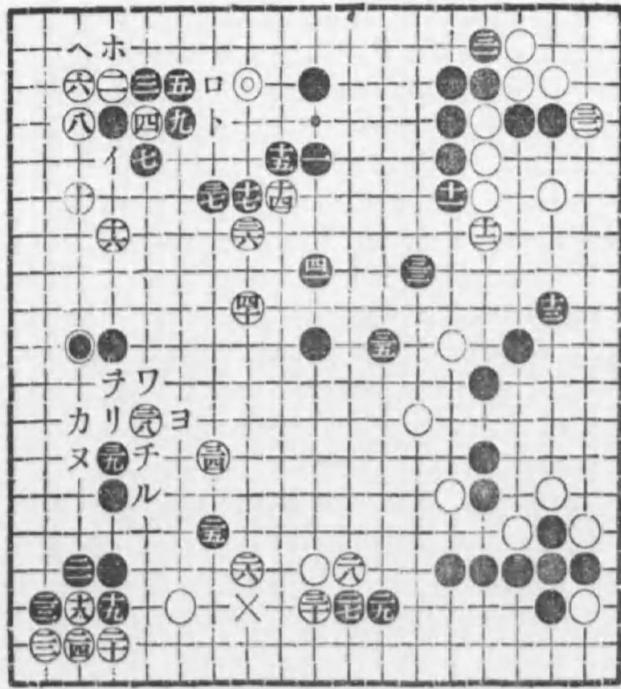
斯うして置けば後に少しも災が残らぬ。而已ならず戊圖の



(圖一第) 局 子 七



手一十四 (圖二第) 勢之勝必



が◎と打つたのであるが黒◎までとなつては必勝の形勢である。



▲第二黒④、⑤ハ機宜ノ變化。

白①、②のハネに對しては③に粘ぐが普通であるけれども  
 ◎印即ち④の打込ある此場合、之を包圍する意味を含んで  
 ④以下⑤と彼此聯絡を斷つて⑥と其出路を遮つたるは即  
 ち機宜の打方である。其手順中白若し⑦の手で⑧の方面へ  
 逃出せば黒は直ちに⑨にツケて低地に壓迫して了ふが宜い  
 これは逆も堪らない。

▲第二白⑩ニ就テ。

白若し⑩の手で⑪に押して來たらば黒⑫にハネ、白⑬なら  
 ば黒⑭に切つても宜し、又⑮へ二段ハネしても宜い。此際  
 白⑯に押出さうとするは無理である▲白⑰と打込んだ此際  
 黒⑱と關所を固めたのは後に禍が残らなくて宜い。

▲第二黒⑲ノ變化。

黒⑲は強硬に⑳にハネル手段もある。其時白若し㉑に切ら  
 ば黒は㉒に引き然るべく、左すれば前後の白が弱しから一  
 時に之を凌ぐことは困難であらう。又白㉓の手で㉔の方へ  
 押して來れば黒は㉕に引くべく、ソコデ白が㉖に走つて來  
 たらば黒㉗に突張り、白切ならば黒㉘に約へて此白に活き  
 がない。

▲第二黒㉙大ニ宜シ。

此處にハネ出されては白は方々に弱石があるからドウする  
 ことも出来ない。白若し㉚の手で㉛に押したらば黒は無倫  
 ㉜に出て宜い。かくて㉝以下㉞と聯絡を絶たれては白は殆  
 ど潰れ形である。

七子第八局

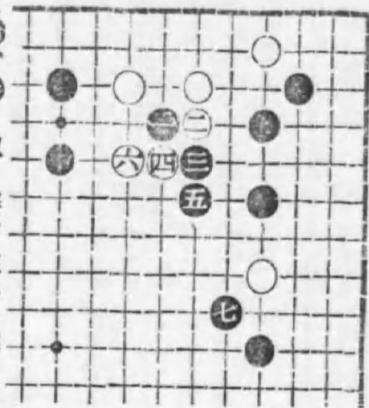
▲第一黒①ノ變化、

黒①は普通②に打つて居る方が却て宜いのであるが、併し  
 圖の如く打つても悪いことはない。▲黒③ニ就テ。黒④は  
 ⑤に尖みつけ、白を⑥に立たして、夫れから⑦に飛ぶ方が  
 嚴しくて宜い。ソコデ白⑧ならば黒⑨に尖むのである。

▲第一黒⑩ハ穩健。

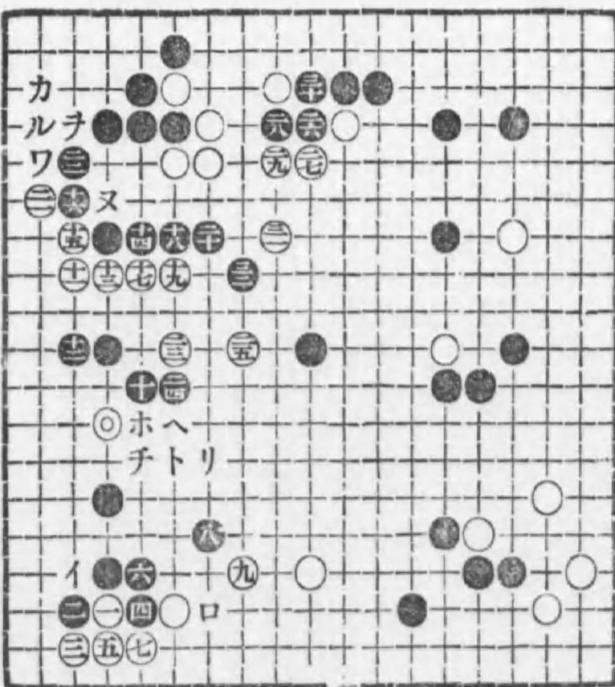
此場合圖の如く締つたのは、極めて穩健であるが、此手で  
 ⑪の白を攻めやうと思へば、先づ⑫にノゾクが手順で、其  
 結果は甲乙二圖の如く、孰れにしても白は苦しい▲白⑬の  
 手で⑭に粘れば黒は  
 ⑮に打つべく、白⑯、  
 黒⑰と一緒に飛ぶ調  
 子が甚だ宜い。

甲 圖



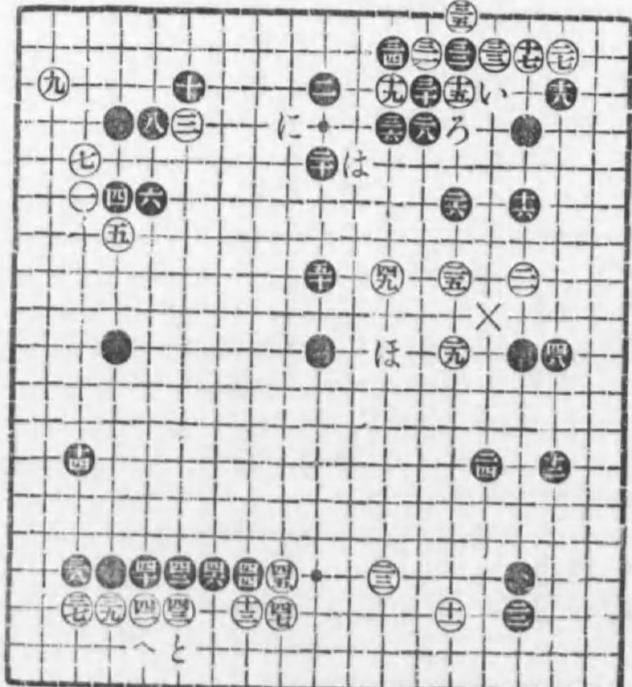
▲第一黒⑰白⑱チ  
 愚弄ス。  
 白が⑲と一ツ押した  
 から⑳とノゾク手を  
 生じ、随つて㉑と切  
 つて㉒と取る姿が生れた譯である。試に白㉓と取つた  
 形を看よ。㉔の白は無くもがな、全く愚化したではないか。  
 此邊の呼吸を自覺すると碁は強くなる。▲黒㉕ヌルシ。㉖

必勝之勢(第二圖)



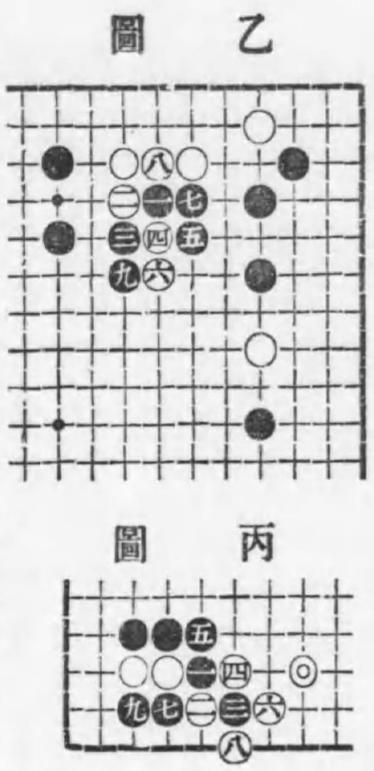
にハネ白①ならば、黒②に二段ハネして丙圖の如く打つべ  
 きである。是れ又③印の白が愚化するに非ずや。其手順中  
 白④にハネズして⑤を切らば黒⑥にノビて宜い。▲黒⑦ハ  
 最好點。次にX印に尖んで⑧以下の三子を攻めやうと云ふ  
 伏線で、此場合此れに勝る好點はない。

必勝之勢(第一圖) 手十五



▲第二白(三)已ムチ得ズ。  
 白(三)の手で直ぐに(五)に打てば黒(四)、白(四)、黒(五)と押着けて中原に模様を作るべく、白は夫れを嫌って先づ(三)とハネたのである。然る上は黒は圖の如く(四)と白の缺陷を衝かねばならぬ。

▲第二白(七)是又已ムチ得ズ。  
 白(七)の手で(八)に突張つて居れば(九)印(第一圖白(三))の石は取られないで済むけれども、其代り黒(七)、白(七)、黒(八)と攻めつゝ中央に地を作られるのみならず味も悪いから圖の如く(七)と粘ぐ外はない▲黒(八)大ニ宜シ。此手で先づ(九)にノゾキ

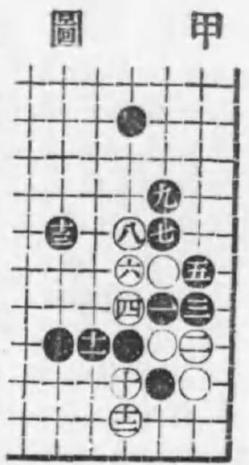


⑨に粘がしてから、(八)に尖む手もある。幾分得ではあるが併し味が悪いから黒としては餘り欲張らぬで、圖の如く打つ方が宜い。

▲第二白(九)ノ變化。  
 白(九)の手で若し(十)にでも打つて(九)印一子を助けるならば黒は無論X印に圍つて了ふが宜い。是れはたまらぬ。故に白

七子第九局

▲第一黒(四)善シ。  
 白(三)と打つた此場合、此隅を守るには圖の如く(四)と打つが一番宜い▲白(七)の手で(九)にカ、ツた場合には黒はヒラキとハサミとを兼ねて(八)に打つのが釣合の好い手である。



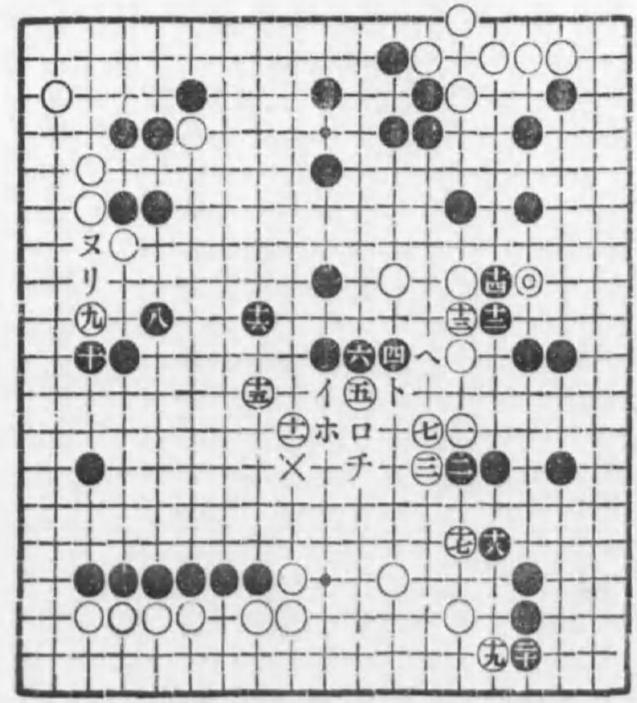
▲第一黒(六)ヤ、緩シ。  
 (八)の一子が丁度好い處に居つて、形が整ふから、強ひてむづかしく打つに及ばぬ。

▲第一黒(七)穩健。  
 堅實ではあるが少しヌルイ傾きがある。此際(七)へ尖みつけ白(八)、黒(九)或は(六)まで攻寄せても宜い▲白(九)の手で若し(十)に伸びもせば黒も亦(九)に伸びて宜い。

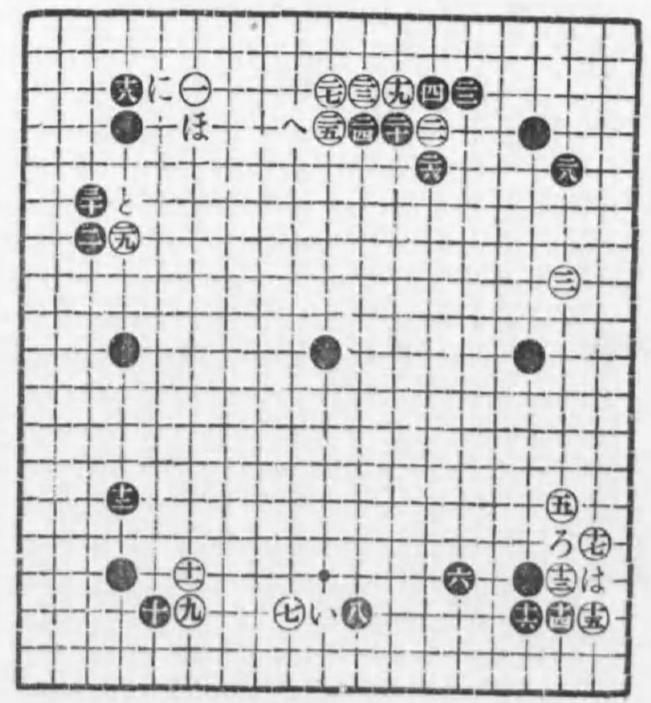
此手で(九)にハネル方が殿しい。併し七目の碁であるから圖の如く穩に打つて充分である。

は(九)印一子を顧みるに違あらず、(十)と打つたのである。ソコで(十)、(九)と突切られ、以下(十)となつては必勝の形勢である。

手十二(圖二第)勢之勝必



手十三(圖一第)勢之勝必



▲第二 黒●堅實。

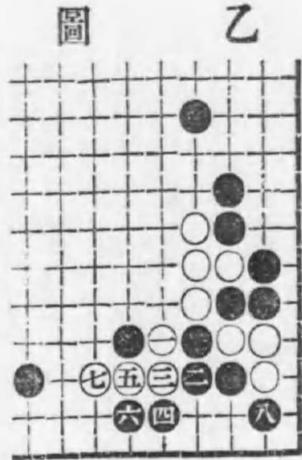
全局の形勢を見るに右上隅、右下隅、左上隅共に非常に堅固で、唯此隅だけが、敵に趣向される恐れあるに過ぎない。故に此隅さへ堅めて了へば、白が策を施す餘地がないのである。そこで黒が●と下つたのは非常に堅實で、音に此隅を守るばかりでなく、(暗に第一圖●以下の三子を攻める意味に當つて居るのである。

▲第二 黒●ノ變化。

此手で●に尖みつけ白●、黒●と互る手もあるが、これは何となく味がわるいから、圖の如く●と切る方が早くキマリが着いて宜い。

▲第二 黒●用心深シ。

●とツケたのは敵を攻めつゝ●印の白を擒にする手段で、アトに●の處を切る得が残るから非常に宜い。

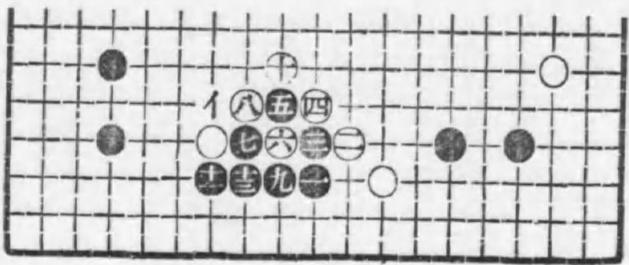


▲第二 黒●ニ就テ。

此手で●に尖みつけ白●、黒●にアホルか或は●に飛んでも宜い。併し第一圖●以下の白が堅くなつて居るから圖の如く低地に聯絡させた所が何んでもない。●と尖んで外勢を張るに若くはない▲黒●にて●に飛んで白を攻めても宜い。其代り白から●に飛出されるから一得一失である。▲

七子第十局

ト劫● 圖 甲



▲第一 黒●ヤ、緩シ。

黒●は●に尖みつけ白●を●に延ばして●に尖むが普通である。▲白●で以て●へケイマすれば黒●に飛ぶが宜い。

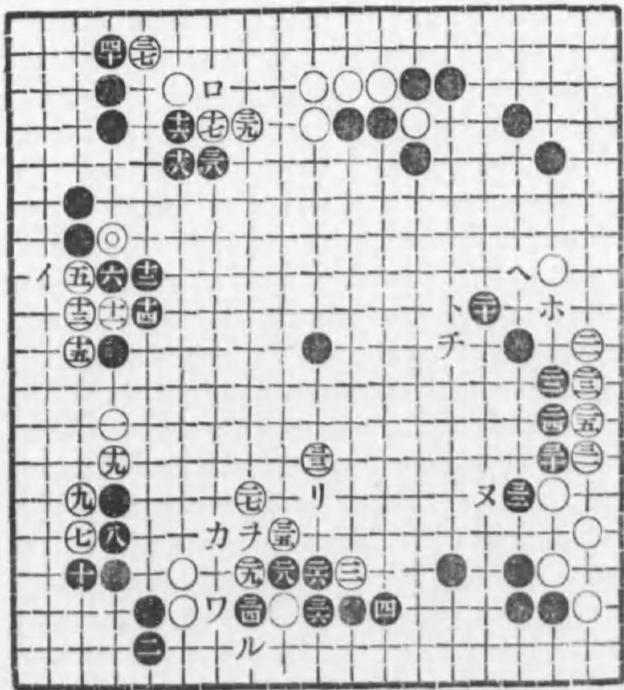
▲第一 黒●ハ安全地帯。

黒●の打込は一番安全である。これに●に打込むもある。其結果の一例を挙げれば則ち甲圖の如くなる。其手順中黒●の手で●に切り、白●に切を取り、黒●に粘いで戦ふ手段もあるけれども圖の如く打つ方が穩かである。

▲第一 黒●、●嚴シ。

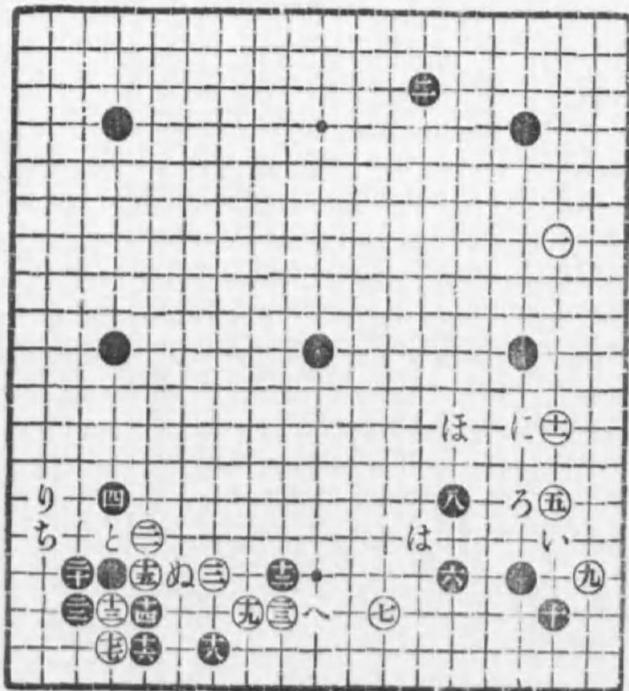
是れには白は殆んど打ち方に困る。已むを得ず●と約へたのであるが、●の飛びも亦嚴しい。●、●二子を活かさうと思へば●にハネて黒●、白●と打たなければならぬ。左すれば黒は●に下がるべく、斯くては外側に於ける●、●二子は勿論、●の一子も亦非常に危くなる。又一方●の先手ヅケも利いて居るから●にハネて此二目を活きるは無理である。左ればこそ白は●と

手十四 (圖二第) 勢之勝必



白●にて●に一目を取りもせば黒●にハネ込み白●に取り黒●に突出して兩断されて了ふから白は圖の如く打つ外はない。斯くて●までとなつては黒が必勝の形勢である。

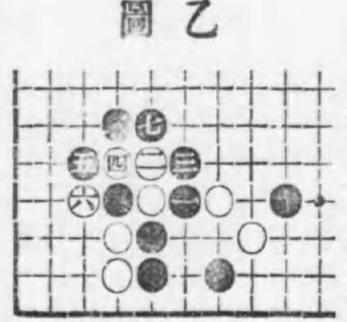
手三廿 (圖一第) 勢之勝必



打つたのである。▲黒●ヌルシ。●にハネ出して乙圖の如く打つ方が嚴しい。其手順中白●に取らずして●に出づれば黒●に粘ぐべく、是れも白は殆んど打ちやうがない。

▲第二黒●大ニ宜シ。  
 之を捨置くこと、白から●若くは④に隔離されて非常に困難するから圖の如く用心するに如くはない▲黒●堅實。●に應ずるが普通であるが、併し●に打込まれると紛れ易いから七目も置いては圖の如く堅く打つに限る。

▲第二黒●ノ變化。



黒●にて●に尖みつけるもある。白●ならば黒●に延ぶべく、是れは黒の注文通りである。夫れから白●に延びずして●にハネれば黒●にハネて宜し。又白●にも延びず●にもハネズして直ちに●に打込めば●に下つて宜い。ソコで白●にハネなば黒●に約へ、白●、黒●と粘ぎ然るべく、かゝれば白●、●の二子か、●の一子かを取ることが出来る。併し圖の如く只●と延びるも亦定則である。

▲第二黒●此場合宜シ。

●に二段バネの出来ぬ處だから●とハネルが宜いのである。●、●と一子を取られても多少白を凝形にすることが出来るから●の一子は惜むに足らぬ。白若し●に切らずして●に約ゆれば黒●にハネ、白●、黒●と掛粘ぐべく、次に●の先手粘ぎが利いて白が眼なしになるから、是れは黒が宜い▲黒●急ガズ。●に尖んでも宜い。

▲第二白●ノ變化。

●は此場合に適した嚴しい手である。白若し●にて

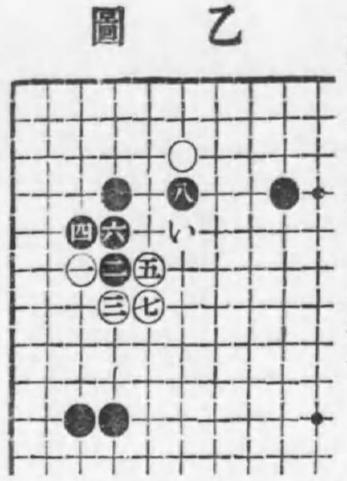
七子第十一局

▲第一黒●嚴シ。



黒●は●に打つが普通であるけれども、圖の如く●、●との白を隔て●打つも亦嚴しい打方である。▲黒●ハ堅固。紛れのない手であるが、併し強硬に●にハネて打つ手もある。其結果は甲圖の如く●以下の白を征に取ることが出来る。萬一征の當りある時は●にハネズして●に曲り白●に取つた時●に中て、二目を取つて悪くない。

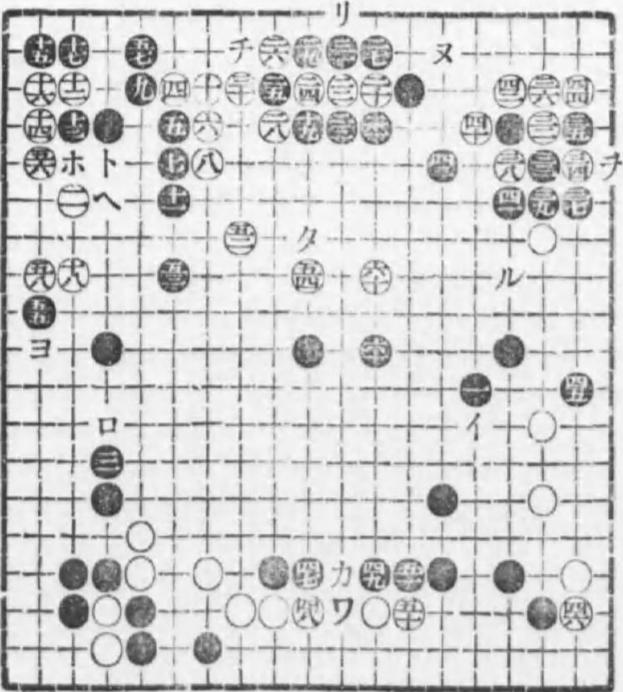
▲第一黒●以下ノ應手。



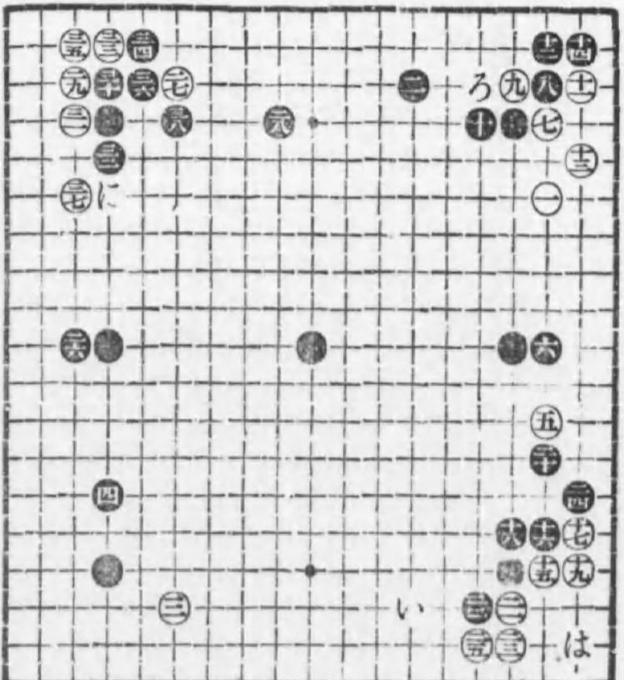
●以下●までは必然の成行で、此場合に適した打方である。▲白●肝要。黒から●に約へられると、次に●に打たれて死んで了ふ。さりとして白●に打つて後手で活きるは忍びない。故に●の曲りは已むを得ない。

●に約へたらば黒は●に約へよ。是れは白がうまく行かぬ。●に掛粘ぐ位のものである。左すれば黒●に打抜くべし。是れは白がさつぱり詰らぬ▲白●にて●に並ばゞ黒は●に添ふが宜い▲白●にて●に打てば黒●に圍つて宜し。本局黒●までの結果は正に必勝の形勢である。

必勝之勢 (第二圖) 第十六手



必勝之勢 (第一圖)



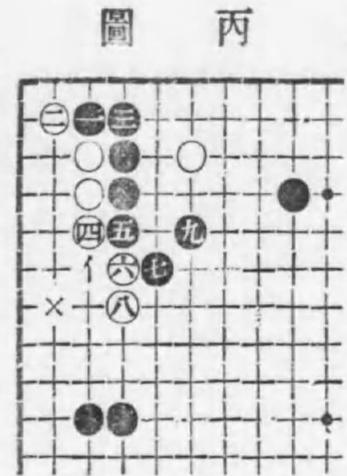
▲第一黒●大ニ宜シ。

此場合に適した最上の打方である。此手で●に打つても宜いが、夫れは●と固めた手と重複する嫌ひがあるから必ずしも急ぐ必要はない▲白●ノ變化。白若し●にでも掛つたならば乙圖の如く打つべく、其手順中白●の手で●に尖まば黒は無論●に切つて戦へ。何れにしても前後に黒の伏兵が居るから白は非常に困る。故に●と打込んで振替る手段に出たのである。

▲第一 黒◎ノ變化

黒◎の手で◎にハネル手段もある。其結果は丙圖の如くなつて次に×印の缺陷を狙ふ手があるから、白は未だ本當に生きて居ない。其手順中白◎の手で◎に飛べば黒◎に延びて宜い。

▲第二 白◎ハ嘴着手段。



是れは◎に飛ぶが本手である。左すれば黒◎、白◎、黒◎、白◎となるが普通である。然るに白が◎と横に飛んだのは◎に約へさせて、夫から◎にハネて◎に取らせやうと云ふ趣向である。さうなると白◎

▲第二 黒◎ノ變化

此手で◎に延びるも亦非常に好い處である。▲黒◎は好い處である。之を捨置く◎印の白一子が復活する恐れがあるから、圖の如く打つて其死命を制するが肝要である。▲黒◎、◎は確かな打方であるが、此場合に限り◎にフクレ白◎、黒◎に粘ぐ形もある。併し◎にフクレルは逆手だから不斷は宜くない。▲白◎にて◎に取れば黒は無論◎に掛くが宜い。是れは黒の理想とする所である。▲黒◎にて◎に尖みつける

七子第十二局

▲第一 黒◎好シ。

圖の如く白が◎と高く打つてある場合には◎と打つが適當の位置である。普通の如く◎のモクシタにヒラクと白から◎にツケられて混雜するから圖の如く打つ方が紛れが少ない。▲黒◎、◎ノ手順好シ。これは右邊の置石を捨て、大勢を制する所以である。

▲第一 黒◎ノ手段。

黒◎にては普通◎は尖むべきであるが、夫れは黒◎、◎等の副堡のない場合で、此場合に於ては◎の副堡を働かすやう先づ◎と詰めて◎に應じさして夫れから◎と打つ方が宜いのである。

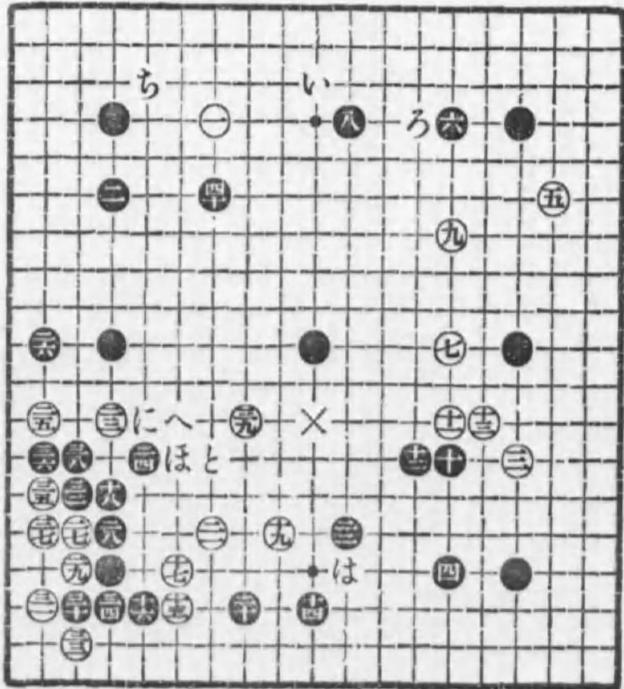
▲第一 白◎已ムチ得ズ。

白◎にては◎に押したい處であるが左すれば黒◎、白◎は◎ならば黒◎と延ぶべく、斯くては◎以下の白が自然に弱つて了ふから自分で自分を攻めるやうなものだから◎に押す手はない。

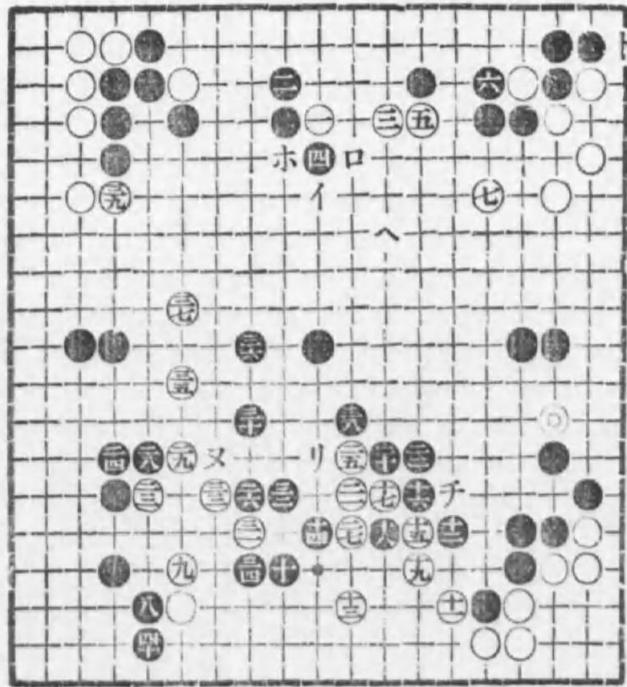
▲第一 黒◎ヤ、緩シ。

實は此手で×印邊に飛んで◎以下の白を攻める方が嚴しい。▲黒◎にては◎に尖んで居るも亦良い手である。

(圖一第) 勢之勝必



手十四 (圖二第) 勢之勝必



手もあるが、圖の如く飛ぶ方が優る。以下◎、◎となつては例に依り黒必勝の形勢である。



▲第二白の變化。

白の手に④に切る手段もある。若し然らば黒③に下るべく、ソコデ白④ならば黒③に飛ぶが宜いのである。茲で白は殆ど打ちようがない。

▲第二黒の變化。

黒の手に甲圖の如く①と切り以下白②となつた時手を抜いて第二圖③に飛ぶも亦一策である。

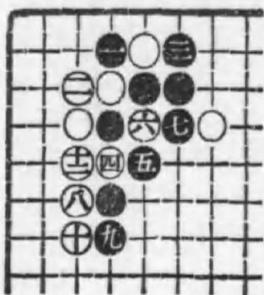
▲第二黒のヤ、堅キニ失ス。

此手で③に打たれると白は一層困るので殆ど打ちようがない。併し圖の如く打つても大勢に影響はない。

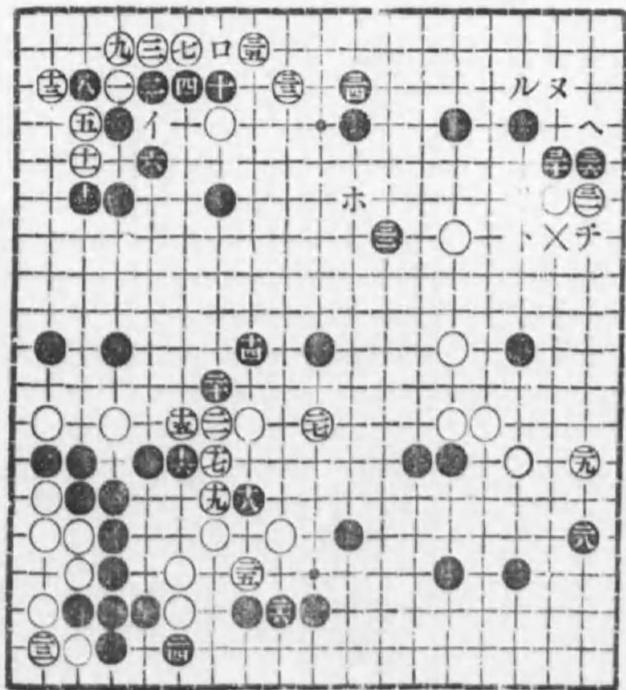
▲第二黒の變化。

黒④にては⑤に飛んで居ても宜い。是は次に×印のツケを狙ふ手である。其時白若し⑥に約へたらば黒⑦にハネべく、又白⑧に約へずして⑨の方にハネれば黒⑩にハネルのである。

▲甲圖



▲必勢之勢(第二圖) 手六十七



る。▲③の變化。此手で④に約へて居ても充分である。

▲第二白の變化。

白④にて⑤に打込まば黒⑥、白⑦の時黒は轉じて⑧に約へて此邊一帶を地にすべく又、圖の如く⑨と打ち込まれたからは⑩と固め次に⑪と約へて隅を地にすべく、斯くては次に⑫にハネて白⑬の時×印を切つて二目を取る手が残る。孰れにしても黒必勝の形勢である。

八子第一局

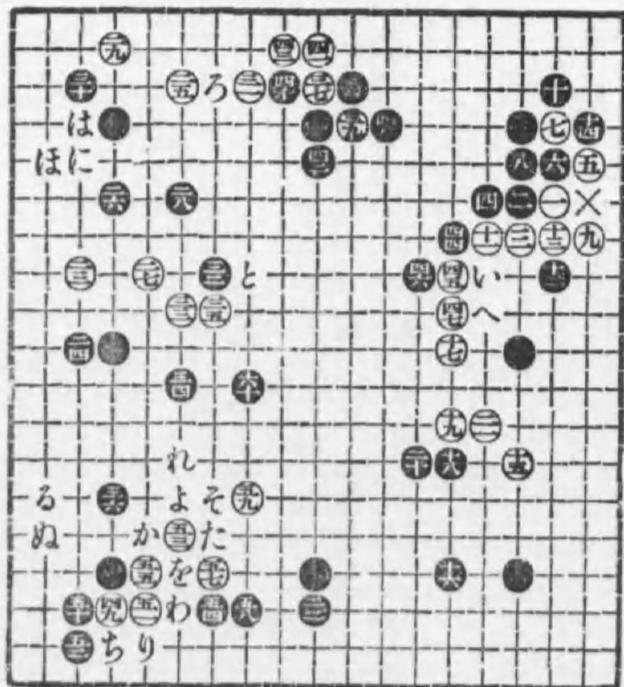
▲第一黒のつけのび堅實。

白①のカ、リに對して②とツケ白③、黒④と伸びるを「頂ケ定石」と云ふ。是れは八目位の碁では堅くて紛れないから至極適當の應接である。▲黒⑤肝要。白⑥の尖みに對しては⑦と中で、敵に手創(×印)を負はすが肝要である。▲白⑧の變化。白若し⑨の手に⑩に粘ぐこともある。左すれば黒⑪に曲り白⑫に伸びた時、轉じて⑬の關門を締切るが宜い。▲黒⑭で⑮に打つて逃出す手もあるが、八目の碁としては餘計な勢力である。他に開拓の餘地が澤山あるから圖のやうに簡單に⑯以下⑰と自己の勢力範圍を固めて充分である。

▲第一白の嚴シ。

黒⑱では⑲に大斜走するも亦好い處である。併し圖のやうに敵に迫つて打つても亦嚴しい遣方である。▲白⑳にて若しも㉑に肉薄して來れば黒は㉒に約へ、敵を隔て、打つが㉓の締りを働かす所以である。夫から白㉔にツケズして㉕に打つても黒は矢張り㉖へ尖みつけて居るが一番嚴しい。或は

八子局必勝之勢



●に下つて居ても宜い▲黒●、●と敵を隔てつゝ自分の姿勢を整ふるは最も正しい打方である▲黒●は受けなくても宜い。●に詰めるも亦一策である。

▲第一黒●、●ハ手順。

白●、●と切違へたのは黒を迷はさうと云ふ手段である。此際黒は●とハネ込んでから●と伸びるのが本手である。白●に互る外ない。ソコで黒は直ぐに●にハネたいのであるけれども●の一目は征の當りがあつて取ることが出来ないのである。一轉して征の當りを響きがてら●とハネルが宜いのである。斯時白若し●に伸びて●の一目を助けんか、左すれば黒●に尖んで逃出すべく、之を逃出されては折角の白地がみんな無くなつて了ふから、白は●の一目を助ける譯に行かず、●とハネたのであるが、之に對して厳しく●と二段ハネして●と粘がせ、●と征に掛けたのは即ち豫定行動で、斯うなつては白が最初●、●と切違つた目算はガラリと外れて了つた譯である。

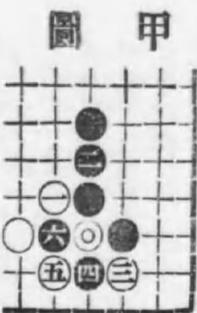
▲第一白●已ムテ得ズ。

白●にては本手は●にハネ捲くつて●以下の白の凌ぎをしなくては危い。けれどもさうすると●邊に備へられて、打ち場所がなくなつて了ふから、此際圖の如く襲撃を試みるか、或は●に打つ外ない。白若し●に打たば、黒●に突張つてドチラか約へて居れば夫れで宜い▲黒●にては●の方から約へても悪くはない。其時白●ならば黒●に下り、白●、●と約へて差支ない。夫から白が●に伸びないで●にハネたらば黒●に粘ぐが本手であるが、茲では●にハネ白●に粘いだ時に黒●に粘いで居るが宜い。斯うなると●

八子第二局

▲第一黒●、●、●ト相呼應ス。

左方に黒●の間飛あり、右方にも亦黒●の間飛ある此場合に●と逃出すは適當である。尤も此手で●に突當り、白●ならば黒●に飛ぶべく、又白●ならば黒●に飛ぶ手段もあるが、夫れよりは圖の如く●と尖む方が働きがある▲白●ノ變化。本圖の如く白●とハネて來た時には黒●と粘ぐが一番堅實である。夫れから白●の手で●にハネれば黒●に粘ぐが宜い。然るに●に粘ぐ者あるは屢々見受ける所であるが、是れは少し堅過ぎる。扱て白●、●の時白●にハネて來たらば黒は必ず



●に切つて他迄切争をするが宜い。試みに甲圖を看よ。白●の手で劫立をしたらば、黒は何處でも捨て、●印に粘いで了ふに限る。左すれば●、●、●の白四子は支離滅裂になつて殆ど大勢が定まつて了ふ▲黒●堅實。此處は今打たぬでも宜い處ではあるが、併し成べく手の透いた時に押すは極めて確實な手である。

▲第一白●ニ就テ。

白若し●の手で●に打込めば黒は●に飛んで白を左右に隔離するが宜い。ソコで白●に飛ぶとすれば黒は猶ほ●に飛抜くべく、左すれば白は何處迄行つても秣場を飛ぶことに

の關門が締切つてあるから白は之を活きるに骨が折れる。

▲第一白●ノ變化。

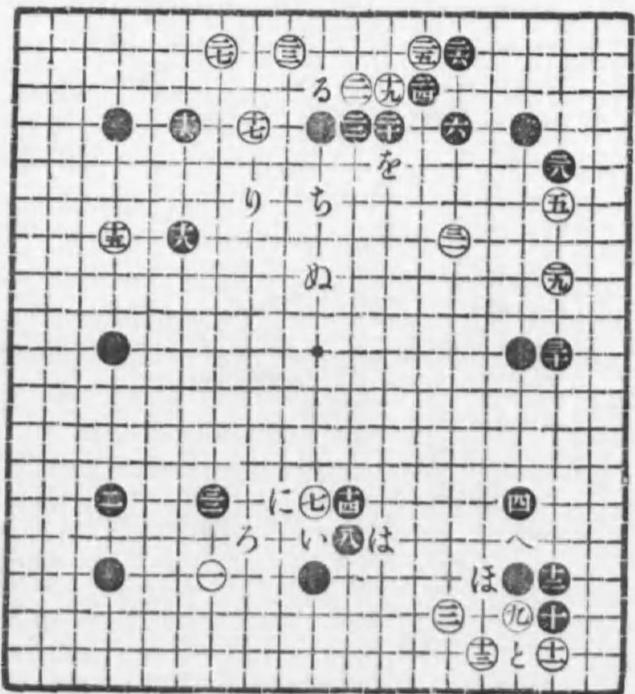
白●にて●に飛ぶ手もあるが、左すれば黒●に飛んで攻むべく白●、●と伸びて宜い。又白●に曲れば黒●にハネ白●ならば黒●にハネて駄目詰りにするが宜い。夫から白●、●の時白●にハネなば黒●、●、●、●にノゾクが急處である。斯の如く白はドウ打つても旨く行かぬ。已むを得ず●と斜走すゝ位のものである。

▲第一白●ノ變化。

白●にて●に飛べば黒先づ●にノゾキ●に粘がして夫から●に飛ぶが宜い。後ろの方は●の關門が閉ぢてあるから●の間に飛込まれた所が一向痛痒を感じない。扱て●までとなつては上下の白は●で敵地に孤立の姿で一方を逃がれば一方が危く、否ドチラも殆ど逃場がない位だから必勝どころではない。殆ど●に●なつて居ない位である。八子の勢力と云ふものは恐ろしいものである。

兵多ケレバ則チ戰フ。

必 勝 之 勢 (第一圖)



なり、且つ兩方を一時に凌ぐことが出来ぬから、孰れか一方が危くなる。故に白は●と低く打込んだのである。▲黒●とツケルのが一番確かであるが、併し此手で●に下り白●に飛出した時黒●に飛んで攻めるも亦厳しい▲白●之を略して黒から●に打たれると總體に眼がなくなるから、是れは已むを得ない▲黒●ハ最好點。●、●の間が非常に薄くなる一方に●の一子は益々逃げにくくなつた。

▲第二黒●強硬。

白○のツケに對しては黒●と遮断して●、●と強硬に打つが宜い。○印の一子を征に取られては黒が悪いが、是れは征の當りがあるから差支ない。白○の手で●に約ゆれば黒●に切り、白●、黒●とハネて○の一子か、○●の二子かドチヲかを取ることが出来る。因つて白●に約へずして●に伸びんか、黒●、白●の時黒●にハネべく、白は殆ど打ちやうがない。故に白は暗に○印の黒を征に取る意味を含んで先づ●とツケたのである。此處で黒がお供をして●杯にハネルと●に切られてドサクサ紛れに征の當りを拵へられて○印の一子を打抜かれるやうな事になるから、黒が之に應せずして●と押したのは確實な打方である▲黒●堅實此手で●に切つても打てぬ事は無いが、左すれば●杯にハネられて非常に混雜するから圖の如く●と曲る方が紛れが無い。

▲第三白●已ムヲ得ズ。

此手で●に伸びたらば黒は●に尖むが宜い。白は●に粘がんならぬ。斯くては●と伸びた一目が三角形になつて如何にも働きがないから、斯う云ふ處は●と一つツケを試みなければならぬ▲黒●此場合●にハネルが厳しい手であるが是れは形勢を張る丈けで實利が伴はぬから、黒は實利を主として●と伸びたのである▲黒●味好シ。黒●と押して勢力を張り、而して●と取つたのは味の好い手である。斯う云ふ石を残して置くは禍根になるから圖の如く取切るに限る。

▲第四黒●宜シ。

八子第三局

▲第一黒●ノ變化。

黒●にては●に約ゆる手もあり、又場合に因つては●に切り、白●、黒●、白●、黒●と隅を明渡して外勢を取る手段もあるが圖の如く●以下●と打つが最も手堅い打方である。

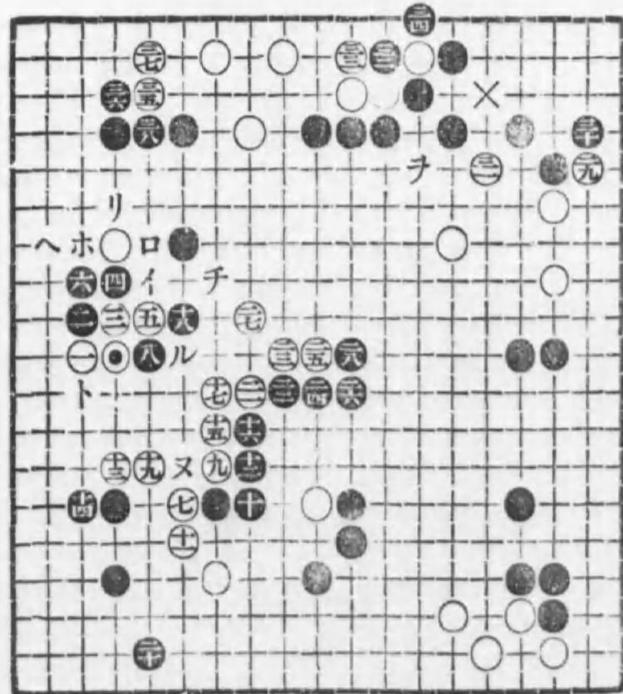
▲第二黒●ノ變化。

白から●と冠せられた時に圖の如く直ちに●と逃出すも一手段であるが、併し此手で一着●に利かし、白●、黒●、白●の時、黒●と關門を固めるも亦極まりの宜い打方である。

▲第三白●ノ變化。

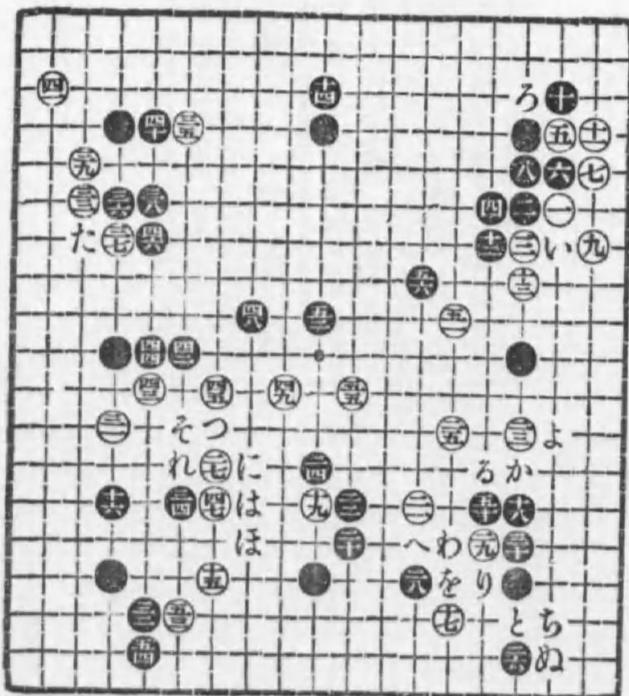
黒が●と尖み出した此場合、白には種々打方がある。白若し●の手で●に押して來たらば黒は●に飛ぶべく、又白●にツクれば黒●、白●、黒●と打つべく、斯くても白は●の一子を包切ることには出来ない。併し黒としては斯う云ふ風に打たるのを恐れるが、白若し●にハネて來たらば甲圖の如く劫立は何處でも利かすに●と粘りで了ふに限る。左すれば●、●、●の四目が腐れて了ふから、他に二手打たれた所が少しも損はない。併し白は直ぐに●のハネ杯を打ちはしないから黒は手が透いたら直ぐに●にハネて禍根を絶つべきである。

手十七 (圖二第) 勢之勝必



白○の手で●に覗いても黒は矢張り●、●と一目を打抜いて居るが宜い。以下●までとなつては白は如何とも策の施しやうがない。

手六十五 勢之勝必局子八



▲第一黒◎宜シ。

◎とハネて◎以下の黒を確實にしたのは次に◎に尖み出して◎、◎の白を隔て、打たうと云ふ準備行爲である。▲白◎已ムヲ得ズ。此手で◎に押すと乙圖の如く兩断されて了ふから圖の如く打つ外はない。

▲第一白◎亦已ムヲ得ズ。

此手で◎に押さんか、左すれば黒◎に突張りソコデ白◎にグズメば黒から◎にノヅカれて兩断される筋があるから面白くない。夫れから白◎にグズマズして◎に沿へば◎にハ

ネる手もあり、又◎に突當り白◎、黒◎と互る手もあるから此方面は殆ど打ちようがない。▲黒◎は少し堅すぎる。◎に締つて居る方が宜い。

▲第一黒◎宜シ。

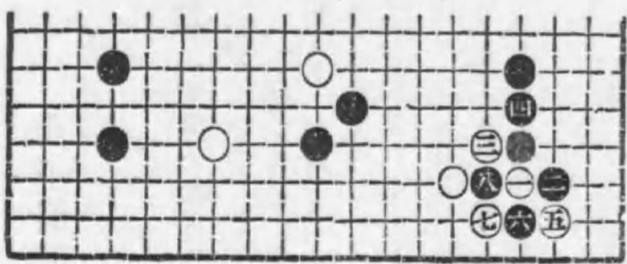
白若し◎の手で◎に應ずれば黒◎、白◎、黒◎と切つて戦ふが宜い。斯くては白は兩方を一時に凌ぐことが出来ないから◎と轉じたのである。

▲第一黒◎ニ就テ。

黒◎と打つのも一策であるが、併し此場合◎に押切つて打つのも好い處である。

▲第一黒◎ノ用心。

精劫十 圖 甲



八子第四局

▲黒◎紛擾ヲ避ク。

黒◎にて◎、或は◎に打つが普通であるが、左すれば白から◎に冠せられて、多少紛れ易くなるから圖の如く◎と飛ぶも亦一策である。

▲白◎ノ變化。

白◎にて◎に出づれば黒◎に約ゆべく、ソコデ白◎に突出さば黒◎、白◎、黒◎と振替つて宜い。又白◎に出でずして◎に尖むとすれば黒は甲圖の如く打つが宜い。斯くては中

圖 甲

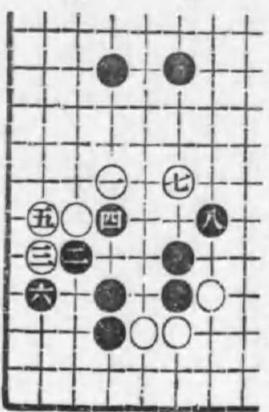


圖 乙



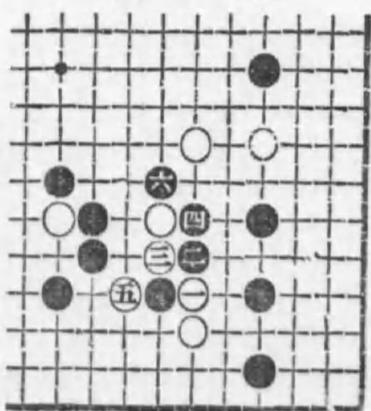
腹の黒が非常に活躍して来るから白が面白くない。故に白は◎と這入つて振替る趣向に出たのである。▲黒◎ノ變化。黒◎にては◎に曲る手もあるが、圖の如く切られて居る方が實は白が困るのであるからさう打つ方が宜い。

白◎、◎と大分勢力が出来て来た此際、◎と曲つて◎以下の黒を確かにしたのは用心深い打方で、且つ中邊の置石一子にも勢援を與ふる所以である。

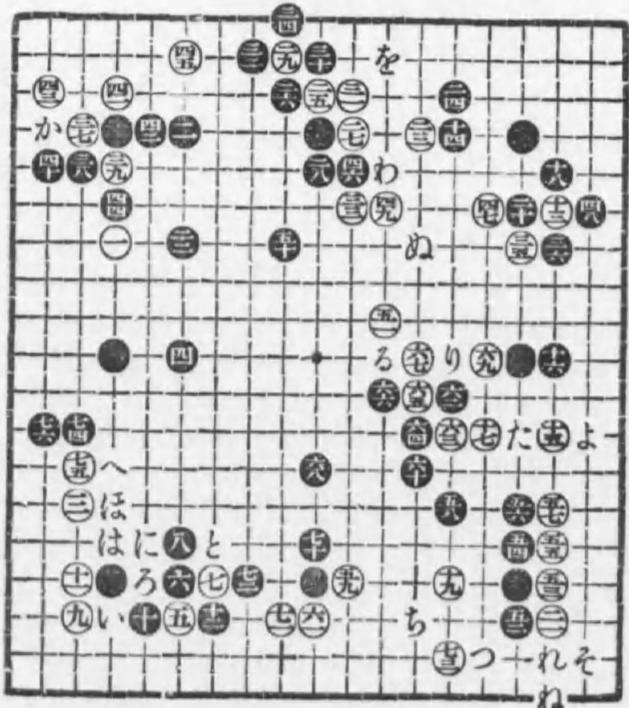
▲第一白◎黒◎ハ見合セ。

白若し◎の手で◎の方に打てば黒は◎に打つべく、此處は黒白見合の場處である。斯くて◎までとなつては黒軍必勝の形勢である。

圖 乙



手六十七 勢之勝必局子八



▲黒●宜シ。

白が●と掛つた場合には黒●に備ふるが普通であるが、然し●と關門を固めて前後の白を攻めて居るも亦殿しい手である。ソコで白若し●にツケれば●にハネて●の石と隔てて打つ方針を執るが宜い。▲白●ノ變化。白●にて●に伸びれば、黒●に飛び白猶ほ●ならば黒●に飛ぶが宜い。左すれば●、●の白が自然と影が薄くなる。▲黒●宜シ。斯う云ふ處を捨てて置くとは何時動き出されるか知れぬから圖の如く禍根を絶つに若くはない。

▲黒●ヤ、緩シ。

●に約ゆる方が殿しい。其時白若し●に切らんか、黒●に尖んで聯絡すべく、是れは白が一番困る。

▲黒●ハ玄人筋。

白●と飛んだ時に黒●と打抜いて他日黒●、白●、黒●と出切を狙ふは旨い打方である。玄人の方では是れが普通の手法になつて居る。然し八目も置いてある碁では●、●の二子が征に取られる氣遣ひがないから前述の如く出切つても差支はないが其代りダメ詰りになるから味が好きくない。▲白●ノ變化。白●にて●にハネル手もある。若し然らば黒は堅く●に粘ぐが宜い。

▲白●ノ變化。

白●の手で●に約へたらば黒は乙圖の如く打つが宜い。斯くては右方が堅いから白は全部死んで了ふ。然し右方の黒が堅固でない時分には●へハネ込まずして●に一間飛んで居るが宜いのである。▲黒●多少ヌルイ。之を●邊に代へたら白が一層困るのである。

八子第五局

▲第一黒●ノ變化。

黒●は●に打つても宜い▲黒●では●に打ち而して白●ならば黒●と飛ぶが普通である。然し圖の如く打つも亦一策である。

▲第一白●ノ變化。

白若し●の手で●にハネて來れば黒は甲圖の如く打つが宜い。此れは白が甚だマヅイ。其手順中白●の手で●に飛ぶとすれば黒●に粘ぐべく、ソコで白●にハネ込まば黒●に切つて●の一子を擒にすることが出来る。是れも白が宜しくない。夫から白●にも附けず●にも飛ばずして×印に曲がるとせば黒●に約へ、白●、黒●と飛ぶべく、孰れにしても黒が悪くない。▲黒●堅實。斯う云ふ處を捨置くとは將來の禍根になるから、此機會に於て其の禍根を根絶するに限る。

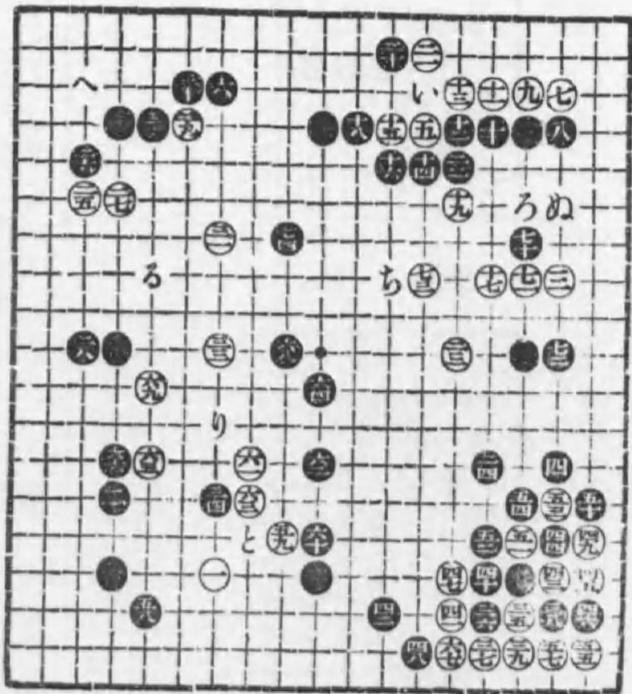
▲第一黒●、●大ニ宜シ。

白●のカ、リに對し●と尖みつけて●と關所を堅めたのは機宜に適した打方である▲白●にては●に打込みたい處である。其結果の一例を舉ぐれば則ち乙圖の如く、白若し●の手で●に逃出す結果は参考圖の如く●と掛けて取られて了ふ。夫から乙圖の如く白●と打込まずして●に突張り、黒●の時白●と置く手もある。其結果は即ち丙丁兩圖の如

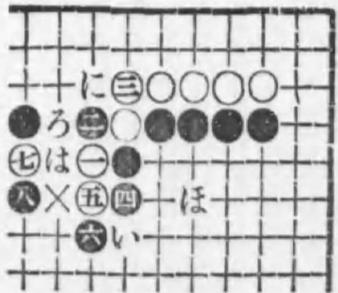
▲白●ノ變化。

此手で●に包圍したらば黒は●に曲つて差支ない。何故かと云ふに次に●にツケルか、或は●に割込んで●に宜る手段あるのみならず一方には●にハネ、白●、黒●、白●、黒●と飛出す手段があるからである。以下●、●となつては矢張り黒必勝の形勢である。

必勝之勢 取目 手四十七



甲圖



く、孰れも白が面白くない。故に白は軽く●と打つたのである。▲黒●は●と同様、禍根を絶つたのである。

▲第一黒●、●宜シ。  
白●のハネに對しては單に●に粘ぐが普通であるけれどもさうすると●の黒の働きが乏しくなる。故に此黒の働きを殺がぬやう●とハネてから●と粘ぎ而して●と詰めて行つたのは機宜の措置である。▲黒●の手で●に二目を取切つて居るも亦宜い。然し圖の如く打つ方が味が良いから無論悪いことはない。

▲第一黒●、●大勢ヲ制ス。

黒●にて●と尖みつけて居れば●の白を擒にすることが出来たけれども夫は一小部分の利得に過ぎぬ手で、圖の如く●、●と飛んだのは左右の白を隔て、打つ趣向で、大勢を制する所以である。▲白●ハ無理。●以下の白が弱いから實は●邊に備へて置かねばならぬのであるが、左すれば●に切られて地が無くなつて了ふから無理とは知りながら圖の如く粘がなくはならぬ。▲黒●は多少ヌルイやうではあるが、次に●に打つて兩断しよう云ふ含みがあるから白は是非共●と補はねばならぬ。ソコデ●とノゾキ●と下つて白の眼を奪ひつゝ地を固め、而して●と打つたのは好手順で一方には●に尖んで眼を奪ふ手あり夫から又一方には●に斜走して兩切を狙ふ手があるから斯うなつては黒必勝の形勢である。

八子第六局

▲第一黒●、●ノ趣向。

黒●と攻めて白●と外を打つた時分に黒●と飽まで●の白に迫つたのは當を得た打方である。詰り白は攻勢を先にしよう云ふ策戰で●、●と打つたのである。黒若し之に應じて中邊の置石の運動を起すと攻勢を先きに占めらるゝから其機先を制して反つて●、●と攻勢を取つたのである。

▲第一黒●、●好シ。

黒●と飛出し白を●に圍はして而して●と●の一子の出路を塞いだのは至極宜い。白若し●の手で●邊に出路を求めれば黒は●に斜走して中の星の石に聯絡を附けるは勿論である。併し●と一方を圍つた以上はドウしても圖の如く白●と圍はねばならぬ。ソコデ黒●となるが普通である。

▲第一黒●、●就テ。

黒●は●に打つが普通である。併し●、●と前に打つてあるから其意思を襲いで●と打つが聯絡ある打方である。

▲第一黒●、●變化。

黒●にては此場合甲圖の如く打つも亦一策である。併し普通は●と押す筋は面白くない。▲黒●稍々堅キニ失ス。黒●にては寧ろ●に一間飛ぶ方が働きがある。

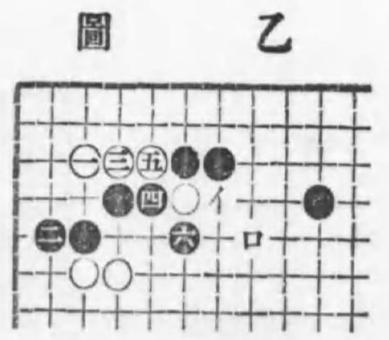


圖 考 参

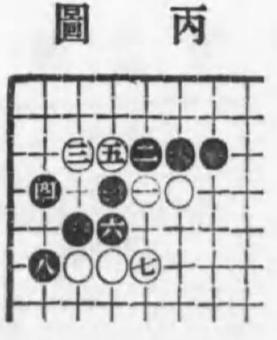
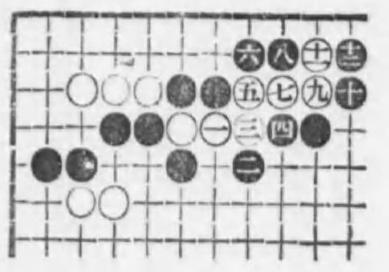
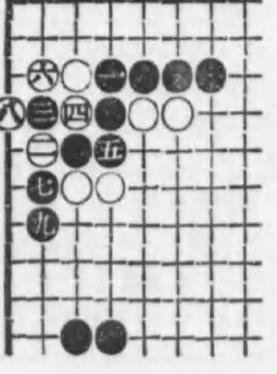


圖 丁



▲第一黒●ハ最モ肝要。

初學者は兎角●に劫に受けられるのを恐れて、之を省くからイカマ。之を打たずして單に●に粘ぐと、白は當分此儘にして投つて置く。デ今度黒が●にハネれば白は無●に劫に受ける。縦しんば黒が此劫に勝つとしても、其の打抜いた迹を見れば、●に掛粘いだ手が、一手打つて一目損をして居る形になつて居るから、逆も割に合はぬ。故に圖の如く●に掛粘がぬ前に●とハネ而して白が●に粘がずして●に劫に受ければ黒●に取り續いて●に打抜いても宜し、又劫に負けても外に必要な處を二手打てるから、劫は少しも恐るゝに足らぬ。

▲第一黒●、●大ニ好シ。

一方には白●に伸び出す味が幾らか残つて居るから、夫れを消す意味に於ても、亦中央に模様を作る意味に於ても非常に好い手である。

▲第一白●、●得ズ。

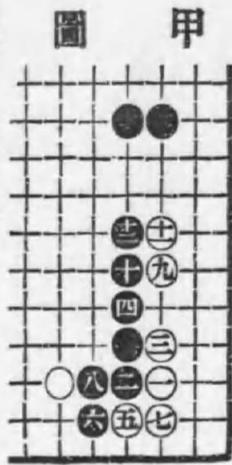
外に手掛りがないから漫然と此邊に一着試みる外ない。此手で●に押せば黒●にハネ●ならば●に伸びるか、或は●にハネるか、孰れにしても中央に模様を作られるから●に押す譯には行かぬ。黒●にては●の邊に受けて居つても仔細はないか、併し●の方面が碁明になつて居るから、餘り圍ふ必要もない。▲黒●ハ手筋。之を打つて置く今度は●にツケて白を兩断すると云ふ含みがある。

▲第一白●、●得ズ。

白若し此手で●に飛ばんか、夫れこそ周圍の堅壘を利用して●にノゾいて切られて了ふから堪らない。

▲第一黒●ノ含み。

黒が穩に●と引いたのは白に眼を作らせまいと云ふ作戦である。之を僅かの利害で、カに約へると白から●にツケられて眼形を作られ、随つて先手を取られる虞れがあるから圖の如く●と引くが宜いのである。



▲第一黒●ノ變化。

●にては色々打方がある。●にツケて打つ趣向もあるが、併し圖の如く●以下●と堅めて行けば外に打場のない碁だから勝が確定する譯である。白若し●の手で●に約へる結果は即ち乙圖の如く●以下の黒一團は取れるけれども其代り黒に其死石を利用されて×印にツケて右邊の二目を取れるから得、失を償はず●と約へざるを得ぬのである。●までの結果五十目位の勝は確かである。

八子第七局

▲第一黒●ニ就テ。

圖の如く打つたからとて、敢て悪いと云ふことはないが、●に應ずる方が、釣合も好し、又打ち易くもある。▲黒●ハ稍打過ぎ。八目の碁としては●に縮つて居るが普通である。或は●に飛んで居ても悪くない。

▲第一黒●悪シ。

●は單に●にハネ、白●、黒●と押すが宜いのである。詰り●、白●と交換したから自然に●と隅を占領される手掛りを生じたるのみならず、●、●とハネて絞られる趣向も亦之れが爲に喚び起したのである。

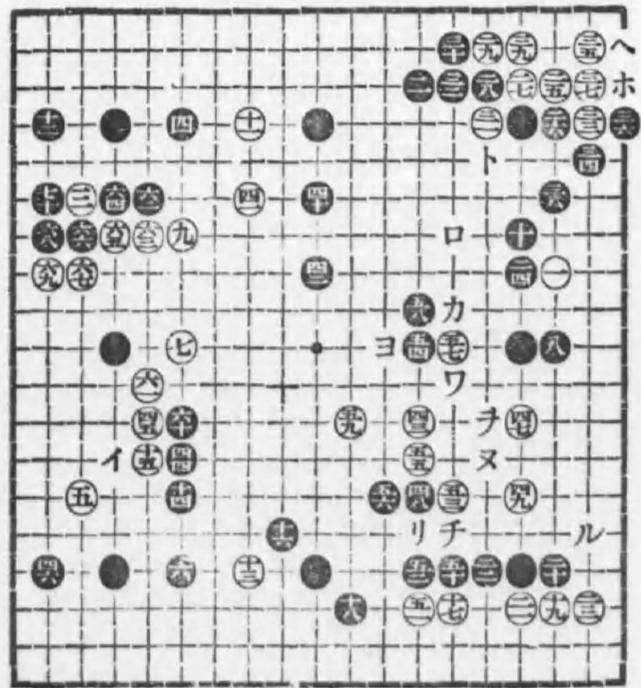
▲第一黒●ハ俗手。

此場合●に押し、白●ならば●に尖むが形である。ソコで白●に曲れば●に應じて宜しく、又●に押しした時白●にハネズして●に約ゆれば●に伸切つて充分の形勢である。▲●は軽く●に飛ぶが形である。

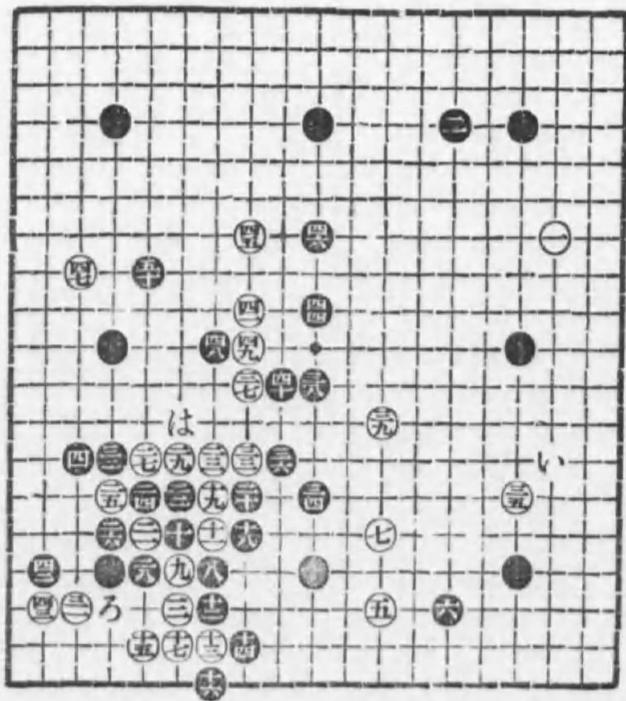
▲第一黒●如何。

味を消すから面白くない。單に●に遮断するが宜い。

八子局必勝之勢 手十七

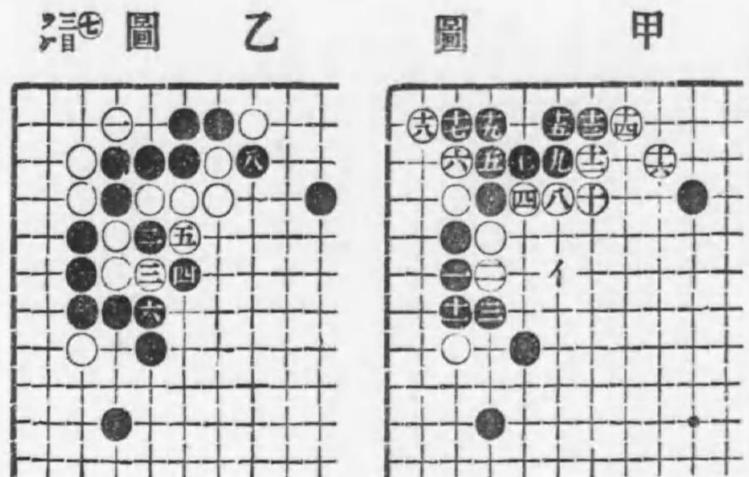


八子局 (第一圖) 手十五



▲第二黒④ニ就テ。

圖の如く下つても悪いことはないが、併し①に引いて居る方が簡單で打ち易い。其結果の一例を擧ぐれば則ち甲圖の如く隅の三目を取ることが出来る。其手順中白④は④に備へても宜いが、若し此手を抜いて⑤にハネルと乙圖の如く⑥と切つて絞られ、而して⑦と切られて白は如何とも凌ぐことが出来ない。



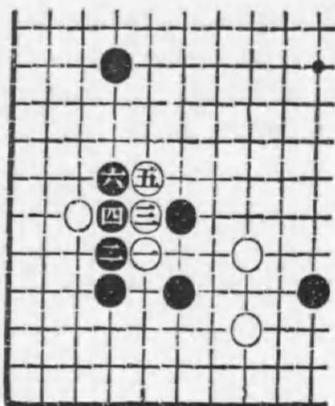
▲第二黒⑥手筋ニ似テ非也

此場合は單に⑥に突出す方が、白はダメ詰りになるから打ちにくい。▲黒⑥にては⑥にハネ出す杯、種々の手段があつて、白は之を活きるに苦む處であるが、併し八目の碁でもあり、且つ優勢であるから、圖の如く堅く打つて充分である。

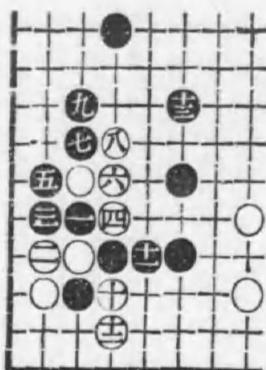
▲第二黒⑥大ニ宜シ。

九子第一局

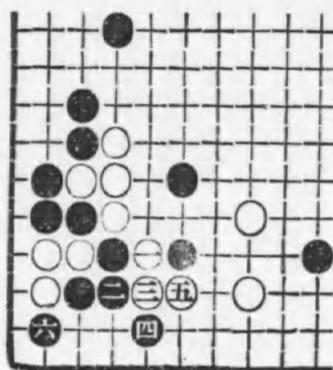
圖 甲



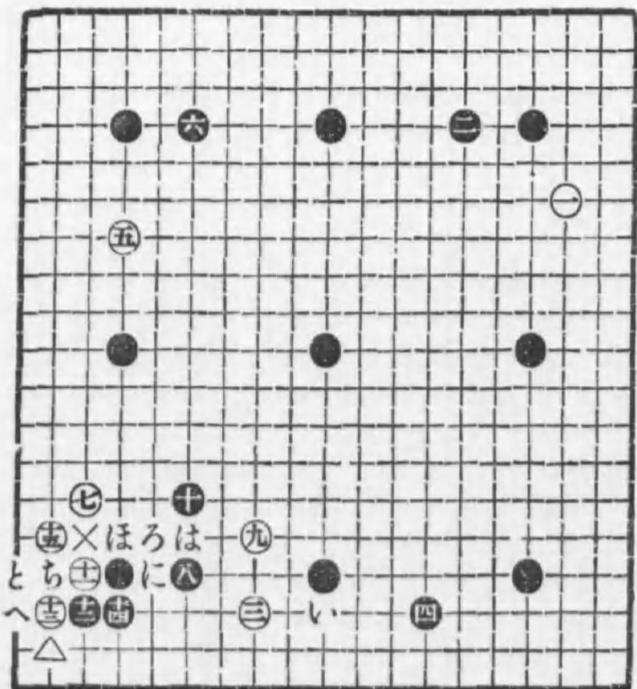
乙圖(其二)



乙圖(其二)



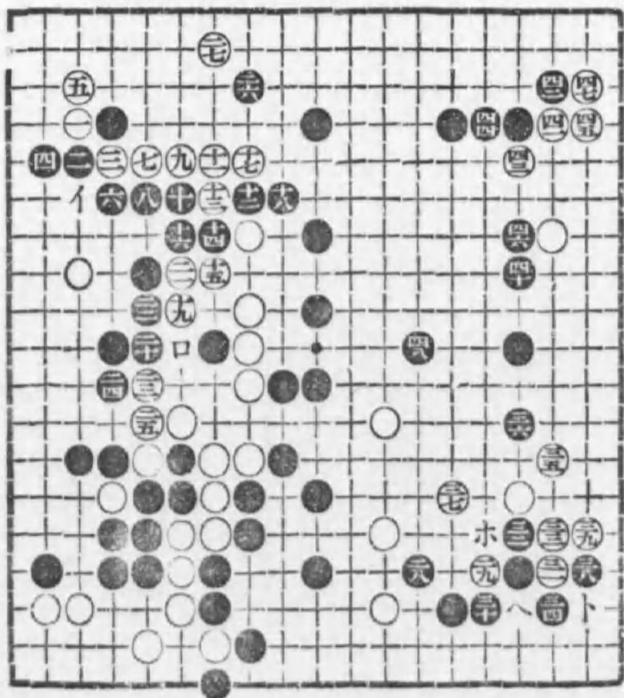
(圖一第) 勢之勝必



▲第一黒④ニ就テ。

黒④では④印の關門を閉づるも亦一策である。白③を穿める意味に於て……▲黒④ハ形ナリ。初學者は斯く打てば⑤に覗かれはせぬかと氣遣ふけれども若し然らば黒は⑥或は⑦に粘ぐ杯いふ消極的觀念を棄て、積極的に敵を隔つる方針を執つて⑥に突出すが宜い。其結果は甲圖の如く、其手順中白⑥の手で⑥に約へたらば黒⑥に切るべく、是又黒が宜い。

八子局 (圖二第) 手八十九



此手は敵に⑥にアテさせて⑦に粘ぎ而して⑧のハネを消さうと云ふ手段である。白は應手に苦んで⑨と飛んだのであるが、以下⑩まで順調に運ばれては白は最早や打つ處なく投げる外なかつたのである。



▲第一 黒△ノ變化。

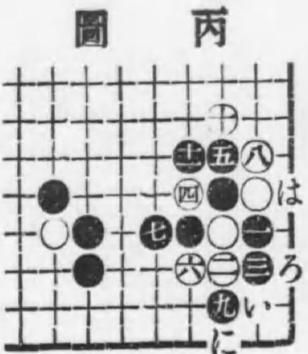
黒△、圖の如く堅く粘ぐは極く眞面目であるが、其他猶ほ二通りの打方がある。其一是厳しく×印にハネ込むのである。其結果は即ち乙圖に就て看よ。其手順中白△と切らずして△にハネ込む手もある。其結果は即ち乙圖(其二)の如く隅の三目を取ることが出来るから是又黒が宜い。其二は黒△に三段ハネする手段である。其時白△に掛粘れば黒△、白△、黒△と劫になるが、是れは紛れ易いから澤山置いて居ては左様な危道を踏むに及ばず、本圖の如く△と粘ぐか、或は乙圖の如く打つを可とするのである。

▲第二 白○ノ趣向。

白が○と打つたのは黒○、白○、黒○、白○と塗着けやうと云ふ注文である。其注文にハマらぬやう圖の如く反對の方から△と押すのが敵の策を挫く所以である。

▲第三 黒●ニ就テ。

黒●は圖の如くでも充分であるが、併し此手で△に伸びられると白は猶ほ一層困るのである。何故か云ふに白△ならば黒●、白△、黒●と切られるからである。實は此の方が厳しいのである。



▲第二 黒○大ニ好シ。

白○、△と打つた結果、此石は非常に丈夫になつた。従つ

▲第二 黒●堅實。

此場合此處は非常に好い處で、一遍に兩側を固めた手であるから、置碁としては極めて確かである。

▲第三 黒●ノ策戰。

黒●にては●にハネ出して打つ趣向もある。併し此の場合では●の方面が碁明で、此の崖邊一帶は即ち砂原であることと知らねばならぬ。故に白●に對しては之を取ると云ふ考へよりは砂原の方で活かして隅を守ると云ふ心持が肝要である。さう云ふ意味で●と下から約へたのであると了解しなくてはならぬ。

▲第三 黒●調子好シ。

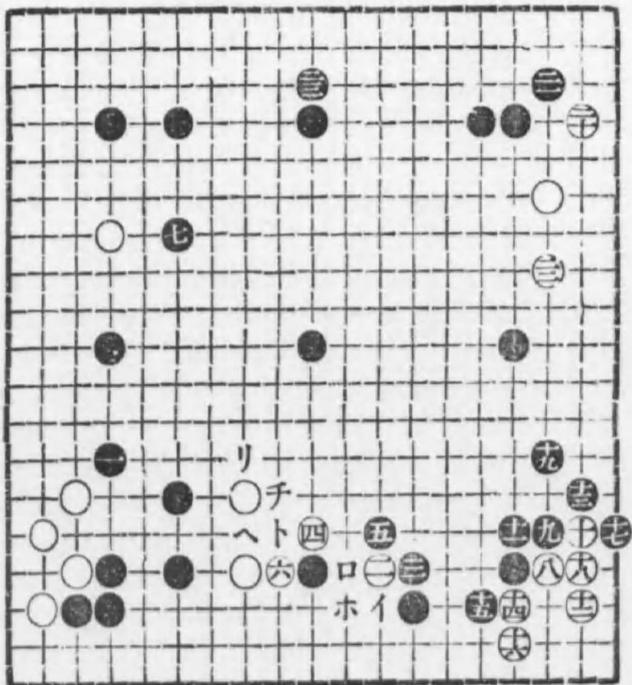
此場合黒が●と覗いたのは最も時宜に適した調子の好い手である。白若し●の手で●に切つて來たらば黒●にハネ白●、黒●と粘いで×印の突出しを狙ふが宜い。斯うなると白は●の一子は征の當りがあつて取れず、一方には×印に突出される疵があるから殆ど打ちように困る。ですから●は已むを得ない。

▲第三 黒●ハ實ハ悪手。

黒●とハネ、●と押して●と頭を突出させるのは普通の場合は悪手として戒むる所である。●の突出しは一着以て左右に當る手で、右方の置石が立枯れになつて了ふからである。併し此場合に於ては上邊から中原へ掛けて廣大無邊の原野が開かれ、而して右下隅の黒も亦●の掛粘に由つて非常に堅固になつて居るから、●、●と打つても宜いが、筋としては悪手であると了解して貰ひたい。

て左方の黒が弱いと云ふ程ではないが、多少薄くなつて來た此際●と攻めつゝ聲援を與ふるは最も時機を得た手である。

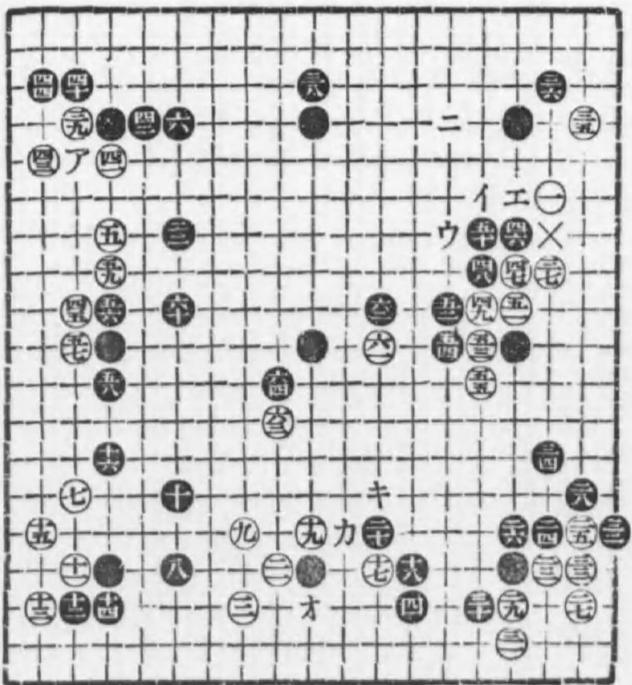
(圖二第) 勢之勝必



▲第二 黒●ノ變化。

黒●にては●に切る手もある。其結果の一例を舉ぐれば丙圖の如く隅の三目を取ることが出来る。其手順中白○の手で●にハネル手もある。左すれば黒○、白○、黒○、白○となつて活ではあるが上の方が堅くなるから此一局部だけでは白が損である。▲黒●は稍々緩いが併し九目の置碁としては確實である。

手四十六 (圖三第) 勢之勝必



▲第三 黒●好シ。

黒●にては實は●に下り白○が突當つた時に●に伸びて居るのが本手である。と云ふのは斯くして●以下の白一團を攻めつゝ自然に中央に地が出来るやうに打つのが玄人の要訣とする所である。圖の如きは所謂守勢一方の手で、只初学者に確な手を示したに過ぎぬ。併し黒●までの結果は非常に勝である。

●九子 局 必勝之勢

第二局

▲第一白⑦ニ就テ。

白⑦は⑥に打つが普通である。然らば黒は⑧の邊に打つて守る位で充分である。然るに白が圖の如く⑦と②間に廣く飛んで来た以上は、⑧と逃出すと云はんよりは置石の活動を始めなくてはならぬ。大きく取込まれては堪らぬからである。

▲第一黒⑨ノ變化。

黒⑨では⑩に尖みつける筋がある。夫れは白が⑪にハネたらば⑫にグヅム趣向で、斯時白は⑬、⑭孰れから押しても⑮、⑯孰れかに樂々と出られるから始末に困る。然るに黒が圖の如く⑩と伸びた趣意は、白が⑪に曲つた時⑫杯に曲ると夫れこそ最初⑬と伸びた手が愚形になつて了ふ。因つて⑭とツケて凌げると云ふ的があるから⑮と伸びた譯である。

▲第一白⑭ハ已ムヲ得ズ。

白若し⑭の手で⑮にハネンか、然らば黒⑯に伸ぶべく、白猶ほ⑰に押すとせば黒×印を截るべく、斯くては白は⑱の一目を棄てるか、或は之を助けんとすれば⑲にハネ出され⑳以下の白が危くなるから㉑の突當りは已むを得ない。

▲第二黒①稍緩。

此手で①に飛ぶは即ち攻守を兼ねた厚い手である。蓋し黒としては②の打込を恐れるであらうが、併し③に攻めて居れば、白は一寸④には打ちにくいから⑤の手は稍緩ではあるが、併し堅固な手である。

▲第二黒⑥ハ最良手。

詰り第一圖③以下の白一隊が未だ完全に眼形を備へて居らぬから、彼此れ聯絡を絶つ意味に於て⑥は最良の手なのである。

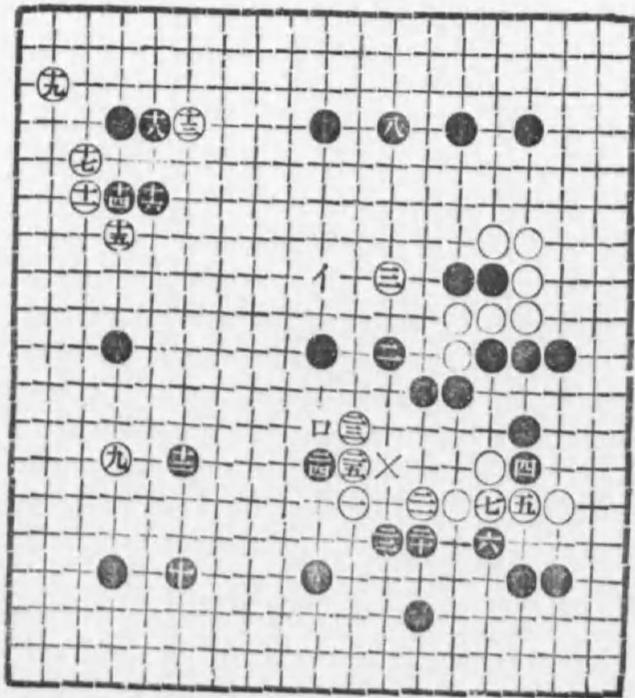
▲第二黒⑧、⑨ハ非常ニ堅實。

圖の如く打つは非常に手堅く殆ど間違ひない攻方である。實は此處で黙つて⑩邊に高壓的に迫る方が白が反つて困惑するのであるが、さうすると戦ひになる。戦争は黒の目的とすべきでない。戦はずして勝つを上策として、⑪と⑫堅實に守り且つ攻むるに若くはないのである。

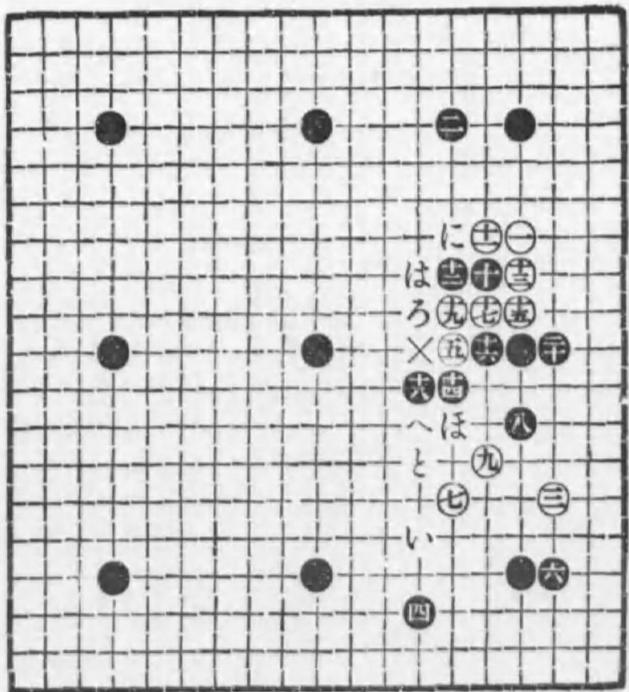
▲第二白⑭已ムヲ得ズ。

白⑭にては⑮に押したいのであるが、さうすると黒から×印に覗かれる筋があつて、第一圖③以下の一大隊が全滅して了ふから⑭と粘ぐ外ないのである。

(圖二第) 勢之勝必



(圖一第) 勢之勝必



▲第一黒⑨大ニ好シ。

黒⑨にては⑩に截り白×印に伸びた時黒⑪に押す手段もある。それでも打てぬ事はないが、斯くては⑫、⑬、⑭の三目が半身不随の恰好になるから面白くない。此處では只⑮に伸びる手が非常に氣の利いた手で、而して⑯と下がるが實に申分なき好形である。

▲第三 白の變化。

白若し(1)の手で(2)に飛出すとせば黒は(3)に並ぶが形である。要するに黒(4)以下(5)、(6)と悠揚迫らず完全に己れを守りつつ攻めたのは、所謂戦はずして勝つ方針を継続したものである。

▲第三 白の戦略。

白が(1)と押し(2)とツケタのは先づ黒の眼を奪ひつゝ己れの眼形を成す一方に(3)に尖みつけ黒(4)の時白(5)にハネ込んで劫にしよう云ふ戦略である。かゝる場合には黒は圖の如く(6)とアテ、此の二目を犠牲にして味よく、(7)と粘ぐに限る。併し(8)にては實は(9)に突張る方が幾らか働きがある。

▲第三 黒のハ形。

此場合捕虜となつて居る二目を逃出す如きは拙の拙なるもので、圖の如く(1)と呼出しを掛けるが形で、次いで(2)、(3)と固めた手順は甚だ宜い。

▲第三 白の就テ。

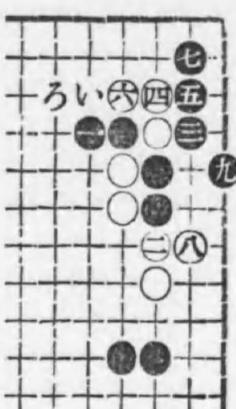
白(1)にて若しも(2)まで進んで来たならば、黒は無論(3)にハネ出し白(4)に截つた時黒(5)に下つて戦ふが宜い。是れは白が非常にマツイ。ぐづぐづして居ると第一圖(1)以下の一團が危いから、隅の方では自由に働けない。ですから(6)は已むを得ない。以下(7)までとなつては勝敗は殆ど問題にならぬ。

●九子 必勝之勢

第三局

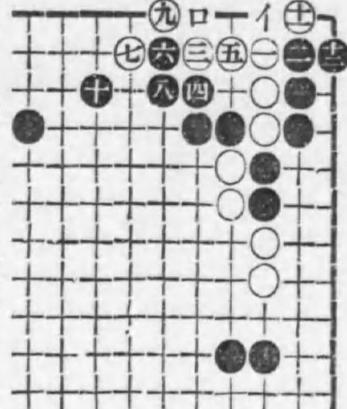
▲第一 黒の強硬。

(一其)圖甲



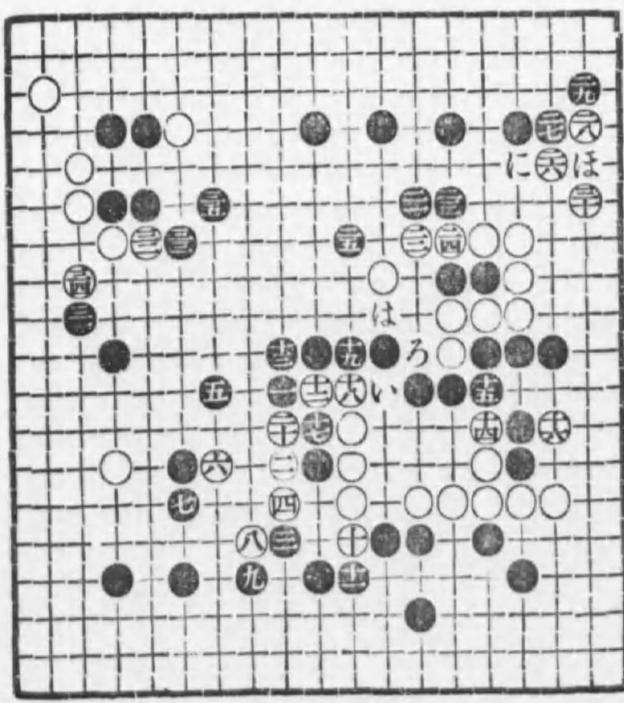
好い。さうして白(1)に曲つた時黒(2)に一目を打抜いて禍根を絶つに限る。左すれば(3)の白一子は殆ど立枯の姿になつて了ふ。故に白は(4)に下らずして(5)と添ふたのである。此處で黒(6)の手では(7)に伸びるが一番厳しいのである。其の結果の一例を挙げれば則ち甲圖(其一、其二)の如くなる。甲圖(其二)に於て白猶ほ(8)に押したらば黒(9)にハネルことを忘れてはならぬ。斯うなれば白は上下を一時に救ふことは出来ぬ。又甲圖(其二)の手順中最も肝要なるは黒(10)の手である。白若し(11)と粘がすして(12)杯に伸びたら、黒(13)にハネ込むが宜いのである。▲注

(二其)圖甲

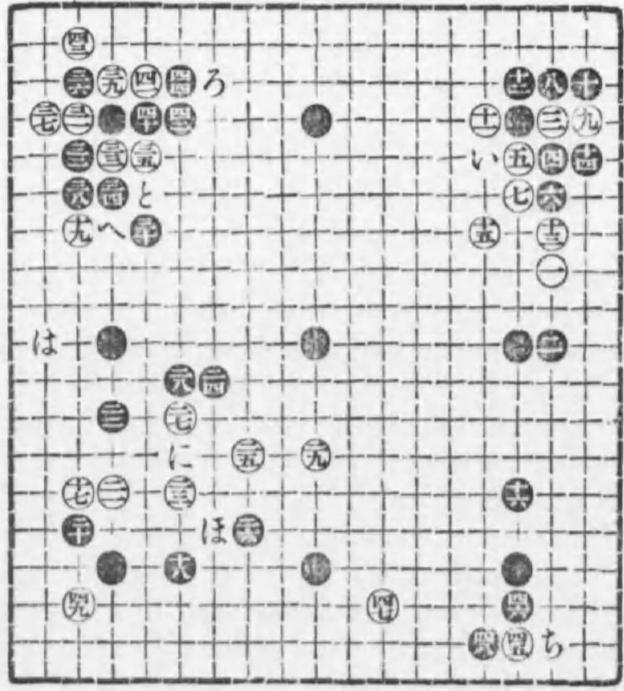


此處で白に旨い手がない。假に(1)に以下がるとすれば黒(2)に約へて居る手もあるが、夫れよりは(3)にハネて(4)の一目を征に取る方が置基としては極めて味がいい。

手十八 (圖三第) 勢之勝必

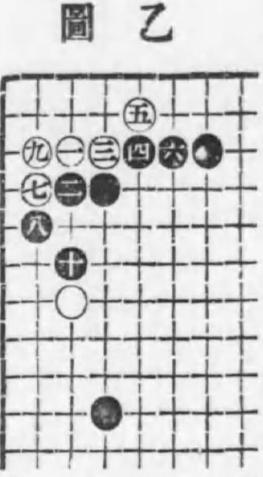


(圖一第) 勢之勝必



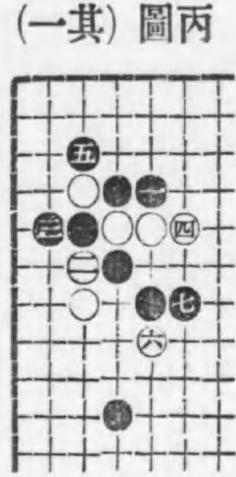
意。夫から白(1)の手で(2)印を粘れば黒(3)、又白(4)の方を粘げは黒(5)の方を打缺きさへすれば眼あり眼なしであるから此攻合は無論黒が宜い。併し本圖の如く(6)とハネても悪くない。其結果は白(7)までとなるが普通である。

▲第一黒●顧ミテ他ヲ曰フ。



白●と大桂馬に掛つた場合には黒は之をほうつて置くが一番宜いのである。若し此處を受けることすれば●に打つが宜い。左すれば白●には入りにくくなる。何故かと云ふに乙圖の如く●の居どころが非常に悪くなる結果を生ずるからである。

▲第一黒●ハ攻勢ヲ主トス。



黒●にては●に打つ趣向もある。然るに圖の如く打つたのは白●に大斜走して互る手を防ぐ意味もあり、かたがた厳しくイジメよう云ふのが主になつて居るのである。

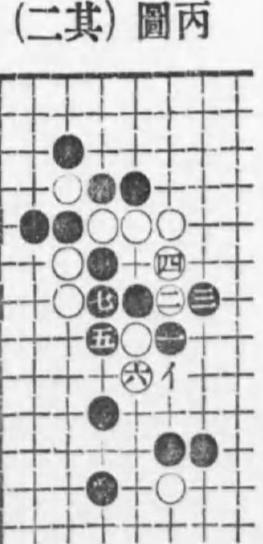
▲第一白●ノ變化。

白●にては●に桂馬する手もあるが、左すれば黒●に尖むが形である。此處で白は粘ぎように困る▲黒●ノ變化。黒●にては●の肩を衝き而して白●に押しした時黒●に伸びても悪くない。

▲第一白●ノ變化。

白●にて若しも●にでもツケて来れば黒●にハネ出し白●に截つた時黒●に約へ込むで宜し。是れは白が忽ろイカヌ

▲第一黒●ノ變化。



黒●にては單に●に押しして居る方が非常に嚴しいのである。其結果の一例を挙げれば則ち丙圖(其一及其二)の如くなる。就中

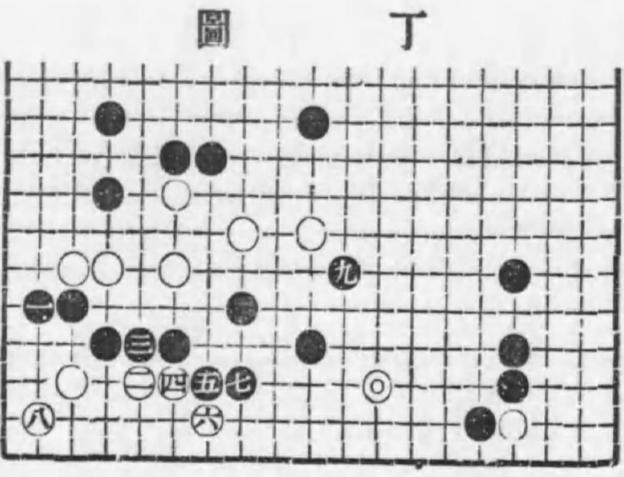
▲第一黒●宜シ。

其二の手順中黒●は普通の形としては●印に押すが本手である。けれども此場合では圖の如く粘いで戰つて悪くない。

▲第二黒●ノ變化。

黒●では●に下がるのが一番殿しいのである。其結果白が丁圖の如く隅で活きるとすれば黒は●と打つて圍中の●印(白●)一子か、上の白全部か、孰れかを捕ることが出来る。

▲第二白●ヒムヲ得ズ。

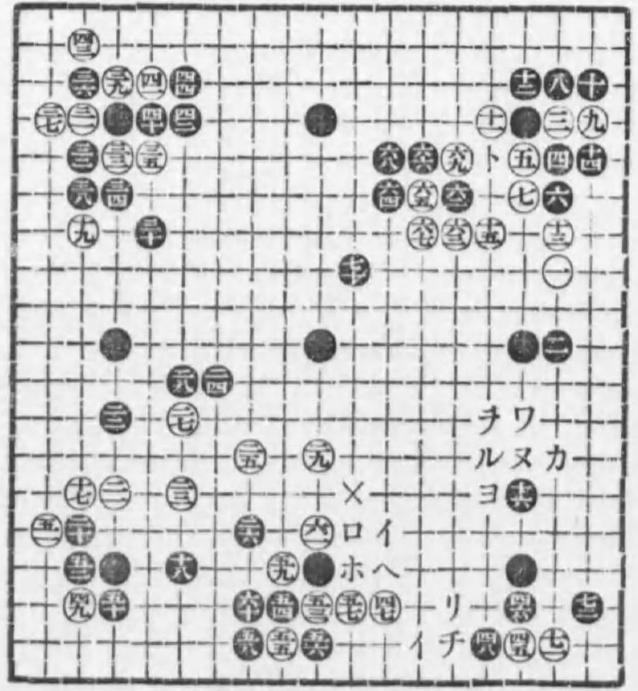


此手で若しも●に飛ばんか、黒から×印の挟間に飛び出されて後の打ちやうに困る。又●に掛けても黒●、白●、黒●と截られて、白は黒の周圍が堅いからドウする事も出来ない。故に此際白としては圖の如く●とツケル外ないのである。

▲第二黒●大ニ宜シ。

斯う云ふ風に打つて敵をイジメて居れば自然と●と打つ手順になつて大模様を作ることが出来る。▲白●にて單に●に伸びて来たらば黒は●坏に粘がないで●に打つが宜いのである。▲白●にて●の方に打てば黒●に截つて宜し▲注意。白若し●にツケて来たらば黒●にハ

(圖二第) 勢之勝必



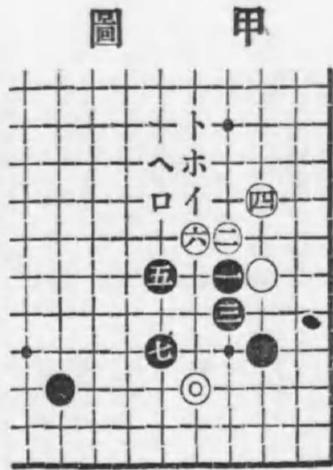
ネて互らして差支ない。夫から白●にツケて来たらば黒●にハネ白●ならば黒●に切り白●の時黒●に粘いで虜にすることが出来る。此處は如何とも仕様のない處である。要するに黒●までとなつては白は最早や策の施すべき所がない。



二子局

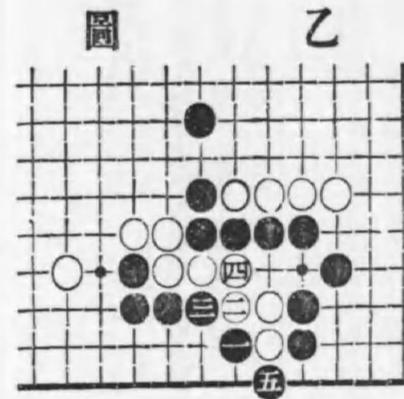
▲第一黒の變化。

黒は九にツケて甲圖の如く打つても宜い。圖中白は尤も肝要である。之を棄置くと黒六、白一、黒二、白三、黒四、白五と壓迫されると同時に外勢を張られ、従つて印の白一子は自然に立枯れになつて了ふ。



▲第一白は趣向

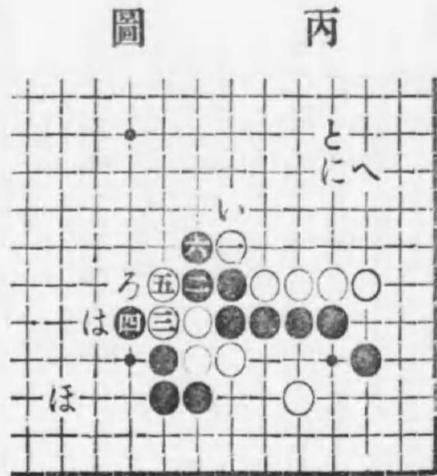
白は九にては或は八に打ちせぬか、若し然らば黒は九に曲るか、七に打つかであるが、ドウも七に曲る手は厚い手ではあるが、七邊に打たれる手段が残つてウササイから八に打つて居やうと思つた。所が七と押して來られた、是れ又豫期した手である。



ば黒も亦七に伸びるのである。

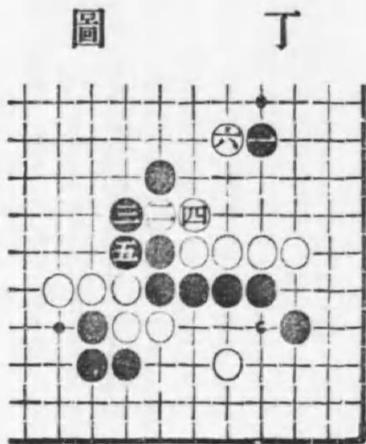
▲第二黒已むを得ず。

白から八と伸びられた以上は黒七と押さなくてはならぬ。若し之を怠つて單に七に打つと七の處に約へ込まれてダメヅマリになる結果、白一、黒二、白三と截られる疵を生ずるから、黒は其出切りを防ぐ爲めに七に補つて置かねばならぬと云ふ關係があるから此場合では圖の如く七と押してから七と打たなくてはならぬ。尙ほ茲で注意を加へて置きたいのは

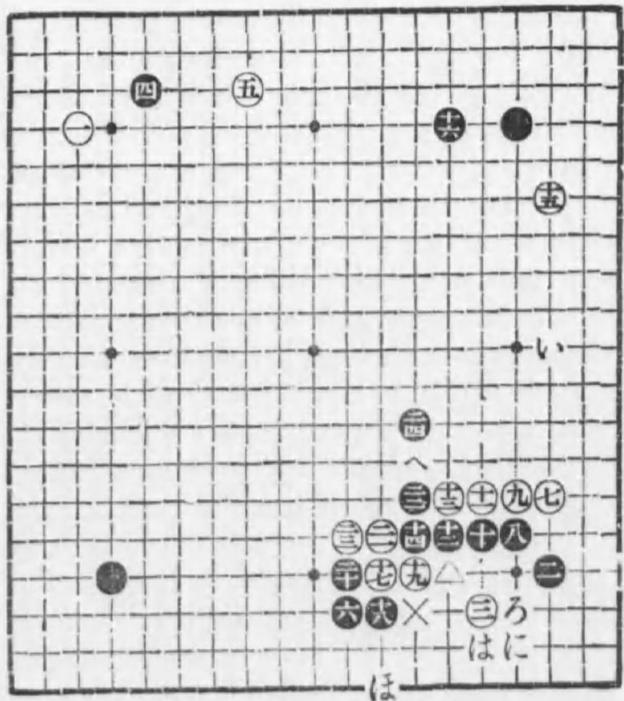


丙圖に於て説明した如く振替はる積りで黒七の手で八杯に打つと白は黒の注文通り八杯に打たずして丁圖の如く六とツケて逃げながら遮られて了ふ。即ち白が第二譜の如く七と伸び切つたのは×印にハ

丙圖に於て説明した如く振替はる積りで黒七の手で八杯に打つと白は黒の注文通り八杯に打たずして丁圖の如く六とツケて逃げながら遮られて了ふ。即ち白が第二譜の如く七と伸び切つたのは×印にハ



二子局 (第一譜) 勝之勢必

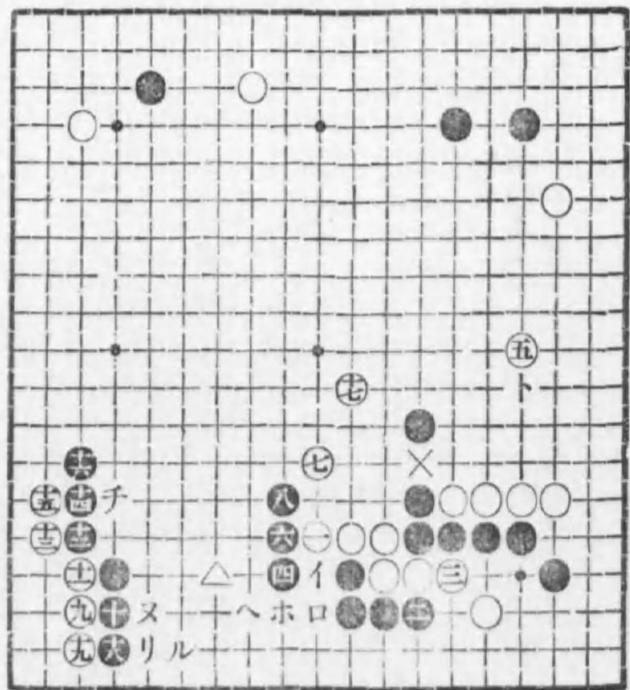


▲注意。黒の手でモウ一本×に押して△と交換するは甚だ宜しくない。と云ふのは此替はりがある。と右下隅は結局黒九、白一、黒二となるものと假定して白から印に走り込まれる損があるのみならず乙圖の如く黒七にツケて互る手をも失つて了ふからである。

▲第一白の變化。

白若し七の手で八にハネル結果は丙圖の如く、而して白七の手で八に伸びれば黒七に押すべく、又白七に伸びずして七に曲らんか、黒八、白九、黒十、白十一、黒十二となつて振替りになる。その手順中白七にハネズして七或は八に守れ

二子局 (第二譜) 勢之勝必



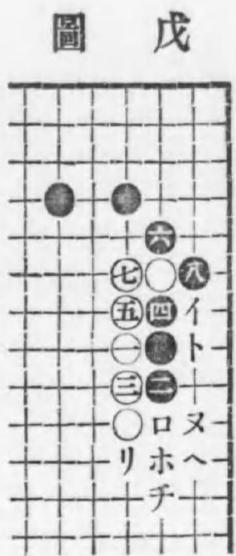
ネ込んで打たうと云ふ伏線であるから其手段に乗らぬやう用心せぬければならぬ。

▲第二黒の肝要。

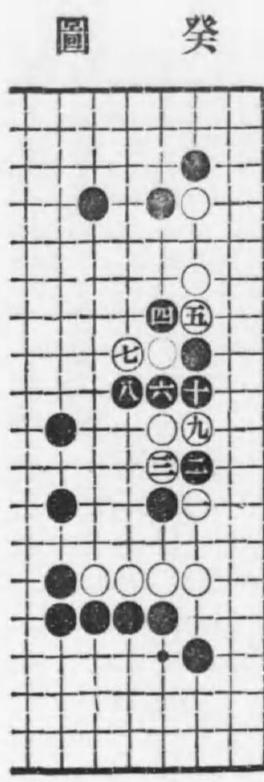
黒八にては七邊に打つ方が得のやうであるが、實は然らず、白から九の處へフクレられると白の石が非常に丈夫になる。其反比例に右方の黒が弱くなつて攻められる形勢になる。夫れ許りではない。左方に於ては△印に打込まれる恐れもある故に七と伸び切るはヌルイやうで堅實な手である。

▲第二白已むを得ず。

白おにては實は⑤にハネ、黒⑦、白⑧と粘いで居たいのである。左すれば機を見て⑧に截る味もあれば⑨にツケル味もあつて非常に大きい處であるけれども、左すれば黒から⑩邊に煽られて⑪以下の白が窮屈になるから圖の如く⑫と打たざるを得ぬのである。然る上は黒は何は掛置いて⑬と下りを利かすべく、茲で白が後手で⑭と約へるのはツライけれども仕方がない。シテ見ると此場合⑮の打込



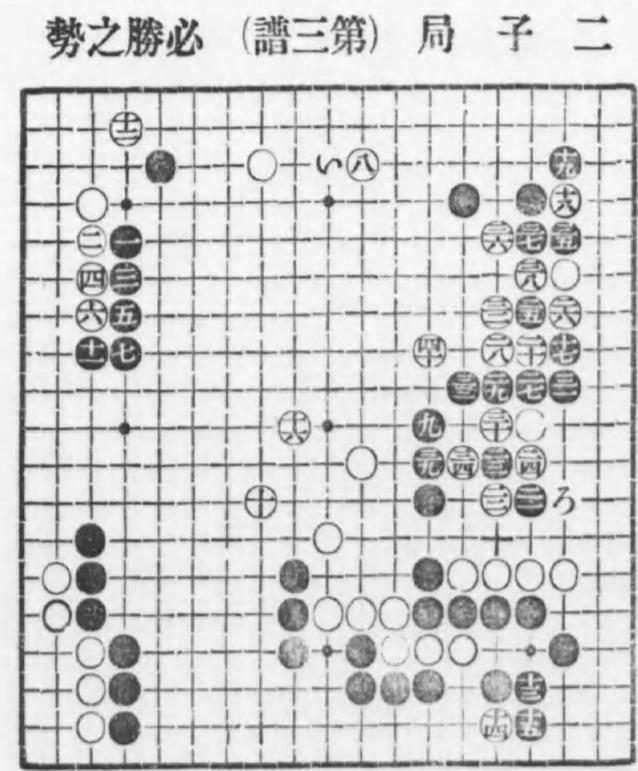
は或は無理かも知れない。  
▲第三 黒⑮の趣向。  
黒が⑮と掛けたのは白⑮、黒⑯の時白⑰の手で普通の如く⑱に飛んだらば黒⑲に詰めて攻めやうと云ふ趣向であつた。さうすると上の白一團も未だ眼形を備へて居らぬから大變窮屈になる。左ればこそ白は黒の作戦計畫の裏を掻いて⑳以下㉑まで先手を取つて㉒と打たれたであらう。是れ



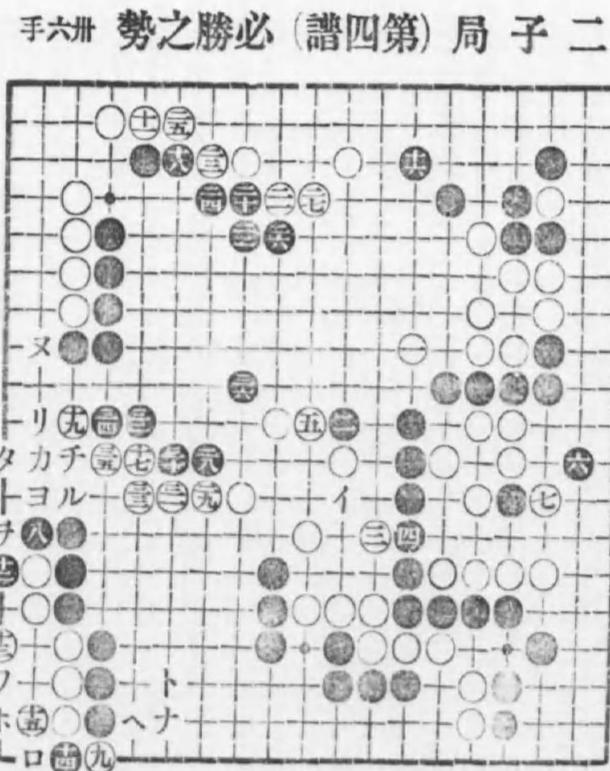
①、黒②、白③、黒④、白⑤、黒⑥、白⑦、黒⑧と打つて取ることが出来る。故に白⑧に出る手はない。ソコデ白は先づ⑨とツケ⑩と受けさせて⑪とツケたのである。然る上は戊圖の如く逃げる事が出来ぬから黒は⑫と打込んだのである。此打込に對しては白は圖の如く⑬にツケルか⑭にツケルか二途しかない。⑮にツケル結果は癸圖の如く、第三譜と殆ど同じやうな結果になる。  
▲第四 黒⑮の用心。  
黒⑮とツケ⑯と交換したのは無論損であるが、之を棄置くと白から⑰にハネ込まれて切られる味があるから、夫れを豫防する爲めで、ソコデ白が之を棄置けば⑱にツケて行く積りであつた。⑲にツケられては堪らないから白⑳と覗き⑳と粘がして㉑と突張つたであらう。白㉒、黒㉓の交換は白が損であるから此處は先づ五分々々の得失である。  
▲第四 白⑲肝要。  
白⑲のハネを怠ると黒から㉔へハネられて死んで了ふ。即ち白㉕の時白㉖、白㉗、黒㉘と置かれて活きがない。ソコデ白は先手を取る爲めに㉙とハネたのである。然るに黒が㉚と受けたのは緩手であつた。此場合では㉛の手で先づ㉜にハネて居る方が宜かつた。其時白が㉝にハネ出した所が㉞に掛けられて此方面で眼を作ること出来ぬから㉟に尖む外はない。ソコデ黒㊱に投り込めば白は矢張り㊲に曲る外はないから黒は先手で㊳のハネ石を屠ることが出来るのであつた。

▲第四 白⑲の威嚇。  
白⑲は㉔に打つが本手であるが夫れでは碁が足らぬから脅

又黒の豫期した所である。▲黒⑮の手で⑯印に詰めるも夫れこそ白から⑰にハネられて、⑱以下の黒が半身不隨になるからアベコベに攻められる形勢になる。故に⑳と伸びし居なくてはならぬ。▲黒㉑は自分の石を治める一方に白の眼を取つて居る手だから小さいやうで大きい手である。  
▲第三 黒㉒の趣向。  
黒㉒の打込に對して只㉓にツケルと黒は戊圖の如く互つて了ふ。其手順中白㉔の手で㉕に下れば黒㉖に切るべく、白



かしたであらう、けれども黒は先手を持つて居るから少しも恐るゝに足らぬ。況や㉗の一手は黒㉘の手で㉙に截れば取れて居るのである。其時白㉚に下らんか、黒㉛、白㉜、黒㉝に粘ぐ手が利いて居る。白は㉞に活きて居なければならぬ。ソコデ黒㉟、白㊱、黒㊲となつて取れるけれども夫よりか圖の如く㊳と打つ方が得だから㊴の一手を助けたのである。が結局中押勝になつた。



▲圍師、必關。窮寇勿し迫。  
(解) 敵を包圍するに當りては、必ず一方に活路を開くべく、又活路を失ひたる敵は、窮迫すべからず。何れも必死の力を出して味方を損下すべければなり。

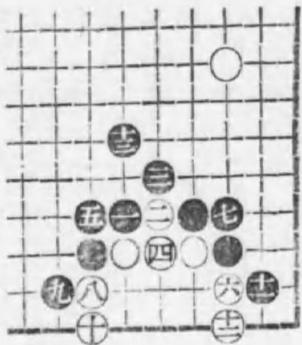
三子第一局

●白軍 策戰  
●霸道終不成

▲第一黒●の打點。

黒●の打場は此場合二箇所ある。一は圖の如く、二は●の處である。三目の碁としてはドチラへ打つても差支ない。▲黒●の變化。黒●の手で●に打つ趣向もある。左すれば左邊が急場になるから白は必ず●に打たなければならぬ。夫れを嫌つて黒は●と低く應じたのであるが、斯うなると左邊は黒白共に不急の場所となる。其反對に黒から●の夾みを狙はれるから白は●の急場へ開くのが普通である。けれども白が常套を脱して●と打つたのは黒若し高く●に應ずれば白は幸便に●或は●印に開きを兼ねて掛らうと云ふ趣向である。因つて黒は敵の作戦の裏を掻いて●と低く打つたのは適宜の手段である。▲白●以下は黒を紛らさうと云ふ趣向である、善悪は分らぬが。

▲甲 圖



▲黒●は無事を主とすれば●に引くのであるが、併し圖の如く打つても宜い。▲黒●にては●にハネルも亦定石である。其結果は甲圖の如く、キマリが付くから寧ろ此の

▲第一黒●の變化。

黒●は嚴しく●に曲げつけ、白●に一子を取つた時、黒●にアテ●變化もあるが、左すれば白は待つて居たと云ふぬ許り、轉じて●にハネて劫争を企つるは必然で、局面が非常に紛亂するから、穩かに●と突抜、轉じて●と約へ付けたのである。▲黒●はユルミ也。モウ一路●に詰めるか、左なくば●に取切つて居る方が確かである。

▲第一黒●ヌルシ。

●に曲るに若かず。

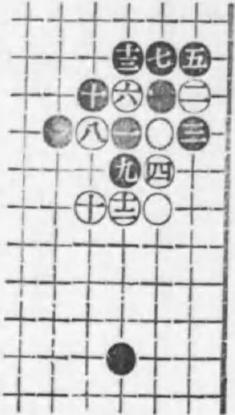
▲第一黒●は漠然。

黒●、餘り漠として取止めがない。●に打つ方が確實である。

▲第二黒●如何。

黒●は寧ろ●に約ふる方が宜かつた。其時白若し●ならば

▲乙 圖

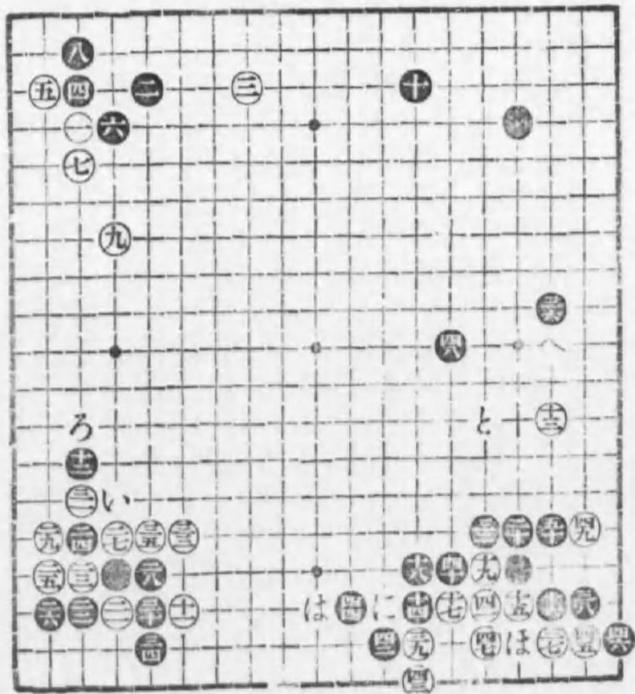


黒は乙圖の如く打つべく、此の方が分り易い。然るに●とハネた爲めに第一圖●の一子が孤立するやうになつたのは面白くない。▲白●は●に打つべき

▲第二白●の變化。

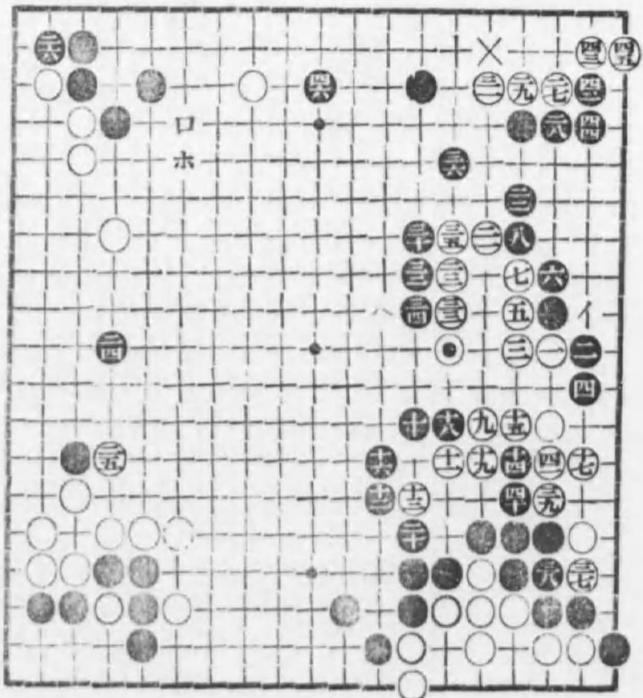
であらう。圖の如く尋常に●と守り●と打たれては一旦孤立した●印の黒が活躍して來た。斯うなつては黒の勝勢確實である。

(圖一第) 勢之勝必局子三



方が宜い。▲白●、●と切違へたのは機を見て●にハネ黒●に截らば●に約へて劫争を企つべく、又白●の時黒若し●杯にアママレば白●と活きやうと云ふ手段である。▲黒●は截られたら伸びろの誘通り●に伸びるのが普通定石である。圖の如く●とハネて●と内から約ふるのは玄人の打つ手で、素人には教へない。と云ふのは非常に複雑で紛れ易いからである。

手六十四(圖二第) 勢之勝必局子三



白●の手で●に約へたらば黒は●或は●に打ち然るべし。併し黒から右邊の鐵壁を利用して●に伸びて眼を取られるのを嫌つて圖の如くハネたであらう。

▲第二黒●の含み。

此場合黒が●と打つたのは働きである。此處が塞がれば黒は一轉、●に殺到して●、●の二子を屠ふことが出来る。其の伏兵として●と攻めつゝ、睨みを利かしたのであつた。▲黒●は●に斜走するに若かず以下●と打たれては何と



三子第二局

●第一 黒●に就て

黒●の手では●に打つ趣向もあり、又●に締る趣向もある。

●第一 黒●悪し。

●の白ある場合に●の如く●と打つは宜しくない。看よ直ちに●と打込まれて●と活きられた結果を。隅は白に占領せられ、大手には●の白ありて●と飛ばれる手順となり、搦手には●の白ありて行止りとなり、少しも開拓の餘地なき姿となるに非ずや。▲黒●は●に突當るのが普通である。▲黒●は●に打つのが本形である。

●第一 黒●時機に非ず。

黒●にては●に飛ぶとか●に備ふるとか、他の大場に就くべきである。然るに●と打つた爲めに●の粘ぎを餘儀なくされたのは愚手ではないか。▲黒●調子悪し。●にて先づ●に截り白●に出た時●と出るのが手順である。

●第一 白●時機尙早し。

此場合未だ小競合を爲すべき時機でない。●の手で●邊に掛つて緩くり打つべきであつた。

●第一 白●の變化。

●第二 黒●味悪し。

黒●の手にては先づ●に押し、白●に引いた時手を抜いて白模様を消すべく●に打つ方が宜い。ソコデ白が●に約え込んで来たならば黒●、白●、黒●、白●、黒●と粘いで活きるのである。▲白●無用。單に●に飛んで居る方が宜かつた。

●第二 白●は打過ぎなり。

黒●と押されて●と打たれては左右を攻められながら地を消されるから面白くない。●の手で×印邊に圍つて居る方が未だしも基が廣かつた。▲黒●手筋重し。黒●にて單に●に伸びて居るのが本手である。

●第二 黒●は趣向なり。

黒●、●は拵え手ではあるけれども併し之を打つて置かぬと黒が●以下●と打つた時分に白●の手で●の方を截る手がある。而して黒●、白●、黒●と粘いだ時に白●に押し居る手がある。故に黒は夫れを見越して●、●と拵え手を打つたのであらうが、併し其結果は餘り得もない。ナゼかと云ふに●の犠牲を拂つた上に●の切取りが後手になつたからである。

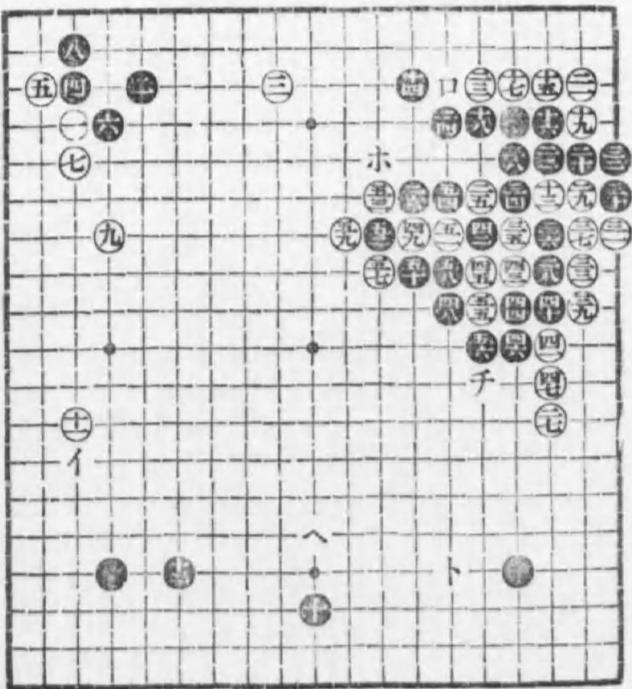
●第二 黒●、●の手段奇抜。

茲で●と突如として眼を奪ひ、而して●、●の棄石を打つて隅を固めた手際は働きであつた。

●第二 白●如何。

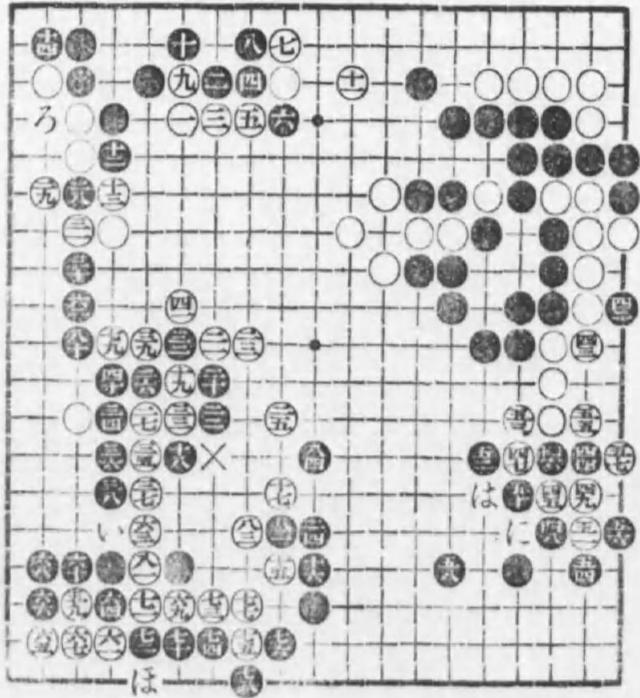
白●は●にハネ●に粘がして●に取つて居る方が少し宜い。▲黒●に●に押す方が味がよい。▲白●では●に飛んで活

三子局必勝之勢(第一圖) 十六手



白●の手で●に截る手もある。左すれば黒●、白●、黒●、白●、黒●に二目取り白●の伸びとなる。是れ又黒が宜い。

三子局必勝之勢(第二圖) 四十八手



きる方が得であつた。▲黒●は●に突當つて居る方が尙は宜い。其時白若し●に下らんか、黒●、白●、黒●、白●、黒●と伸びて拵にすることを得べく、又白●に下らずして●に押えたらば黒●に截り白●、黒●と泳いで矢張り隅の白を擒にすることが出来る。何れにしても事茲に至つては白に勝算はない。結局中押敗に終つたのは已むを得ない。

三子第三局

●第一 白○對黑●

白○は○に尖み黒●に開いた時他に趣向するのが普通であるけれども、置碁であるから圖の如く變化を試みたので、之に對し黒●の手で●に押し、白○は、黒●、白○、黒●とハネて打つも亦一策である。

●第一 黒●に就て。

黒●の手で●にアテ白○の時黒●に取る手と●に粘ぐ手と二通りあるが、併し圖の如く打つても差支ない。▲黒●は左下隅●に縮つても差支ないけれども、併し圖の如く打つ方が開きと●の白に對する挟みとを兼ねる丈け面白い。

●第一 黒●佳し。

白から●と掛られると黒●にて●或は●に應ずる者あるは往々見受ける處であるが、此方面は既に白○の備へがあつて行止まりになつて居るから直ちに●に打込まれて隅を侵されて了ふ。故に寧ろ手を抜いて圖の如く●と大場を占領する方が宜い。▲白○の變化。白○の手で●に斜走したれば黒●にハネて居るが普通である。▲黒●は大場である。此手で●に飛んで居ても差支ないが、圖の如く打つ方が上下兩隅の助けになるから都合が好い。

●第一 白○の趣向。

白○の手で●に打てば黒●に曲つて×印の缺陷を狙ふは必

●第二 黒●の變化。

白が○とツケて●と截つたのは黒を凝らせやうと云ふ趣向であるから●の手で●にハネ白○、黒●と泳ぐ手段もあるが、併し圖の如く打つ方が紛れがなくて宜い。

●第二 白○、●手順好し。

白若し○の手で先きに●に引かんか、左すれば黒は●にハネ出すか●にツケル外に好點はない。因つて白先づ●と突當つて●と突出させ、而して●と引いたのは所謂手順である。▲黒●の變化。黒●にて●に尖んで居るも亦た好い處である。

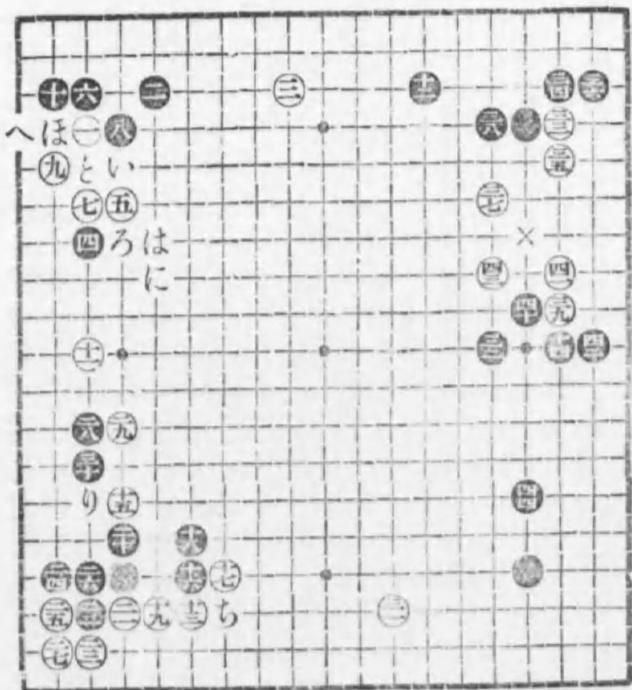
●第二 黒●大に善し。

白が●とツケて●とハネた時には何時でも●と堅く粘ぐが良手である。と云ふのは●の手で●にハネルと白○、黒●と後手で粘がなくてはならぬ。然るに●に粘いで居れば白が圖の如く堅く●と粘いだ時黒は(1)●に引ツ附ける手(2)●に約ふる手(3)●にハネル手と三通り選擇權を有つて居る丈け宜い譯である。夫れから白若し●の手で●に引いたらば其時●を黒●にハネルが宜い。白は●に粘ぐ外はない。之を手順を變へて言へば黒●、白○、黒●、白○と伸びた譯になるから悪い。

●第二 白○止むを得ず。

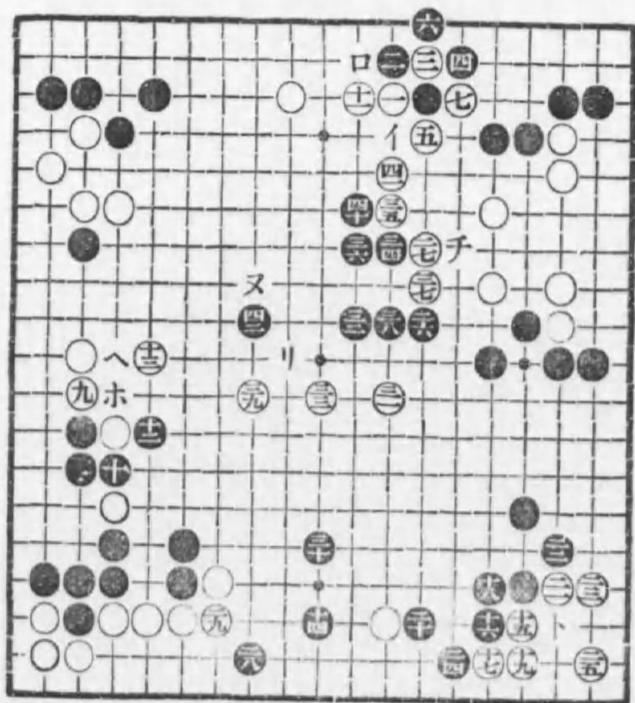
●の手では●に冠したいのであるが、左すれば黒から●にノヅカれてイジメられるから手を抜く譯に行かぬ。▲白○の打込は好い處である。黒若し●の手を抜くと●にツケて模様を張、うと云ふ趣向である。故に黒は●と飛出し●、

三子局必勝之勢(第一圖) 手四十四



然で白は其の應手に困るからソコで●とツケて黒●、●と應接する調子に●と形を整へやうと云ふ趣向である。布石としては是れで殆ど一段落である。

三子局必勝之勢(第二圖) 手二十四



●と打つたのは堅實である。▲白○の變化。白若し●の手で●に尖んだらば黒は●に打つて居るが宜い。●、●、是れでセリ合ひも亦一段落であるが、必勝疑ひなき形勢である。

三子第四局

●第一 黒四の變化。

黒四は④に夾み白②、黒③と打つのが極く普通であるが、三目の碁であるから圖の如く早く此隅のキマリを付けるも亦一策である。▲黒は單に⑤に夾んでも宜い。

●第一 黒⑥稍ヌルシ。

黒⑥の掛ける此場合、⑥にて⑦へツケ白⑧、黒⑨と懐ろを廣くする方が⑥の傍石を働かす所以である。⑥と⑦積りならば最初⑥の石は打たぬでも宜い位である。

●第一 黒⑩の變化。

黒⑩にて⑪に約へ、白⑫へハネた時黒⑬にグズムか、又は⑭へハネ出し白⑮、黒⑯、白⑰、黒⑱と互つて打つても宜いが、併し圖の如く⑲と下るは強硬な打方である。▲黒⑲の變化。⑲の手で⑳に煽り白㉑に飛んだ拍子に㉒に押す手段もある。

●第一 黒⑳好し。

⑳にて㉑に伸びるは俗手である。白若し㉒の手で㉓に截らば黒㉔、白㉕が時黒㉖に截つて絞ることを忘れてはならぬソコデ白若し㉗に出づれば黒㉘、白㉙、黒㉚と絞るのである。故に此場合白㉑に截る手はない。

●第一 黒㉛以下宜し。

㉛とツケ白㉜の時㉝に引くは俗手で強硬に㉞にハネ白

●第二 黒㉟ヌルシ。

中央の黒一縦隊は①に劫を取る手もあり、イザ危急と云ふ場合には②に互る手もあるから強硬に③へハネて戦つても決して危い事はない。其時白若し④に截らば黒⑤へ伸ぶべく、白又、⑥に截らば黒⑦、白⑧、黒⑨と伸びて戦ふべきである。ソコデ白⑩に約ふれば黒⑪に劫を取る手順になる。此劫争は黒の方には非常に劫材が多いからちツとも心配することはない。だから白⑫に截る手はないが併し⑬に押す意味はある。然らば黒⑭に劫を取つて差支ない。故に⑮の手で強く⑯にハネルが宜いと云ふのである。但し三目の碁であるから⑰、⑱と打つて聯絡を保ちつゝ⑲の出截りを防いでも悪くはない。

●第二 ㉑以下⑳までは常用の形。

黒㉑の手で⑳へハネると白㉒に截るべく、其時黒㉓にハネれば白㉔に伸びる手順になるから本圖と同じ結果になる。又黒㉕にハネズして㉖へハネル結果は甲圖の如く振替りになる。白は上の二目を取られるけれども先手であるから悪い事はない。

●第二 黒㉗の變化。

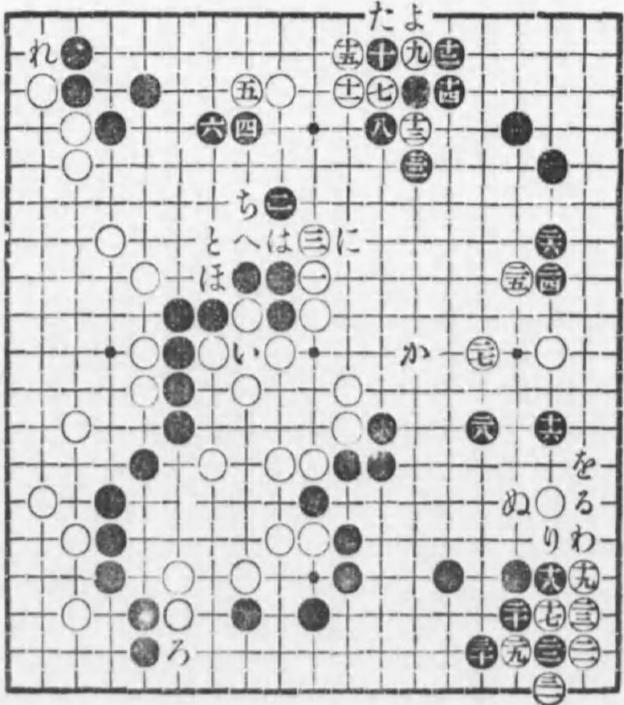
黒㉗の手で㉘へ尖みつけ白㉙、黒㉚白㉛、黒㉜と粘ぐ場合もあるが、此形勢では圖の如く打込む方が宜い。

●第二 黒㉞の含み。

黒㉞と一目を抱へたのは相當の含みがある。白若し㉟に聯絡すれば黒㊱に一目を打抜くべく、又白㊲に一目を取れば

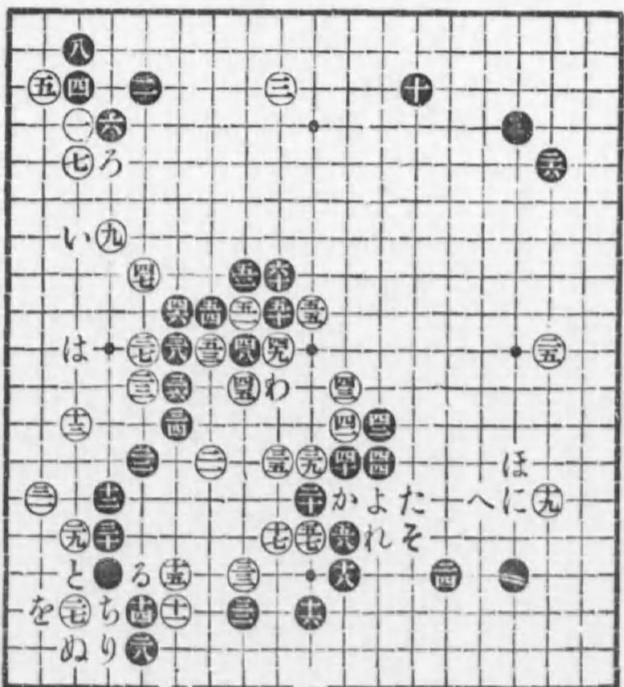


圖二第(局子三)勢之勝必



黒㉞に聯絡を妨げて㉟の三子を攻めやうと云ふ含みである。要するに白は五十目見當なるに反し黒は六十目位ある。而已ならず前段に言ふた通りの次第で兎に角黒は先手を持つて居てイジメル材料が多いから、結局黒㊱へ曲る手順になるべく、随つて必勝の形勢である。

圖一第(局子三)勢之勝必



●。黒㉞とハネ返して㉟の二子を棄て、㊱とアタルは能く有る手筋だ。斯う云ふ手筋を覚えて居れば碁は強くなる。



# ● 實戰 戰 解剖

## 第一局其二

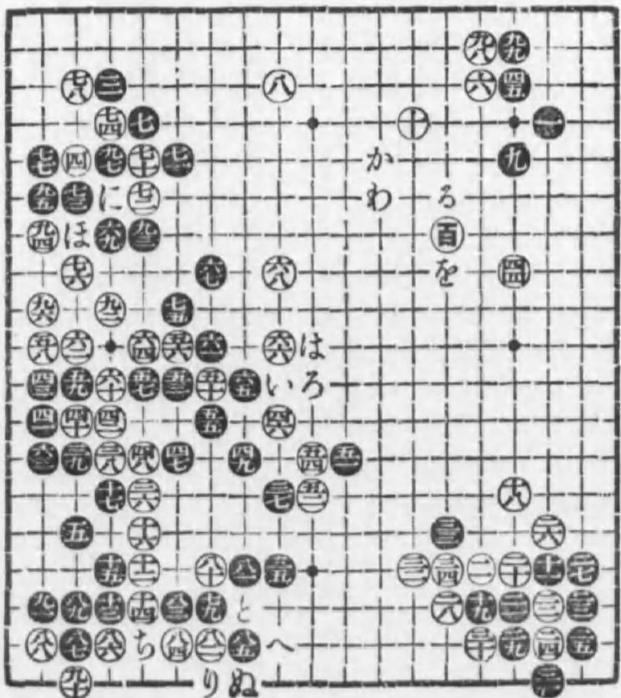
### ▲ 第一白 打場

黒⑤までは前頁に於て解剖済である。扱て白⑥の打場は非常にムヅカシイ。直ぐに⑧に冠すると、黒は多分平氣で⑩に打つであらう。モウ一手位打つた所が逆も⑩、⑪の二目を取ること出来ぬ。つまり「アマリ」形になつて地が無くなつて了ふ。故に白は先づ⑦と威嚇して⑧の尖付けを餘儀なくさせたのである。ソコで⑨と威嚇する外に打つ處はないのであつた。

### ▲ 第一黒 ハ 難點

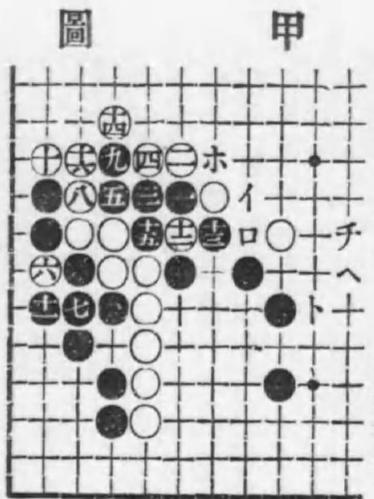
黒⑤も亦非常にムヅカシイ。此手で先きに⑥にツケルと、白から⑦にハネられて黒が⑧に伸びても⑨の切りがあるの外へ出ることが出来ず、即ち甲圖の如く塞がれて了ふ處である。然し甲圖の手順中黒⑤に伸びずして⑥に附越し、白⑦、黒⑧、白⑨の時黒⑩と打つ手段はある。が黒が是れ丈の犠牲を拂へば白は最早や⑪杯にツケズして、⑫にでもツケて模様を作る趣向に出て充分である。故に黒は夫れを慮つて⑬と飛出したであらう。此處では白は⑭、⑮と之を切離す趣向に出なければならぬ。

(圖一第) 剖 解 戰 實



### ▲ 第一白 ハ 手筋

此結果白⑥までとなつては⑦とツケた目的を充分に達した譯である。夫は黒⑧が悪いからである。⑨の手で⑩に切り白⑪、黒⑫、白⑬、黒⑭とハネて征に取つて居るが宜いのである。▲白⑥は非常にムヅカシイ。此手で⑦に守つて居るのが普通であるが、左すれば黒⑧、白⑨、黒⑩と切つて戦ふ手段に出るであらう。其結果がドウなるか分らぬ。故に



⑩と飛んだのであるが、斯時黒⑩は手筋としては無論⑪に掛ければならぬ。其結果は白⑪、黒⑫、白⑬と樂々と互られて了ふ。斯くては白⑭が非常に働く恰好になるから、臨機の處置として⑮と打たれたであらう。是れは此場合非常に手厳しい處で、白としては一番厭な處だ。けれども⑮とツケて凌ぐ手があるから善悪は分らぬが⑯と飛んだのであつた。

### ▲ 第一白 變化

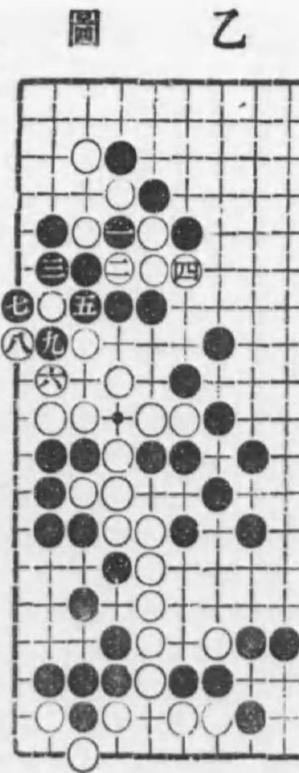
白⑥は餘程⑦に打ちたかつた。さうすると黒から⑧に打たれて完全に涉れないと思つたから見合はせたが、後で考へて見ると白⑨、黒⑩、白⑪、黒⑫、白⑬、黒⑭、白⑮と劫に受ける方が宜かつた。と云ふのは劫材は⑯に曲る手が幾らでも利くからである。

### ▲ 第一黒 ハ 臨機ノ 手段

圖の如く行止まりの處へ突當るは手筋としては随分ヒドイけれども、此場合白を攻めて⑮以下⑯と苦しい活をさせる手だから悪いとは謂はれぬ。

### ▲ 第一黒 已ム 得ズ

黒⑮に粘がすして⑯に打込みたい處である。左すれば乙圖



の如く劫にはなるが、白の方に劫材が多いから是れは黒が旨くない。本圖の如く⑮と粘ぐ外はない。因に黒⑯の手で⑰に約ゆれば三目は取れるけれども、左すれば⑱に切られて一目を取られて了ふから却て損である。要するに白⑮までの結果は黒が大分損をした。と云ふのは黒⑯の悪手に原因するのである。

### ▲ 第一黒 又ルシ

斯くては大勢に遅れて了ふ。⑰に飛出して行くが宜い。白は⑱に飛ぶ外ない。黒⑲或は⑳ドテラに打つても悪くない。

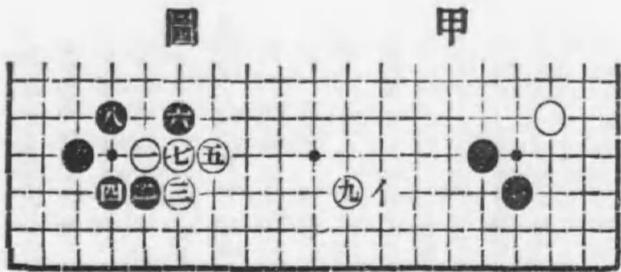


# ● 實戰戰解剖篇

## 第二局

### ▲ 第一白 趣向。

黒⑤までは所謂秀策流の石立である。白⑥、茲ではいろいろ趣向がある。第一は⑥にカ、ル手段で、黒が普通の如く⑦にケイマすれば白⑧に開く恰好になる。夫から白⑨へカ、ル手もある。其結果の一例を挙げれば則ち甲圖の如く、其手順中白⑨は④に開くも一策である。



### ▲ 第一黒 腹案。

黒②は白をして③に受けさせて、一轉して④に掛け白⑤、黒⑥、白⑦と低地に壓迫し、而して⑧の最要點に詰めやうと云ふ趣向である。左ればこそ白は其の裏を搔いて反對に⑨、⑩と攻める趣向に出たであらう。

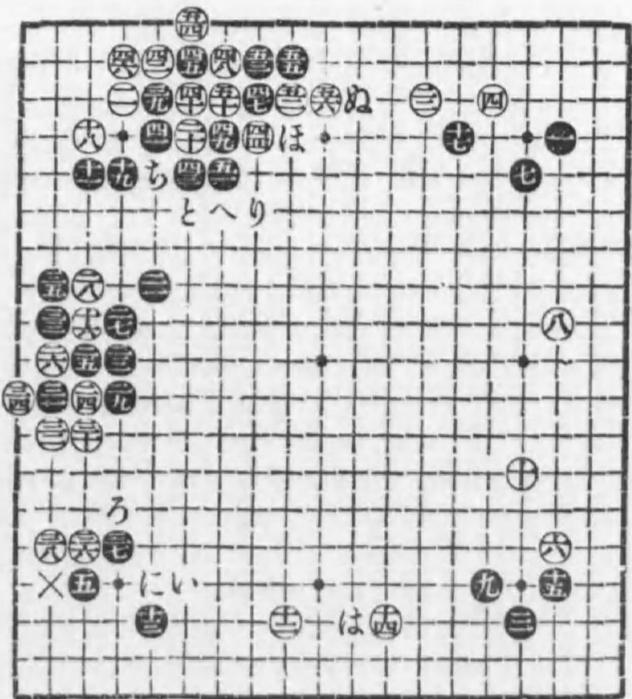
### ▲ 第一白 ハ新シキ試ミ。

白⑥は⑤に開くが普通である。或は場合に依つては⑥に尖むこともある。要するに白が此二途を擇ばずして圖の如く打つたのは蓋し新しき試みである。

### ▲ 第一白 二就テ。

白⑥では此際⑤に押すも亦一策で

## 解 剖 篇



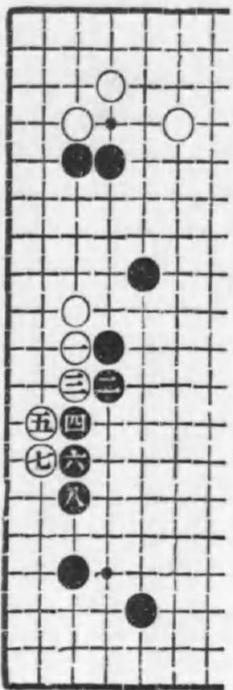
ある。其結果は即ち乙圖の如く中腹に黒の厚みが出るけれども、此厚みの勢力範圍の一角に既に⑤、⑥の敵兵が二間開きの堅陣を構へて屯營して居るから、黒は大して此厚みを利用することが出来ぬ基勢である。否な其の效力の幾分を殺がれて居る形勢になる。故に乙圖の如き趣向に打つても悪くないのである。▲黒②、③はマ、有る手筋。此結果黒④までは即ち手順で、先づ互角の振替りである。

### ▲ 第一白 如何。

手筋としては×印はハネたい處である。其結果は種々ある

けれども、其の一例を挙げれば則ち丙圖の如く振替る方が面白くはないか。其手順中白⑦の手で⑧に約へつけて居れば⑨、⑩の二目は取れるけれども、是れは面白くない。圖の如く⑦とハネ、⑨とノビて戦ひたい處である。要するに白①とハネル手段は場合に依つては中腹の五目を捨て、も宜いと云ふ氣分で打てば宜いのである。と云ふのは黒の側から言へば黒は既に第一圖⑤、⑥の二子を取込んで堅くなつて居る上に又必要もない五目を取る譯で、俗に所謂「取つた上に又取る」のだから詰らない。其處が即ち白の附目であらう。

## 乙 圖



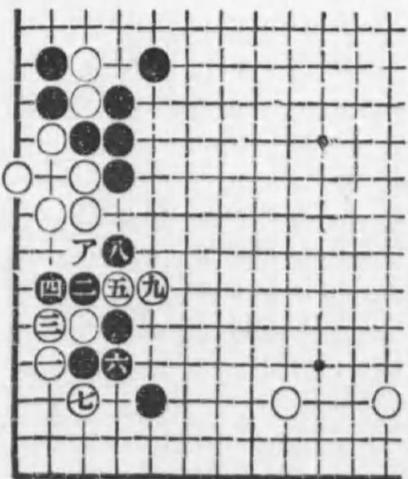
### ▲ 第一白 ハ味悪シ。

⑧に掛粘いで居れば無事である。▲白⑧にては⑨に粘ぐ趣向もある。其結果の一例を挙げれば則ち丁圖の如く黒⑩と二段ハネするが絶好の手筋である。此れには白は殆ど打ちようがない。ドウ變化しても黒が悪くない。⑨に粘ぐは俗手であるから⑩と取られたであらう。

### ▲ 第一黒 ノ變化。

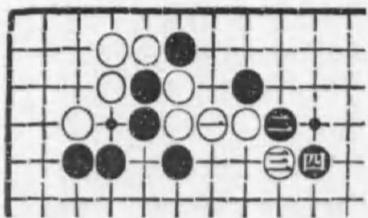
黒②とハネ込ますして③にハネル手段もある。其時白④にフクレなば黒⑤にハネルが白泣かせの手筋である。茲で白

## 丙 圖



が⑤に切り黒⑥、白⑦とハネルことが出来ないのが辛い。何故かと云ふに黒から⑧に突切られて切斷されて了ふからである。▲白⑧ノ變化。白⑧にハネすして⑨に伸びたらば是は必ず⑩に一着アテを利かし白⑨に取つた時⑩に打つ趣向に打つが宜い。必ずしも⑩の二子を逃出すに及ばず、只此捨石を利用して⑩の白を攻めるが賢い方針である。

## 丁 圖



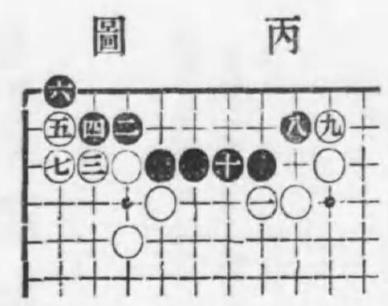
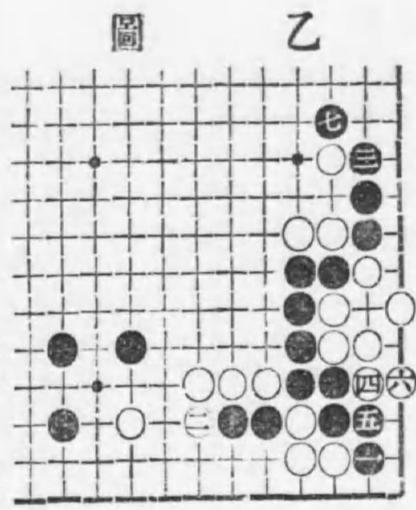






▲第二白④ニ就テ。

白④の時は⑤に開いて居るも軽くて好いとは思つたけれども圖の如く打つも亦一策と考へたのであつた。▲黒⑥ノ手段。黒⑥にては⑤にハネル手もある。其結果は即ち乙圖の如くなる。斯の如く黒⑥、白⑦と交換すると上の味が二分



又④と約へ込む手は非常に快心の手であるが、其代り⑤と突込まれて「ヨセ」劫になることは固より覺悟の前であつた。▲白⑤では④に一間飛んで居るも非常に好い處である。併しさうすると黒から⑥に詰めて來られて、④以下の白一團が未だ完全に活きて居らぬから、已むを得ず④に詰めて劫争をしなければならぬ。其處が白の辛い處だ。テ圖のやうに⑤に

▲第三白⑩ノ腹案。

白が⑩と突出したのは猶ほ此黒をイジメてさうして④と詰めて劫をしようと思ふ腹案である。夫故に打場所としては④の邊が非常に好い處であると思つたが、圖の如く⑤と突出したのであつた。

▲第三黒⑥ニ就テ。

黒⑥で⑤に取つて居れば極く穩かであるが、夫れでは少しも白に響かない。故に黒は先づ劫を片付けたであらう。

▲第三白⑤已ムヲ得ズ。

黒⑥の押しに對しては⑤と突出した當時であれば無論⑤にハネなければならぬ。何故かと云ふに其時分は未だ④の劫が残つて居るから、此處の劫立を利用して劫争をすることが出来る。故に黒としては白から⑤にハネられた時分に④印を切ることは頗る險存である。けれども今では⑥と味よく打抜いてあるから、④印に切るは必然で、斯くては白の不利であるから圖の如く⑤と飛んだのであつた。

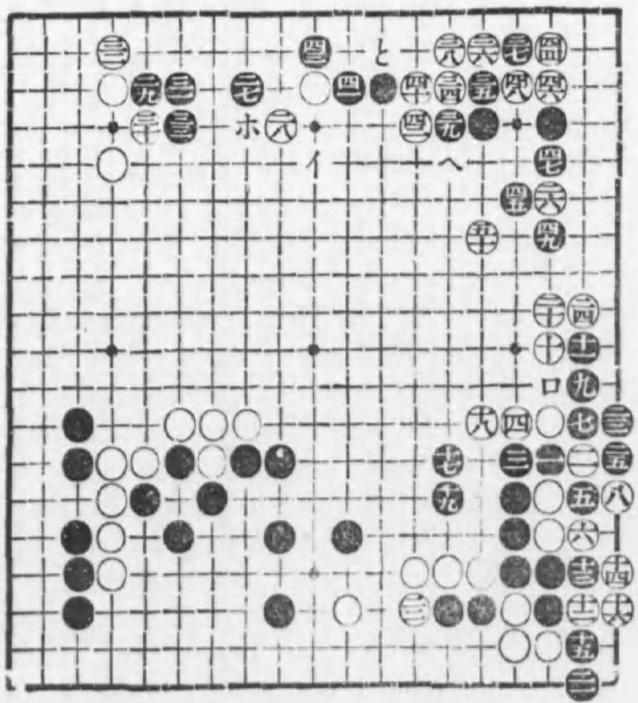
▲第三白⑧ハ已ムヲ得ズ。

此手で⑧に伸切つて居たいのである。此處は非常に好い處であるが、さうすると黒から④印に打たれる手筋があつて大方切られる。之れに閉口する。夫れで⑧と補つた譯であつた。

▲第三白②ニ就テ。

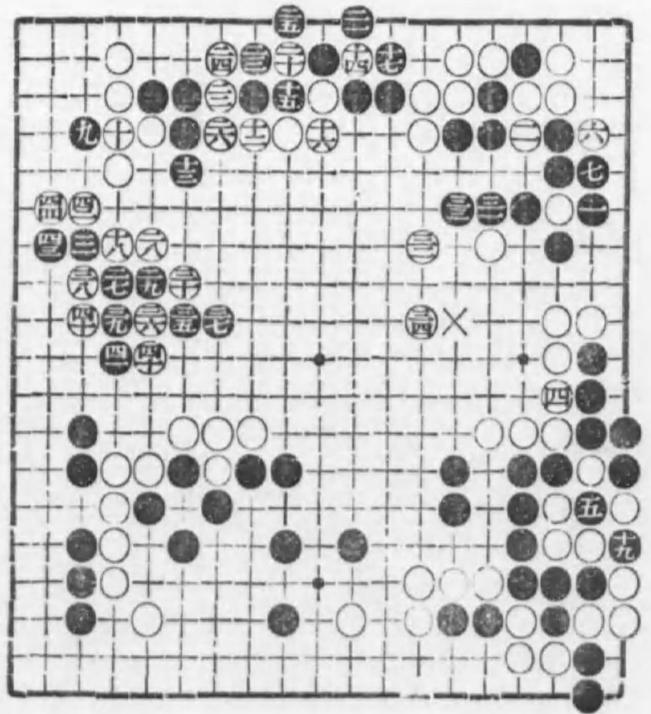
此手で②にハネて居れば無事であるが、其代り④のノビを打たれる。是れが白の辛い所である。夫れで切つたのであつた。切つた以上は④までの變化は當然の勢である。

(圖二第) 篇 剖 解



詰めて居るとモウ此白は安全であるから、何時でも白の都合の好い時分に劫争を仕掛けることが出来る。▲白②ノ變化。白②にては③に押し居る手もある。其結果は即ち丙圖の如くなる。然るに白が本圖の如く下つたのは詰り第一圖方面の厚みを利用して之を追出して攻立てやうと云ふ趣向であつた▲白⑤は次に④にツケやうと云ふ趣向である。或は⑤にハネズして⑥に押し手もある。左すれば黒⑥、白⑦、黒⑧の互りとなる。是れはさつぱり實利がないから詰らない▲黒⑩已ムヲ得ズ。此手で⑩に約へると④に互りながら左方の白二子が安全になる其反對に④の黒が非常に薄くなるから⑩は已むを得ない。

(圖三第) 篇 剖 解



▲第四 黒●及●ハ非常手段。

黒●と切て●と伸ばして此白を重くして置いて、さうして  
 ●と劫を粘いだのは所謂非常手段である。白も亦●の手で  
 △印にハネ黒●に一目を打抜いた時に×印に伸びて居れば  
 無事であるけれども其代り●に粘がれて中の白をイジメら  
 れる。ですから白も●と伸びなくてはならぬ。此處は白も  
 黒も必死に争はねばならぬ處である▲白●、●と出切るは  
 玄人の慣用手段である。以下白●までは非常に六かしく、  
 ドチラが宜いか、殆ど判断が付かない。

▲第四 黒●如何。

此處は●の方からノゾク味もあるから暫く見合はせて置い  
 て單に●に尖む方が宜いのである。ソコで白●に伸び出せ  
 ば黒●に飛ぶべく、又白●に尖んで来れば●にツケルが筋  
 である。斯う打たれると白は甚だ困るのであつた。

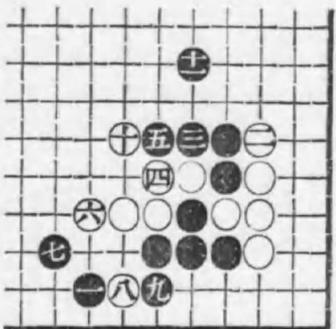
▲第四 黒ノ形勢非ナリ。

白●までとなつては黒が少し悪い。之を要するに黒●の手  
 で何とか工夫しなければならぬ。然るに●と切り●と白の  
 疵をイヤして了つた爲めに最早や手段を施すの術なく、遂  
 に黒が一目負けになつた碁であつた。

實戰解剖

第四局

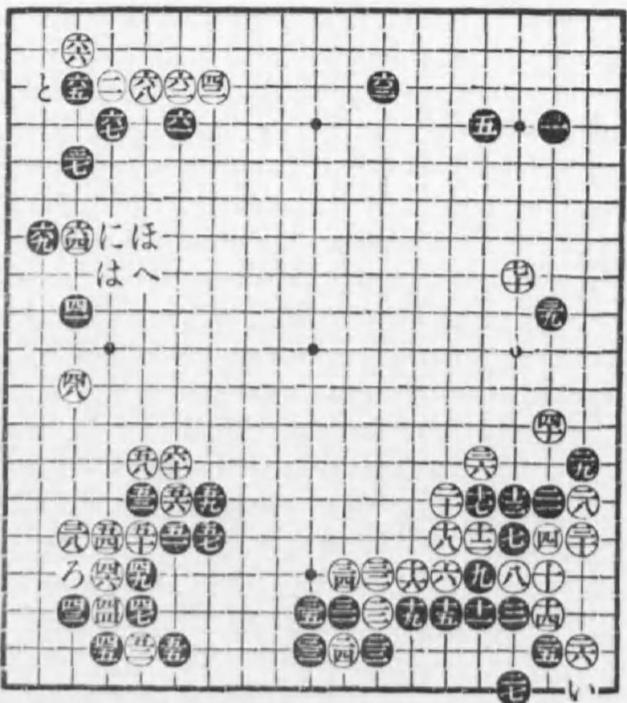
甲 圖



▲第一 黒●の變化。

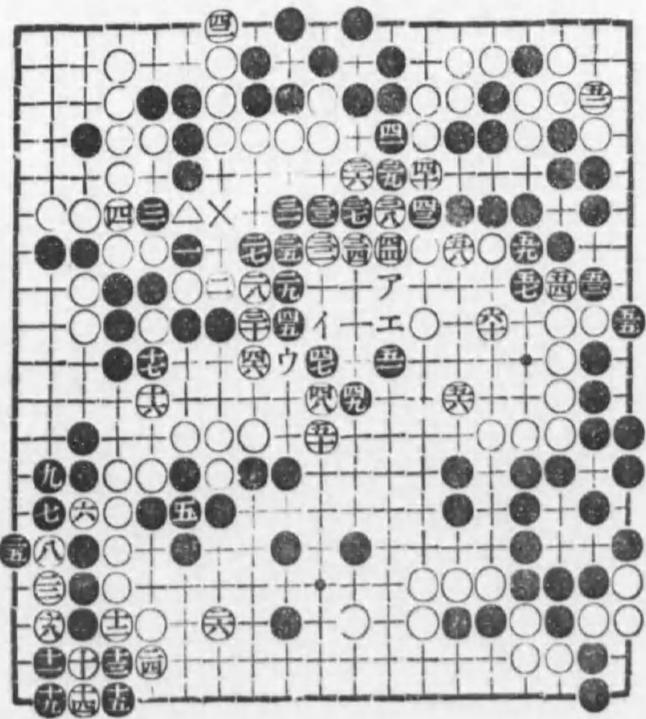
黒●の手で●に斜走する手もありま  
 す。其結果は甲圖の如くな  
 りますが、夫れよりは●と  
 曲るのが普通でもあり、又  
 打ち易くもあるから圖の如  
 く打つたです ▲黒●の  
 變化。黒●の手で●印へ  
 ハネた手が先輩の碁にあり  
 ますが、さうすると白から  
 ●へハネられて六かしい碁  
 ●へハネられて六かしい碁  
 になりすから、普通の如く●と  
 截つて●以下の四目を棄て  
 る方針を執りました。黒が●の  
 手で●印へハネルのは●以下  
 の四目を棄てまいと云ふ趣向で、  
 圖の如く單に●と截るのは  
 夫れを棄て、振替らうと云ふ趣  
 向です ▲黒●變化を試  
 む。●の手では明隅即ち左下隅  
 に打つのが普通としてあり  
 ますが、併し一方に●、●の  
 堅壘の出来て居る此際、明隅  
 に打つのは氣が利かぬと思ひま  
 したから●と掛つて見た ▲  
 黒●の變化。●、是れは●か●  
 に掛るのが普通でありま

第一圖(圖一第) 手十七



すが、右方の黒が堅いのには普通の如く打つのは面白くない  
 と思つた。假に黒が●に打つとすると或は●杯に飛ばれて凝ら  
 されて了ふかも知れない。故に深く●と侵入したです。白若  
 し●の手で●に伸びれば黒●、白●、黒●、白●、黒●と切  
 つて戦ふ積りであつた ▲黒●の安心。●と伸びた時、  
 善悪は分らないか、●に押して来られるのが大變恐ろしかつ  
 た。所が●と打たれたので早速●に曲ることが出来て大に安  
 心した ▲黒●は凌ぎ手。●と打放しにして●と拆いた  
 のは白から●に打込まれるキツがありすから幾らか其凌ぎ  
 になると思つて●と打つた ▲黒●の變化。●の手で●

解剖篇(圖四第) 打ノ所



に尖む手もありますが、さうすると白②、黒③、白④と截つて来られるかも知れない。或は白⑤に押さずして⑥にハネて居られても味が悪いから⑦とツケたです。

▲第二白⑧は豫想外。白⑧の手では多分⑨に詰められるだらうと豫想して居た。さうしたら黒⑩に突張つて白⑪に伸びた時黒⑫に飛んで、隅を手なしにして置く積りであつた。所が意外にも⑬と頂けられてから⑭と詰められたので、初めの計畫が丸で狂つて了つた。それで已むを得ず⑮と圍ふことになつた。白⑮は良い手でした、⑯と堅い方面に打たせられた譯ですから白⑰に儲けられた譯です(初心者の爲に、黒⑱の手を抜くと白⑲、黒⑳、白㉑、黒㉒、白㉓と云ふ結果になつて断たれて了ふ。夫れから黒㉔の手で㉕に伸びると白㉖の下りとなつて活きられて了ふ) ▲黒㉗打過ぎ。幾分か白地を減らす積りで打つたのですが是れは⑳に掛粘ぐのが普通であつた。實は減らしてから㉘に掛粘ぐ積りであつた ▲黒㉙の覺悟。㉚と截る以上は㉛以下㉜と活きられることは承知して居つた。活きられても一ノ筋を亘つて活きるのですから、大きい事は大きいと切の方が利益であると思つたです ▲白㉝は意外。此時は㉞以下の白を逃げるだらうと思つた。随分落付いた手です ▲黒㉟の考へ。此手で㊱に押し截つて了つても打てさうと思はれたけれどもさうすると㊲へ伸びられてドウ云ふ結果になるか、成算が立たなかつたから㊳とハネて無事を圖つたです ▲黒㊴の考案。白若し㊵の手 ㊶に截れば黒㊷に覗き、白㊸、黒㊹、白㊺に截り黒㊻に取り白㊼に中てた時黒㊽とハネル積りでありました。さうなつては白が悪いから㊾とフクレて三目を棄てられたと思ふ。モウ斯うなつては充分黒に残つて居ると思

# 實戰解剖

## 第五局

### ●第一白①の變化。

白①、此時私が考へて居たのは②に掛れば黒③に開くは普通で、ソコデ白④に打つ趣向もあるからであつた。併し夫れは既に試みたことがあるので、同じ形に出るのも如何と思つて⑤と高く掛つたのである。

### ●第一黒⑥は意外。

右上隅に於ける⑦の黒が低いから其の釣合上無論高く⑧に掛られることゝ思つて居た。所が⑨と低く掛つて來られたのは意外であつた。因つて私は⑩に掛け⑪に匍はして白⑫、黒⑬に飛んだ時⑭に詰めて行かうかとも考へた。併し是れは黒に先づ實利を占められるからドウカ知らんと思つて、それで⑮の處から手を著けたのである。

### ●第一白⑯の豫想。

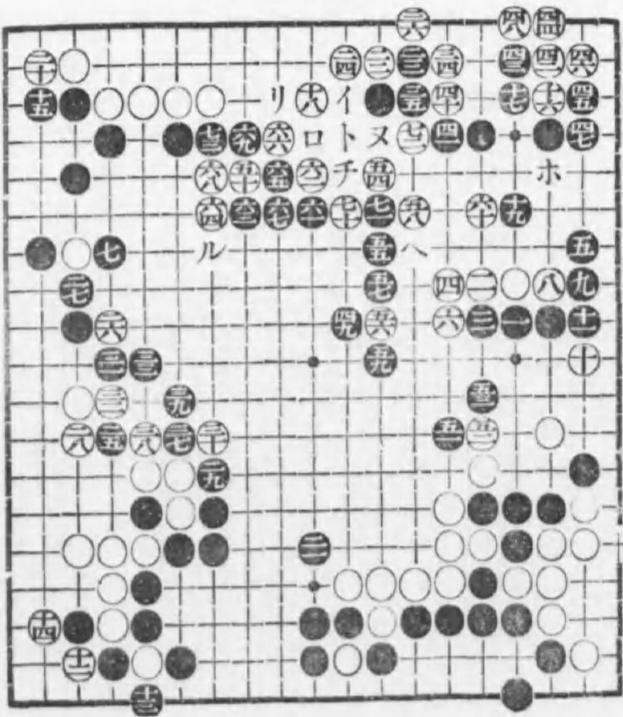
白⑯、是れは⑰とツケル時からの豫定の手であるが圖のやうに⑱と約へては呉れまい、多分⑲に曲つて來られるだらう。其の方がイヤだと思つて居た。所が⑳と受けて呉れたのは有がたかつた。

### ●第一白㉑の趣向。

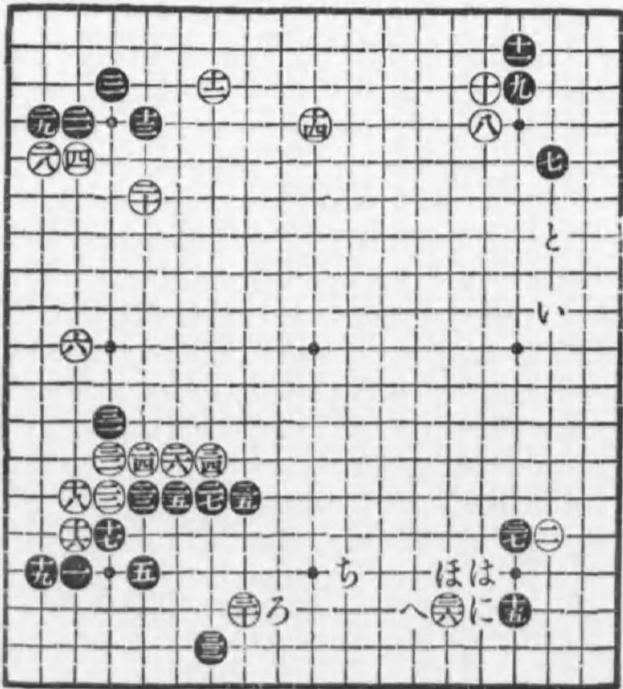
㉒と一間に詰めたのは黒㉓に尖んだ時白は㉔に圍つて居る趣向であつた。所が意外にも㉕とツケられた。是れは㉖に尖まれるよりは多少打ち易いと思つた。

ひました。結局十一目の勝になつたのであります。

手三十(圖二第)



(譜一第)



●第二白の思案。

白①の手で普通の如く③にハネル結果は黒②、白①、黒①となる。さうなると黒②の鼻が出て居るので、中腹の白二子が非常に手薄くなるから面白くない。夫れで圖の如く①と變化を試みたのであつた。

●第二白の苦心。

白①の打方がむづかしいので非常に考へた。此際①以下③⑤の白に手を著けるにも何とも打ちやうに困る。且つ第一圖黒②と第二圖黒④との間が廣いから黒に此處を打たれると大きな地が出るから夫れで④と飛んだのであつた。

●第二黒は意外。

黒②、ドウ打つか知らん、③に打つ位のものではないかと考へて居た。所が③と曲られたのは全く意外であつた。

●第二黒も亦意外。

黒から③とツケられたのは全く意想外であつた。其の結果④、⑤、⑥と二目を取られた上に先手を取られたから白は損をしたと思つた。所が委しく見ると④、⑤、⑥、⑦等黒の姿も随分ヒドクから悪くはないと思つた。併し斯うなると⑧の白が閑手になるから黒は之を遊ばせる意味で圖の如く打たれた事と思ふ。

●第二白は勝敗の分岐點。

白②、此處は非常にむづかしい。此邊が勝敗の分岐點になると思つた。中原方面が白地になれば勝てるけれども黒の方面には⑩の方面と出口が二途ある。白若し⑩の方を塞げば黒⑪、白⑫、黒⑬とハネて來られる。尙且つ⑭

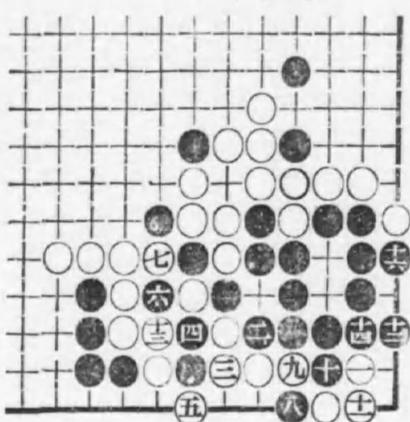
●第三白の劫立。

白③の劫立で④に劫を立てやうかとも思つた。それでも黒は⑤に打抜くであらう。其時白⑥に突んで居れば此黒は死で居る。併し⑦にアタルやうな意味があつて外部の味が悪いかからそれで⑧、⑨の方を擇んだのである。計算して見ると④に劫立をして此隅の黒を取つて居る方が少し得である。併し圖の如く⑩以下⑪と二目を取つて居ると中央の白が非常に丈夫になるから少し位の損益には替へられぬと思つた。

●第三白の思案。

白③、此時は非常に考へた。或は④邊に打つ方が宜くはないかと思つたけれども確に目算が立たぬから④と打つて下の白を棄て、中原を地にする方針を取つたのである。

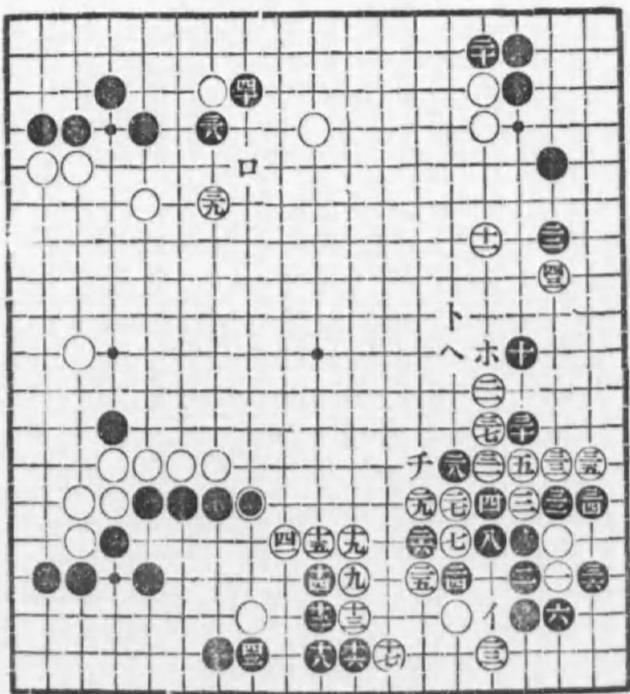
甲圖 四日目



●第三白對

白が④と打つた時に黒が⑤とツケたのは此碁の最後の勝負の處です。黒若し⑥の手で⑦にツケると白⑧、黒⑨と引いて居なければならぬ。ソコで白⑩、黒⑪、白⑫と打つて居れば細碁ではあるが白の勝ちである。それで黒は⑬とツケて來られたのである。此時目算して見ると白は確に一目勝ちであると確信したから讓歩して⑭と粘いだ。所が此後の

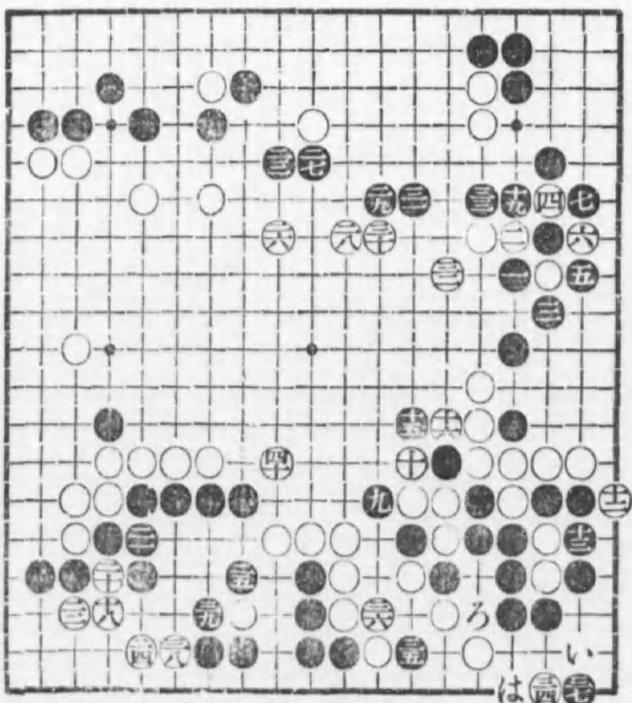
(第二譜)



印の鼻も出て居れば④に押す意味もあり、中原はドツチの地になるか分らぬから⑤とツケて黒の應手を問ふたのであつた。其結果劫争となつたのは止むを得ない。

ヨセに於て黒の方に妙手があつて苦になつた碁であるが、⑥の手で⑦に突んで居る方が利益であつた。其結果は甲圖の如く四目を打抜くことが出来るから確に勝ちであつた。それも知らぬことはなかつたけれども⑧と粘いでも一目勝ちと見たから⑨の突みを見合はせたので、遂に苦となつたのは遺憾であつた。

第三譜 (第三) 八日目 十四手



283  
22

大正十二年六月三十日印刷  
大正十二年七月八日發行

上手の泣手  
定價金壹圓四拾錢



著者 小岸壯二

發行者 濱井松之助

發行者 武居勝治

印刷者 高橋赤次郎

發行所 大阪屋號  
東京市日本橋區數寄屋町一番地  
振替東京一三七七五番  
東京市神田區南神保町九番地  
振替東京二七七二七三番地  
模範棋書發行所  
斯文館

終

